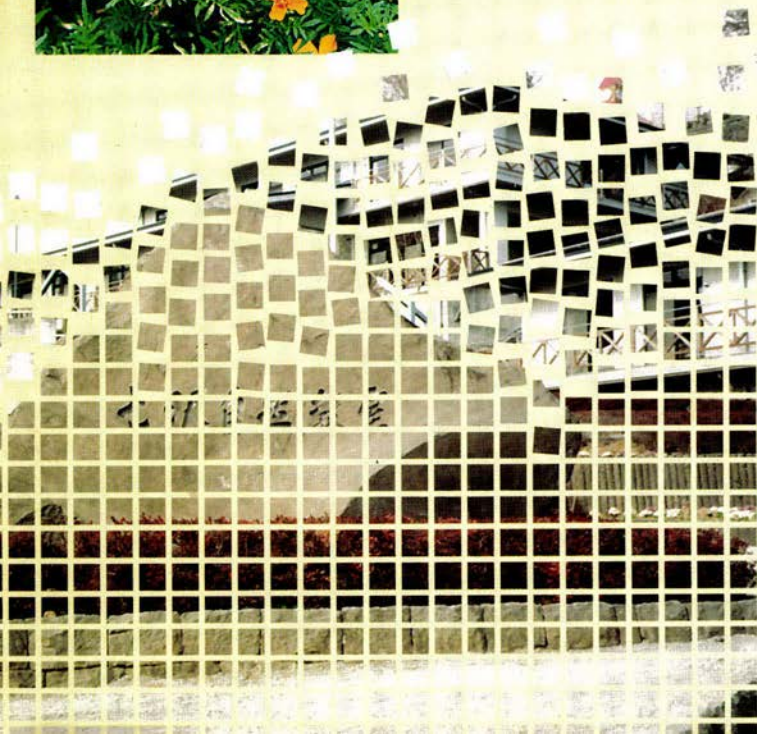


# 日本への回帰

第31集

平成7年 厚木合宿レポート









大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰  
(第三十一集)

—四十回学生青年合宿教室(厚木)の記録より—



## はしがき

いはゆる「戦後五十年」に当つた昨平成七年は、一月の阪神淡路大震災をはじめ、オウム真理教による地下鉄サリン事件その他の予期せざる痛ましい出来事に見舞はれた。とくに後者は伝統文化の一切と隔絶して「疑似国家」建設の幻を追つた確信犯による人災であつたが、なかでも主要マス・メディアの独善はここに極まれの様相を呈したのであつた。それは「言論の自由」とは次元を異する戦後日本が内包してゐる宿痾に根ざした偏向でもあつた。

司法・行政・立法の三権は相互に牽制しあふことで行き過ぎの誤りなきを期す建前になつてゐる。しかし、いまや「第四権力」とさへいはれるメディアを掣肘するものは制度的には何もなく、わづかにその掌についてゐる者の見識と良識を信じる他に部外者には方途がないのである。「批判に曝されないものは墮落する」との自戒を欠いたとしか思はれない主流マス・メディアの独善は、「戦後五十年報道」においてまさに徒花の如くに咲き誇つた。

ここ数年来、とくに顕著になつてゐる自国の非を敢へて論ひ、自国の立場を捨てて顧みない迎合的自虐的な報道と論説は、生業にいそしむ国民各層の心に深い影を落した。善意に発

した読者からの「反省の弁」が投書欄に溢れてゐる。「新聞に出てゐた」と言へば、それはそのまま「事実」と同義のこととして通用するほどに、マス・メディアとりわけ新聞の影響力は大きいのである。その記事のいくつかはまた全国の学校現場でプリントされ教材となつて、次代を担ふ少国民の脳裡に「歪んだ自画像」を日々、刻みつけてゐる。深層に悪しき日本人像を刻印されてしまつた児童生徒の遣り切れなく屈折した心理と「いちめ」は関係がないとはいへないはずである。

五月二十三日付の某有力紙は社説の中で次のやうに説いて、自国の立場を貶めてゐた。

ドイツは、無条件降伏の日である今月八日の式典に米英仏口の首脳を招いた。ヘルツォーク大統領は、欧州を廢墟にしたナチスとドイツ国民の責任を、ドイツ人は五十年前よりも明確に認識しているといい、終戦を「未来への扉」と位置付けた。

日本はどうだろう。多くの国会議員がいまだに歴史の清算を拒む。終戦記念日に日本の首相が終戦の意義と世界の将来を、かつての連合国やアジア諸国の首脳たちと語り合う場面が想像できるだろうか（朝日）。

またしても「ドイツに見習ふべし！」であつた。閣僚のオフレコ発言を隣国の報道機関に内報した事件（十一月）における新聞記者のモラルの低劣さは誰の目にも明らかであるが、



半面の事実を織り交ぜた右の如き論説は質の悪い使噺といふ他はなかつた。

暮も押し詰つた十二月三十日の公共テレビでも「戦後五十年・世界と日本」と題する特集番組の中で、ベルリンにおける五月八日の欧州戦線終結五十周年記念式典の模様を写し出し、「昨日の敵は今日の友人となつた」との仏大統領の演説の一節を字幕つきで流して、「ことは日本の戦後補償のあり方が問はれた一年でもありません」とコメントしてゐた。

しかし、何度でも言はなければならぬ。わが国は全連合五十五ヶ国と講和条約・外交協定を締結し、場合によつては賠償を支払つて来た。平和的国交関係の樹立ほどに確かな戦争の外交的後始末はない。前記の朝日新聞の社説の伝でいへば、交戦相手との和解の握手は既に四十年以上も前に済んでゐるのである。その結果が、昭和三十一年十二月の国際連合への全会一致による加盟実現であつた。旧連合国の国際組織として戦時中の昭和二十年六月に署名された憲章にもとづいて発足したのが国連である。その国連への加盟実現はわが国にとつてまさに象徴的な意味を持つのである（現在、わが国は加盟一八五ヶ国のうち、二三・九五％と二番目の分担金拠出国となつてゐる）。

ドイツは冷戦による東西分裂もあつて、旧交戦国との講和条約を結んでゐない。一時は同盟関係にあつたとはいへ、戦前・戦中・戦後、それぞれ別箇に歩んで来たわけだから、ド

イツを例示しながら「日本はどうだろうか」などと疑念を提起すること自体、メディアの墮落を証明してゐる。しかし、繰り返し報じられたことから、口を開く人の中で「日本もドイツのやうに………」と発言する者が圧倒的に多くなつてゐる。

もし、ドイツから学ぶものがあるとしたら、五月八日を「ナチスの暴政からの解放の日」として捉へることで、ナチスの行為とドイツ民族との間に一線を画して、自らを守らうとする強健かさである。ナチスの行為は戦争とは直接、無関係の「人種優生論」に基づく国家的規模の計画的継続的な「殺人のための殺人」であつた。「個人補償」はこの延長上にある。

それにしても「多くの国会議員がいまだに歴史の清算を拒む」とは軽々しい社説であつた。かつて小林秀雄氏は「反省とか清算とかといふ名の下に、自分の過去を他人事の様語る風潮」を鋭く批判したが、ドイツでの五十周年式典を評価しながら、自国のこれまでの外交的努力と経緯を一顧だにしないとは、まさに異常なことである。何が「自分の過去」なのかわからなくなつてゐるとしかいひやうがない。

かうしたマス・メディアが流す膨大な情報に抗することは容易なことではなく、祖父や父の時代をこれ以上辱しめることは承服しがたいとして地道に展開された署名活動（五〇六万余名）によつて辛うじて「謝罪」「不戦」の文言が削られ衆院のみの採択（全会一致の慣例を破

つた出席議員半数による多数決といふ異例づくめ」とはなつたが、「戦後五十年国会決議」が通つてゐる（六月九日）。そして首相（社党委員長）は「国策を誤つた」旨の談話を出してゐる（八月十五日）。これらには自虐的迎合的なマス・メディアの存在があづかつて力あつたのである。

しかしながら、どうしたらかくまで自国の立場に冷淡になれるのだらうか。どこまで自国の歩みを貶めたら気が済むといふのだらうか。それはそのまま自分の父や祖父の歩みではないのか。即ち「自分の過去」ではないのか。いまこそ「自分自身の人生観を鍛へる」本當の学問の興隆が願はれてならない。古代まで連綿として遡り得るわが国の文化的歴史的土壌に根ざした学問である。世界のどこの国に行つても通用する心豊かな青年の輩出を願ひつつ、昨夏も数へて四十回目の宿泊研修を営んだ。その記録集がこの冊子である。行間にこめた私共の意図するところをお汲みとりいただけたら幸ひである。

最後に当たり、長谷川三千子先生、小川三夫先生には御講義御講話要旨の掲載をお許しいただいたばかりでなく、御懇切なる御加筆を賜つたことに深甚なる感謝を申し上げたい。

平成八年一月十五日

大学教官有志協議会  
国民文化研究会

# 目次

はしがき

## 講義

第一日（八月四日）

歴史の解釈…………… 亜細亜大学教授・文学博士 東中野 修道…………… 1

第二日（八月五日）

敗戦の克服…………… 埼玉大学教授 長谷川 三千子…………… 21

戦争と文学…………… 神奈川県立百合丘高等学校校長 国 武 忠 彦…………… 61

「戦前戦後を貫くもの」（全体研修）…………… 79

第四日（八月七日）

天皇と国民——かへりこぬ人をおもひてうれひはふかし——

…………… 九州造形短期大学講師 小 柳 陽太郎…………… 101

## 講話

木のいのち木のこころ——西岡常一棟梁と私——

…………… 鷗工舎・舎主 小 川 三 夫…………… 125

若き友らへ語りかける言葉——観察の目より語り合ふ仲へ——

……………(社)国民文化研究会常務理事兼事務局長 長内俊平…………… 151

### 短歌入門

短歌創作導入講義……………戸田建設(株)開発計画部勤務 青山直幸…………… 173

創作短歌全体批評……………福岡県立春日高等学校教諭 與島誠央…………… 191

### 青年の言葉

ドイツに留学して……………麻生飯塚病院循環器科医師 長澤一成…………… 207

恵まれた日々を振り返つて……………(株)BBS金明・代表取締役 中田一義…………… 215

歌とともに教職十年……………船橋市立法典東小学校教諭 竹内孝彦…………… 223

一年の歩み……………大成建設(株)国際事業本部企画推進室長 山口秀範…………… 233

合宿教室のあらまし……………戸田建設(株)開発計画部勤務 青山直幸…………… 245

合宿詠草…………… 273

あとがき



講義

# 歴史の解釈

亜細亜大学教授・文学博士

東中野修道



- 〔一〕 戦後を形作つてきたもの
- 〔二〕 避けられなかつた日米開戦
- 〔三〕 侵略か、侵攻か、自衛戦争か
- 〔四〕 日本の戦後処理はすべて完了
- 〔五〕 大東亜戦争の光と影



〔一〕 戦後を形作つてきたもの

今年(一九七五年)は戦後五十年。五十年前に終つた大東亜戦争のことが多くの人々の関心を呼んでゐます。今日はその大東亜戦争を中心にお話ししてみたいと思つてをります。ただ本論に入りま  
す前に、戦後の五十年を形作つてきた思想的な枠組みについて一寸触れてみたいと考へてを  
ります。

戦後を築いてきた思想、それは(戦後民主主義を別にすれば)三つあつたと考へます。一つ  
は社会主義といふイデオロギイでした。イデオロギイと言つて分りにくければ正義の体系と  
申しませうか、社会主義が正義の体系として、今日では一寸想像しにくい程、幅をきかせて  
きました。

その社会主義(即ちマルクス主義)の歴史観は階級闘争史観です。資本家階級と労働者階級  
の闘争が、常に歴史の在り方を決定してきたといふのが、階級闘争史観です。戦前の日本に、  
これを当て嵌めてみますと、明治以降の日本の歴史は資本家階級と軍部がいかに大陸進出に  
血道を上げてきたか、それにたいして如何に労働者階級が抵抗し戦つて来たかといふ、善玉

と悪玉の日本近現代史観になります。日本が戦争に敗れたことから、このやうな、戦前の完全否定は、何の抵抗もなく人々の心に受け入れられました。日本の近現代史を完全に否定し、さうして新しい日本を作る、搾取のない平和で豊かな日本を社会主義革命によつて建設する、このやうな青写真が長く人々の心を呪縛してきました。

次に二つ目の枠組みは平和主義です。戦争は悪、平和は善といふ、硬直した二者択一を、平和主義は人々に突き付けてきました。たしかに戦争と平和の二つを並べて、どちらを選ぶかと言はれれば、誰しも平和を選ぶでせう。しかし私たちの祖国日本が侵略された時はどうすれば良いのか。戦はないのでせうか。侵略を許して奴隷の平和に甘んじるのでせうか。かかる極限状況をタブー視し、つひには否定して来た処に、平和主義の大きな欠陥があります。ただ単に戦争は嫌だといふのでは、平和主義といふより、厭<sup>えん</sup>戦論に過ぎません。そのうへ真に戦争をなくすにはどうすれば良いかと願つて、戦争を直視してきた訳でもありません。

世界は平和だといふ「幻想」のなかに私たちは生きてきてゐるのではないでせうか。一つ以上の政府がかかはつて一年間に一千人以上の死者を出した紛争を戦争と規定しますと、第二次大戦後に世界で勃発した戦争は一四九件にのほり、二千三百一四万二千人の戦死者が出たと、ワシントンの世界的な調査機関ワールド・プライオリティーズの報告書（産経新聞平



成五年十一月十日付）は伝へてゐます。戦争は絶えないといふ永遠不変の世界の現実に、私たちの眼を塞がせてきたのが、外ならぬ平和主義でした。そして日本さへ平和であればよく、世界が戦争となつても我れ関せずといふ、一國平和主義を生んで来ました。

この平和主義から、大東亜戦争否定論が出てくることは言ふまでもありません。戦争は悪、平和は善とおまじなひのやうに唱へられるからです。しかし（決して戦争を好む訳ではありませんが）佐藤和男先生が言はれるやうに、近代国際法が「決闘の法理」に立つて戦争を「伝統的に合法」としてきてゐることを忘れてはなりません。我が国に戦争を仕掛ける国がないとも言へません。ところで、この平和主義を一寸押し広げますと、資本主義国は戦争愛好国、社会主義国は平和愛好国といふマルクス主義の国家観となることに気づか

されます。平和主義とマルクス主義は中心を同じくする同心円の關係にあります。

最後に三つ目の枠組みは東京裁判史観と呼ばれるものです。東京裁判は多くの人々が指摘してをりますやうに、「法は遡及せず」といふ大原則を無視して事後法によつて裁判を行ひました。「証人ヲ出廷セシメ、且ツ之ヲ直接訊問、反対訊問スル」といふ、「英語ヲ話ス国民間ニ於テ広く認メラレタ」根本原則をも蹂躪し、証人を出頭させないまま、宣誓口述書のみを提出させて審理を行ひました。偽証罪を設定せず伝聞証言までも採用し、およそ裁判の名に値しない裁判を行ひました。

この不当な東京裁判と同じやうに、満州事変以来の日本を、侵略戦争を展開した犯罪国家と断罪する歴史観のことを、今日では、東京裁判史観と呼んでをります。東京裁判史観が昭和六年（一九三一年）以降の日本を断罪するのにたいし、マルクス主義史観は明治維新まで遡つて資本主義国家としての明治以降の日本を断罪してゐます。

さう考へてきますと、マルクス主義史観と東京裁判史観と平和主義との間に奇妙な一致点があることに気づかされます。三者ともに、その中心に、戦前の否定といふイデオロギイを有してゐる。しかし社会主義が崩壊し、一國平和主義も破産した今日、はたしてそのやうな解釈のままではよいのか。もう一度史料に即して大東亞戦争を根本的に考へ直してみたいとい

ふのが、この導入講義の趣旨です。

〔二〕 避けられなかつた日米開戦

今から数年前フランクフルトの国際空港でのことでした。帰国便の手続きのため順番待ちをしてゐた時、不意に、後ろの見も知らぬ外国人から、声をかけられました。「日本は何故アメリカと戦争をしたのか」とそのご婦人は言ふのです。皆さんならばどう答へますか。何分にも急な質問でしたから、「何故、私に聞くのですか」と私は問ひ返しました。すると彼女が言ふには、「日本人に質問をしてみるのだが、誰も知らない。誰も教へてくれない」といふのです。そこで、「原因は石油です。アメリカが石油の対日禁輸を行ったから、日本とアメリカは戦争になつた」と私が答へますと、更に彼女は「あなたは何故知つてゐるのか」と質問してきます。一言「歴史家ですから」と答へざるを得ませんでした。そんなことがあつたのですが、考へてみますと、日本の真珠湾攻撃は知られてゐても、何故さうなつたのか、その原因は余り知られてゐないやうに思ふのです。

さて戦後五十年が経ち、重要な史料が公刊されるやうになりました。なかでも小堀桂一郎

先生たちのご努力で『東京裁判却下未提出弁護側資料』（国書刊行会、菊池寛賞受賞）が刊行された意義は本当に大きいと思ひます。その第五巻に、「中国工農紅軍北上抗日宣言」が収録されてゐます。「中国『ソヴェート』政府ノ工農紅軍ハ（中略）一切ナラズ（中略）対日宣戦ヲ公ニシ対日宣戦ノ緊急動員令ヲ下シ（中略）戦争ニ備ヘ」云々と宣言したのは、中華「ソヴェート」共和国中央政府主席毛沢東でした。シナ事變の勃発する昭和十二年（一九三七年）の四年前に、毛沢東は対日宣戦布告を行つてゐた訳です。

他方、そのシナを支援する米国は、シナ大陸で日本軍と交戦することになる有名な「空飛ぶ虎」Flying Tigersを、ローズヴェルト大統領の「承認」のもと、昭和十六年（一九四一年）一月から編制にとりかかります。勿論、「空飛ぶ虎」は現役の空軍パイロットで構成されました。が、「国際法違反を回避するため」、これは義勇軍と称されます。そのことが一九九一年（平成三年）七月六日の「ロサンゼルス・タイムス」によつて明らかとなりました。つまり真珠湾攻撃の約一年前に、既にアメリカは国際法違反を犯してまでしてシナを軍事的に援助してゐた訳です。

そのアメリカが昭和十六年七月二十五日、在米日本資産凍結令を公布し、翌日英国が、翌々日蘭印がアメリカにならひます。事実上日本の世界貿易は停止し、貿易立国日本の生存に、

重大なる脅威が加へられました。そして八月一日アメリカは対日石油禁輸を断行します。その結果、「液体燃料ニ就キマシテハ（中略）明年六七月頃ニハ貯蔵ガ皆無トナル」とは、鈴木企画院総裁の御前会議における説明です。石油がなければ、産業も、市民生活も、総てが停止します。アメリカは日本の喉元を絞め、日本の窒息死を待った、或いは日本との戦争を待った。

そのことを如実に示すのが、その一週間前のローズヴェルト大統領の演説です。石油を日本に輸出しながら石油の節約を国民に訴へるのはをかしいではないかといふアメリカ国民の不満に答へて、ロ大統領は、日本に石油の供給を停止すれば日本は北方に石油資源をもたないから日本は「蘭印におしかけ、既に一年前に、この地域で戦争が起つてゐた」筈だ、従つて米国の利益のために「日本に石油を供給するといふ手があつたわけで、この手は二年の間役に立つた」と演説してをります。これによれば、石油の禁輸は戦争をもたらすといふ認識を、つとに大統領は持つてゐた事になります。従つて八月一日の禁輸決定の時点で、日本と戦争になるも止むを得ないといふ重大決意を、既に固めてゐた事になります。

直ぐに戦争とならなかつたのは、アメリカの戦争準備に遅れがあつた、そのため時間が必要だつた。「会談を続けて時間を稼ぐためには、藁にもすがりつきたい気持ちであつた」とは、

ハル國務長官の言葉です。日本はアメリカがそこまで決意してゐるとは知らず、何とか会谈（日米交渉）を通じて局面の打開を図らうとしますが、十一月二十六日、運命のハル・ノート（ハル覚書）が突き付けられる。ハル・ノートはシナ大陸からの日本軍の無条件撤退と、三国同盟の有名無実化、蔣介石政権以外のシナの政権の否認等を骨子とするものでした。

それは従来のアメリカの主張を遙かに逸脱してをりました。ですから、「二十八日の戦争会議で、二十六日の提案（註、ハル・ノート）を日本側が受諾する事など、ほぼ無理だと指摘された」とは、ハル長官の証言です。その二十八日の戦争会議の議題は、スチムソン陸軍長官の証言によれば、「我々の方はさして重大な危険に晒されることなく、まづ日本側に攻撃の火ぶたを切らせるところまで日本を追ひ込むには、どうすれば良いかといふこと」でした。かうしたアメリカの固い戦争決意をハル・ノートの形で突き付けられて、日本はもはや外交交渉では埒が明かない、ついでには石油のあるうちにと考へ、真珠湾攻撃に踏み切ります。日本の喉元を絞めたアメリカに、やむなく日本は空手チョップを見舞つた訳です。

それこそがアメリカの狙ひでした。アメリカはドイツといふ正面の敵と戦つてイギリスを支援したい、そのために、日本といふ裏口から、欧州（表口）の戦争に入つて行つたのだといふ所謂「裏口参戦説」は、既に、チャールズ・ピアードの「ローズヴェルト大統領と一九



四一年の戦争の到来』(一九四八年、六一四頁)といふ本や、チャールズ・タンシルの『裏口から戦争へ—ローズヴェルトの外交政策』(一九五二年、六九〇頁)といった浩瀚な研究書の主張する説です。なほ大東亜戦争について更に詳しく勉強をしたいといふ方には、ジョン・トーランドの『大日本帝国の興亡』(全五巻、毎日新聞社、昭和四十六年度ジュリッツア賞受賞)や、渡部昇一先生の『かくて昭和史は甦る』(クレスト社)、小田村四郎先生の『敗戦後遺症の克服』(国文研叢書)ならびに歴史検討委員会編『大東亜戦争の総括』(展転社)をお薦めいたします。

### 〔三〕 侵略か、侵攻か、自衛戦争か

このやうに見てまゐりますと、「ハル・ノート」がある限り、日本とアメリカの戦争は避けられなかつた。しかも第一発を撃つやうに仕向けたのはアメリカの方であつた。「米英両国ニ対スル宣戦ノ詔書」が明らかにしてゐるやうに、日本は国家としての存立が危殆に瀕したために「自存自衛」を目的として蹶然と起つたのでした。

さう言へば奇異に響くかも知れません。しかし最近出たハルミトン・フィッシュの『日米・開戦の悲劇』(PHP文庫)といふ本も、さう断言してをります。一九四五年(昭和二十年)ま

で二十七年間も共和党議員だったフィッシュは、「恥づべき最後通牒」たるハル・ノートを突き付けられて、日本は、「自殺するか、降伏するか、さもなければ戦ふか」、三つの選択の前に立たされたと回想してゐます。

従つて、今日大東亜戦争と言へば無謀な侵略戦争と言はれるのが落ちですが、無謀ではなかつた。自殺か、降伏か。それは出来ない相談でした。ですから、好むと好まざるとにかかはらず、戦ふといふ道に日本は入つて行かざるを得なかつた訳です。

いや、それでも侵略であつたと思はれる方がいらつしやるかも知れません。最初に侵略戦争だと言つたのは東京裁判です。その東京裁判で、日本は *aggressive war* を行つたと非難されました。しかし度々指摘されるやうに、*aggressive war* を侵略戦争と訳するのは、明らかな誤訳です。*aggressive war* は *war of unprovoked attack* のこと、正しくは先制攻撃戦争「侵略戦争」と訳されます。侵略とは「広辞苑」も言ふごとく「他国に侵入してその土地を奪ひとる」とのことですから、*war of aggression, pillage and annexation* と訳されます。

その意味で言へば、イギリスは今なほ香港を侵略してゐます。中共（中華人民共和国）はチベットを侵略してゐます。ソ連は千島列島を侵略し、アメリカはインディアンから土地を奪ひ、一八九三年（明治二十六年）にハワイを略奪しました。「米国民を代表して王国転覆とハ

ワイ先住民の民族自決権利略奪を謝罪する」とは、ハワイ王国転覆百周年にあたる平成五年に、アメリカ上院が行った公式謝罪決議です。

戦争と言へば現代の日本人には大東亜戦争しか頭にありませんが、いつたい東アジアにおける朝鮮戦争や、ベトナム戦争や、中越戦争は、何戦争だったのでせうか。或いは遙か昔のアヘン戦争は何戦争だったのでせうか。大東亜戦争を侵略戦争だと言ふ人に問ひたいものです。

#### 〔四〕日本の戦後処理はすべて完了

それでも日本が敗れたのは紛れもない事実ですから、日本は戦後莫大な補償を行つてまゐりました。安村廉氏の「急性『戦後補償病』を治療する」(『正論』平成六年一月号)や『産経新聞』平成六年九月十二日号によれば、捕虜虐待など戦時国際法違反に問はれたBC級「戦犯」が、満足な裁判もないまま、米、英、仏、蘭、中、ソ、豪、フィリピンなど九ヶ国によつて裁かれてをります。フィリピンの軍事法廷では、一女性が着物の下にザルを入れて妊娠を装ひ日本軍に暴行されたと訴へました。それでも被告が処刑されました。まことに悲劇的

です。判明してゐるだけでも、かうして、一一七六人が処刑されます。日本は血をもつて「戦争犯罪」を償つた訳です。

又、賠償金や借款の形でも償ひました。まづ旧捕虜への償ひですが、サンフランシスコ講和条約の署名国を中心とする十四ヶ国と交された交換公文（昭和三十年一九五五年）により、総額四百五十万ポンド（四十五億円）が支払はれます。二国間の賠償協定は昭和二十九年（一九五四年）にまづビルマと、次いでフィリピン、インドネシア、南ベトナムと締結され、更に準賠償としてはカンボジア、ラオス、マレーシア、シンガポール、モンゴル、ミクロネシア、韓国など八ヶ国に、供与がなされます。年年歳歳、以上の十二ヶ国へ支払はれた額は、総額にして約十五億ドル（約五四〇〇億円）に上ります。ちなみに昭和三十年（一九五五年）度の日本の当初予算規模が九千九百十四億円でした。

他方、昭和四十年（一九六五年）に日韓国交正常化が実現して、無償で三億ドル、有償で二億ドル、この年の当初予算の五パーセントに相当する総計一千八百億円が支払はれます。韓国代表の金鍾泌がいみじくも言つたやうに、「兩國ともまだ小さな国だった」時代です。このやうにして日本は賠償金を払ひつづけて昭和五十一年（一九七六年）に支払ひが終り、これにより日本の戦後処理はすべて完了します。

なほ、昭和三十年（一九五五年）スイスに約十一億円の補償を支払つたのをかはきりに、その後スペインに約二十億円、スウェーデンに約五億円、デンマークに約七億円、オランダに約三十六億円の補償金を支払つてをります。最後に、中共は昭和四十七年（一九七二年）の日中共同声明により、「中華人民共和国政府は、日中両国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄する」と宣言してゐることも付け加へておかねばなりません。

### 〔五〕大東亜戦争の光と影

ところで大東亜戦争は東アジアの解放を目的として戦つたといふ意見がありますが、言ひ過ぎではないでせうか。開戦の詔書が「帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と戦争目的を謳つてゐる、そのことを忘れてはならないと思ひます。ただ、日本は東南アジアで英国やオランダと戦ひ、両国を打ち破つた。その日本の勝利が、「白人至上の伝説」を打破し、「アジアの全域を究極の独立に導く一連の事件の動機」となつた。さういふ風に言ふことは可能です。

イギリスの著名な作家ノエル・バーバアは『不吉な黄昏』（中公文庫）の末尾で、「今やシ

ンガポールを自らの国とするアジア人たちは、皮肉なことだが、日本軍へある程度は感謝すべきである。……白人基地を取り巻く畏敬の念と神秘的な雰囲気は永久に失はれてしまった」（原文現代仮名遣ひ）と述べてをります。このやうな見解は一人バーバアだけのものではありません。マレーシアのノンチック元上院議員は「私たちは、マレー半島を進撃してゆく日本軍に歓呼の声をあげました。敗れて逃げてゆく英軍を見たときに、今まで感じたことのない興奮を覚えました。しかも、マレーシアを占領した日本軍は、日本の植民地としないで、将来のそれぞれの国の独立と発展のために、それぞれの民族の国語を普及させ、青少年の教育をおこなつてくれたのです」と語つてゐます。このやうな東南アジアの人々の声は終戦五十年国民委員会の特別企画「独立アジアの光―東南アジアの歴史と現代」といふビデオに収録されてをります。是非ご覧ください。

もう一人紹介させていただきます。終戦五十周年国民委員会の小冊子「アジアと日本の大東亜戦争」によれば、アムステルダム市のサンティン市長（その後内務大臣）はかつて次のやうに述べてゐます。「本当に悪いのは侵略して権力を振つてゐた西欧人の方です。日本は敗戦しましたが、その東亜の解放は実現した。即ち日本軍は戦勝国の全てを東亜から追放してしまつた。その結果、アジア諸民族は各々独立を達成した。日本の功績は偉大であり、血を流して

戦つたあなた方こそ最高の功労者です。自分をさげすむことをやめ……その誇りを取り戻すべきであります」。

まことに静かな誇りと喜びの持てない状況が続いてをります。たとへば昨年社会党の村山首相はマレーシアのマハティール首相に「謝罪」をしてをります。これにたいしマハティール首相は「両国関係に現実に影響を及ぼしてゐる問題には何もせず、過去の世代が起した事には謝りたいといふ日本の首相の考へはとても理解しがたい」と憤慨したものです。

更に一昨年の「エコノミスト」(平成五年八月二十一日号)は社説で「日本の行為のどこが卑劣な行為にあたるのか、それを確信することは難しい」と断つた上で、「仮に、もし、今日の日本政府が五十年前の先人の犯した行為について今なほ済まないと言ふべきであるとするならば、それなら、さう、他の国々も言ふべきであらう」と論評してをります。

それでもなほ謝罪をしたがるのは何故なのでせうか。既に述べましたやうに、戦後を導いてきたイデオロギイは、戦前の日本を否定するマルクス主義史観と平和主義と東京裁判史観でした。その二つが破産した今日、残る東京裁判史観を力説することが、社会主義者と進歩的文化人の存在理由となつたからだと考えられます。しかも日米開戦の真因を突き詰めて考

へて行けば、日本の侵略戦争であつたと言ふ事は難しくなる。いきほひ力点が謝罪とか日本軍の残虐行為とかに移る訳です。

たとへば、戦前、満州で、七三一部隊が「生体実験した」と主張する森村誠一氏は『続・悪魔の飽食』に、生体実験の証拠写真として三十五枚を掲げました。ところが、そのうちの二十枚は、『明治四三、四年南満州ペスト流行誌付録写真帖』から、ペストの猛威と闘ふ医師や患者などの写真を採つて、人為的な修整を加へたものでした。氏もそのことを認め、改版で削除してをります。

他方、南京大虐殺も盛んに叫ばれてをります。しかし今年一月の阪神大震災の時に外国人虐殺にかんする記録がないやうに、南京陥落後のシナ人虐殺にかんする公的な記録は一つもありません。シナ事変一周年時の蒋介石の声明も、各種英文雑誌の一周年記念号も、一切記録してをりません。公的な記録にないといふことは無かつたといふことを意味する。南京大虐殺は「作られた事件」なのです。どのやうに作られて行つたか、そのことは富士信夫先生の『南京大虐殺はこうして作られた』（展転社）が詳しく辿つてをります。

また最近では「従軍慰安婦」が問題になつてをります。「従軍看護婦」といふ言葉はありました。また、「従軍慰安婦」といふ言葉はなかつた。ただ、兵隊に慰安所で肉体を提供する女



性はありました。「戦場慰安婦」が業者に募集されて戦場の兵隊に慰安に行つた事は事実です。しかし日本軍が募集したとか、本人の意思に反して日本軍によつて強制連行されたといふことを裏付ける史料は、存在しません。『いわゆる従軍慰安婦問題の調査結果について』（平成五年八月四日）と題された政府の調査結果の報告書においても強制連行を裏付ける史料は、驚くべきことに、提示されなかつた。従つて平成五年八月六日と七日の「産経抄」は、「従軍慰安婦問題の政府調査報告書に、数多くを強制連行とみなした事例はでてこなかつた」と書いた訳です。

ちなみに平成四年（一九九二年）五月十二日の西日本新聞によれば、元「戦場慰安婦」の韓国入女性が下関郵便局に軍事郵便貯金の払戻を請求したことがあります。この女性が昭和十八年三月から二十年九月までの三十ヶ月間にビルマで得た貯金額は二万六一四五円であつたさうです。ひと月当り八七一円の貯金高になります。当時の初任給は大卒で八十円でした。戦時加算を含む軍人の俸給がビルマ等の激戦地に出征した時でも上等兵で二十五円、少尉で一七五円、少佐で四〇〇円、少将で八二七円であつた当時の話です。陸軍少将よりも月収が多かつた。その一事からしても、如何に職業として成り立つてゐたかが分ります。戦場慰安婦問題については、上杉千年先生の『検証従軍慰安婦』（全貌社）や、中村榮先生の『慰安婦

問題の虚像と実像」(国民会館叢書五)が好書かと存じます。

勿論、日本軍に残虐行為の事実があつたのであれば、事實は事實として認めなければなりません。しかし事實と裏付ける史料もないのにあれこれ言ふのは非学問的であり、余りに自虐的です。自分で自分を虐待することを止め、自国の歴史に、静かな誇りを取り戻す必要があります。

最後に、戦後五十年、非行少年の再出発に全生涯を捧げて来られた花輪次郎さんといふ方が、『家庭の愛をください』といふ本のなかで、かう述べられてゐます。「人間は自分の心に大切な物を見失つたとき、迷ひや過ちを犯す。(中略)人間は、自分の心に多くのよそ者を住まはせてゐる人ほど、豊かに強くなれると言はれてゐる。そして、心の中に住むよそ者は、その人を励まし、支へ、時には叱つてくれる」。心の中に住むよそ者とは、まづお父さん、お母さんであり、次いで友人であり、先輩であり、先生であり、そして歴史上の人物でせう。具体的には、その言葉でせう。私たちは自分自身の心に住む大切な父祖の言葉を見失つてきてゐるのではないか。自己の生き方を導き、励まし、支へてくれる、そのやうな言葉を、私たち一人一人が今こそ見出すべき時に来てゐるのではないでせうか。どうかこの合宿教室がそのやうな人、そのやうな言葉との出会いとなる一つの機縁になればと願つてをります。

講義

敗戦の克服

埼玉大学教授

長谷川 三千子



はじめに——戦争とは何か——

「戦争は一種のゲヴァルト行為である」

ポツダム宣言に見る戦争の本質

火の玉の一億人が戦争を止める時

《質疑応答》

## はじめに——戦争とは何か——

お早うございます。長谷川でございます。さて、今日は、私は思ひ切り理屈ばつた話をしようと思つてをります。この五十年間、日本人が大東亜戦争を振り返るとき、その振り返り方といふものは、どうも余りにも実感に頼りすぎてゐたのではないか——「あの戦争はいけないことであつた」と言ふ人も、「いや、違ふ」と言ふ人も、どちらもただ実感といふものだけにおぶさつてものを言つてきたのではないか。そしてそのことが、大東亜戦争といふものを本当に正しく振り返ることをさまたげてきたのではないか、といふ気がするのです。

たとへば皆さんが、実際に大東亜戦争を経験した世代の人に、実感にのみもとづいた意見を聞かされても、ピンと来ないといふことが多いと思ひます。それは当然のことなのです。体験した人にしか解らない話を、そのまま、体験したことのない人間にぶつけられても、解らないものは解らない、でおしまひになつてしまふ。その両者をむすび合はせることができず、解るためには、両者の間に、ピンと一筋「共通の理屈」が通つてゐなければならぬと思ふのです。「共通の理屈」の筋をしつかりと作り上げるといふことを、われわれはこの五十年間、



怠つてきたのではないか。

そのやうな反省に立つて、今日は一つ、徹頭徹尾、「理屈の話」をしようと思つてをります。——と言ひながら、こんな写真をお配りしてゐるのですが、これは、七月二十二日号の『週刊現代』を買ひ占めまして、そこから切り抜いてまゐりました。もとは、平凡社の『トランクの中の日本』といふ写真集からとつたもので、ジョー・オダネルといふ人の撮つた写真です。この写真を見たときに、何か、「これだ！」といふ感じ——ここに何か自分の永らく忘れてゐた何かがある、といふ感じがしてならなかつた、それを皆さんにもお目にかけてたくて、持つてまゐりました。

ちらつと見ただけですと、この写真はまるで、弟の子守を言ひつかつて、おんぶしたまま遊びほうけて夕飯に遅れて叱られてふくれてゐる男の子、といったや



「週刊現代」(一九九五年七月二二日号)

うに見えます。ところが、実は、おんぶしてゐる弟は死んでゐるのです。一九四五年秋、長崎」といふところからもわかるやうに、まだその頃は原爆の後遺症でぞくぞくと人が亡くなつてゐた。その自分の亡くなつた弟をおんぶして焼き場まで来た男の子、それをアメリカの従軍カメラマンが撮つた写真なんです。

もう一つ、申し上げておかなければならぬのですが、写真や映像といふものは非常に気をつけなくてはいけない。と言ひますのも、プロの写真家といふものは、自分が見せたいと思つたものを、人に見せることができるからなんです。われわれ素人は、素朴に、写真とは「真実をそのまま写したものだ」と思つてしまひますが、決してさうではない。写真家にとつての写真といふものは、われわれの書く論文と同じものなんです。写真や映像に騙されてはいけない、といふのもそのことなの

です。それを心得たうへで、なほかつ、この写真が語りかけてくるものがあるとするれば、それは何なのか？——それを、あとでまたもう一度、「理屈の話」を終へたうへで、ふりかへつてみたいと思ひます。

さて、今日お話ししようと思つてをります「理屈の話」といふのは、或る意味で非常に簡単な話です。すなはち、戦争とはどういふことなのか。戦争に敗けるとはどういふことなのか、そして戦争に敗けた者はどうしたらよいのか——さういふ話です。これを、お渡しした三つの資料（『ポツダム宣言』『終戦の詔書』『内閣告諭』）を適宜に参照しながらお話ししてゆきたいと存じます。

さきほど申しましたやうに、戦後の日本は実感主義でものを考へるのが主潮になつてゐた。さういふ実感主義から戦争を振り返ると、まづどういふところが目につくかと言へば、たとへば食物が少なくてお腹がペコペコであつた、空襲で爆弾が落ちてきて火の中を逃げまどつて、とても怖かつた、といった記憶が真先にうかんできます。あるいは、たまたま上官が怒りつぼくて狭量な人物だつた、といふやうな人にとつては、日本の軍隊は地獄だ、といった印象のみがのこるでせう。それらは皆、それぞれに戦争の一断面であるには違ひない。しか



し、例へてみれば、それは巨大な象の足元に群らがる蟻の一匹一匹から見た象、といったものであるにすぎません。それは、本当の意味での「戦争とはいったい何なのか？」といふ問いへの答へにはなりません。各人の断片的な体験を全体としてつなぎ合はせることができるためには、一度、完全に「実感」や「体験」の地平をはなれて、純粹に理論的に「戦争とは何か？」と問ひかけてみる必要があるのです。

「戦争は一種のゲヴァルト行為である」

そのやうな仕方では、理論的に「戦争とは何か」を問はうとするとき、まづ第一に思ひ浮かべられるのが、クラウゼヴィッツの『戦争論』だと思ひます。彼の有名な、「戦争とは、政治におけるのは異なる手段をもつてする政治の継続にほかならない」といふ定義は、皆さんもお聞きになったことがあるかもしれせん。しかし、ここではまづ、それほどには有名でない、しかしもつとも基本的な定義から出発して考へてみることにしませう。

クラウゼヴィッツは、まづこのやうに戦争を定義してゐます。

「……戦争は一種の強力行為ゲヴァルトであり、その旨とするところは相手に我が方の意志を強要するにある」

この「ゲヴァルト」といふドイツ語は、まことに日本語に訳しにくい言葉で、直訳すれば「暴力」なのですが、日本語で「暴力」といふとすでに「悪いこと」といふ意味がはつきりと出てしまふ。「ゲヴァルト」は、悪にも善にもなりうる、純然たる「力」そのものを指して言ふ言葉なのですが、同時にそれは破壊的な力、暴力的な力であつて、日本語で「精神力」「忍耐力」と言ふやうなときの大人しい「力」ではない——さういふ言葉なのです。

クラウゼヴィッツは、かういふ言葉でもつて戦争を定義し、加へて、さうしたゲヴァルトの行使は「相手のゲヴァルト行使に対抗しようとする」ものなのだと言ひます。つまり、誰かが一方的に暴れまくるやうなものとして戦争といふゲヴァルト行為があるのではない。それはあくまでも二つの力がぶつかり合ひ、対立し合ふものなのだ、といふことです。「戦争は常に二個の生ける力の衝突である」とクラウゼヴィッツは言ひます。

当たり前と言へばまことに当たり前のことなのですが、実は、現在の日本においては、この当たり前しごくのことが丸つきり忘れ去られてゐる。たとへば、今年、国会では「戦後五十年

決議」といふものがなされて、日本が近隣諸国に行つたことについて反省をしたいといふ。これは、いま申し上げたドイツ語に言ふ「ゲヴァルト」ではなくて、まさに日本語で「暴力」と言うときの、その語感にもとづいて、日本の行つた戦争といふゲヴァルト行為を反省してゐるわけです。しかも、それよりもつと問題なのは、そこでは二つのゲヴァルトが真向から対立してゐたのだといふことがまるで忘れ去られてゐる。あたかも日本が近隣諸国をサンドバッグにして一人で叩きまくつてゐたかのごとき戦争観でもつて「反省」をしてゐる。これは、気付いてみれば、たいへん失礼なきめつけです。中国だつて、オーストラリアだつて、決してサンドバッグみたいに何もせずには叩かれてばかりゐたわけではない。彼らも「戦争」をしてゐたわけです。それを、後から完全にサンドバッグ扱ひして「謝罪」したりするのは、それこそが侮辱といふものぢやないでせうか？

さて、次にこの定義においても一つ大切なところは、後半の「その旨とするところは相手に我が方の意志を強要するにある」といふところ です。ここに、いつたい何故人間は「戦争」といふこのすさまじい殺し合ひをするのか、といふ謎をとく一端がかくされてゐます。

単なる力と力のぶつかり合ひといふだけのことならば、これはどんな野生動物においても日常行なはれてゐることなんです。例へばロッキーマウンテンのヤギは大きな角を持つてゐますが、

その角をぶつけ合つてオス同士が喧嘩をする。しかし、それはあくまでも「力くらべ」であつて、その充分に殺傷能力のある角をもつて互ひを殺し合ふといふことにはならない。力の差が明らかになつて、片方が逃げ出せば、そこでお終ひといふ暗黙のルールができ上がつてゐる。そして（よほど生活環境の悪くなつた特殊な場合をのぞいては）同じ種の動物の間での争ひといふものは互ひの殺し合ひにまでは至らず、つねにかうした平和的ルールに従つてゐます。それなのに、何故、人間同士の争ひだけが、こんなすさまじい殺し合ひになつてしまふのか？——それに対する一つの答へが、この「その旨とするところは相手に我が方の意志を強要するにある」といふことなのです。つまり、単に相手を追ひはらつてしまへばことがすむのではない。相手が自分の意志に従ふことを無理強ひせねばすまぬ——これを更にはつきりと言ひますと「交戦者のいづれもが自己の意志をいはば掟として相手に強要するのである」といふことになる。相手を自分の奴隷にするか、さもなければ自分が相手の奴隷にされてしまふか、その二つに一つであるといふことになれば、よほど生命力を喪失した民族でもないかぎりには、死ぬまで戦はざるをえないといふことになります。ここが人間同士の戦ひの怖いところであり、クラウゼヴィッツは、その怖い本質をきはめて明快にえぐり出してみせてゐます。

ついでながら、かうした人間の「戦争」といふ現象のもつ本質的特色を充分に認識したところに、はじめて、戦争を回避する知恵といふものも出てくるわけでして、今年のあの日本の国会決議など見てみますと、つくづく不安になります。今の日本には、戦争を避けるだけの知恵がまったく欠けてゐるのです。

### ポツダム宣言に見る戦争の本質

さて、このやうな戦争についての洞察を見た上で、資料の一の『ポツダム宣言』をふり返つて見ることにいたしませう。ここには、いま見た「戦争とは何か」といふことの骨格が、そのまま現はれてゐます。たとへば第二項や第三項を見て下さい。ここには、戦争が「ゲヴァルト行為」であり、相手に自らの意志を強要するものだといふことが、情け容赦のない形でありありと露骨に出てゐます。ことに、第三項の次の一節などは、非常にリアルな脅迫だつたと言へませう。

三、蹶起せる世界の自由なる人民の力に対する「ドイツ」国の無益且無意義なる抵抗の

結果は日本国国民に対する先例を極めて明白に示すものなり

このポツダム宣言の出されたのは、ちやうど今からほとんどぴつたり五十年前の七月二十六日ですが、ドイツはすでに五月に無条件降伏してゐます。これはもう本当にドイツ全体がバラバラになり、国の体をなさぬといふ形の悲惨な降伏でした。その模様はもちろん日本政府の首脳陣にも伝へられてゐるわけです。それを前提とした上で、さあ、お前たちもさうなるぞ、と言つてゐる。さらにそれに加へて、彼らはかう続けてゐます。

現在日本国に対し集結しつつある力は抵抗する「ナチス」に対し適用せられたる場合に於て全「ドイツ」国人民の土地、産業及生活様式を必然的に荒廢に帰せしめたる力に比し測り知れざる程更に強大なるものなり

つまり、ドイツをやつつけた時は、まだほんの小手調べであつた。お前たちをやつつけるときは、あんなものではないぞ、と言ふのです。

吾等の決意に支持せらるゝ、吾等の軍事力の最高度の使用は日本国軍隊の不可避且完全なる壊滅を意味すべく又同様必然的に日本国本土の完全なる破壊を意味すべし

この「吾等の軍事力の最高度の使用」が何を意味するかは、皆さんにはすぐお解りですね？これは、確かに「日本国本土の完全なる破壊」が現実に可能な「軍事力」——つまり原子爆弾の使用のことです。

この「日本国本土の完全なる破壊」といふ表現は、似たやうな形で、もう一度、この宣言の締めくくりに繰り返されてゐます。

右以外の日本国の選択は迅速且完全なる壊滅あるのみとす

このポツダム宣言の書かれた時点で、すでに原子爆弾の試験は成功してをりまして、この言葉も、単なる脅し文句ではない。このポツダム宣言全体を、「これを呑め。呑まねば殺すぞ」といふ脅迫に仕立て上げてゐるのが、この締めくくりの一文なのですが、それは決して空脅しではなかつたわけです。この降伏勧告の文章が、いかに露骨に戦争といふものの本質——

ゲヴァルトとしての本質——をあらはしてゐるか、これを見ると如実におわかりだらうと思ひます。

さらに、このポツダム宣言には、先ほど申し上げた、戦争の持つもう一つの側面——勝つた者が敗けた者に自らの掟を強要するといふ側面——がはつきりと現はれてゐます。それが、五項に「吾等の条件は左の如し」と言つて、六項以下にかかげられる諸条項となるわけですが、けれども、たとへばその中でも注目していただきたいのが、十項の後半の部分です。

……日本国政府は日本国国民の間に於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし言論、宗教及思想の自由並に基本的人権の尊重は確立せらるべし

これは本当は、実にトンチンカンな内容なんです。といふのも、もちろんこの時にも日本に憲法——大日本帝国憲法——といふものはあつたわけですし、そこで「宗教の自由」「言論の自由」、あるいはまた、「基本的人権」といふ言葉こそ使つてをりませんが、それにあたる各種の権利の保証がすでに確立されてゐるのです。それなのに、何故こんなことを言ふの



かと言へば、そもそも第二次世界大戦といふものが、基本的に「民主主義対反民主主義」といふイデオロギーの対決としてとらへられてゐたからなのです。連合国は自分たちの戦争を「民主主義のための戦ひ」と呼ぶ。そして、枢軸国を「民主主義の敵」だとして宣伝してきただけです。ですから、戦争に勝つたときに、彼らが相手に押しつける「掟」は、当然のことながら「民主主義といふ掟」になるわけです。実はそんなものはすでにとうから日本の中に入り込んでゐるわけなのですが、それでも、ここでもう一度それを押しつけ直さないわけにはいかない——それが、ここでの「民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし」なんていふ奇妙な表現となつたわけです。そして、他方では、ポツダム宣言のまさにこの部分を根拠として、「日本国憲法」といふものが作られることになります。

ご存知かと思ひますが、「日本国憲法」は日本人が作つたものではありません。いま申し上げたやうに「大日本帝国憲法」は、名前こそ勇ましいが内容はきはめて近代的な民主主義憲法の一つでして、敗戦後も大多数の日本人はこれを改正する必要を感じなかつた。ところが占領軍は日本政府に憲法改正の指令を出し、あげくのはてにはその改正案が気に入らないと言つて、自分たちで改正草案をこしらへてしまふ——さうやつて出来上つたのが「日本国憲法」です。つまり、まさにクラウゼヴィッツの言ふ、「戦争の目的」——自らの掟を相手

に押しつけること——の達成として行はれたのが「日本国憲法」の制度であつた、といふことなのです。

さらにもう一つ、このポツダム宣言を注意深く眺めて見ますと、別の要素が見つかります。すなはちそれは、日本の戦ひそのものを「悪」と決めつけながらも、それを巧みに日本の一部の人間たちの責任といふ形にして、日本人の総体を敵に回さないやうにしてゐる、といふ姿勢です。たとへば六項の次のやうな表現に、それがよくあらはれ出てゐます。

六、吾等は無責任なる軍国主義が世界より駆逐せらるるに至る迄は平和、安全及正義の新秩序が生じ得ざることを主張するものなるを以て日本国民を欺瞞し之をして世界征服の拳に出づるの過誤を犯さしめたる者の権力及勢力は永久に除去せられざるべからず

つまり、ここで彼らは、日本の戦争は、一部の「軍国主義者」が日本国民をだまして戦争をけしかけたから起つたのだ、といふ筋書きにそつて話をしてゐます。そして、この筋書きは、戦後の日本において広く宣伝されつづけてきた筋書きでもあります。しかし、実はかう

言つてゐる彼ら自身、この筋書きを信じてゐたのではなかつた（もし本当に、彼らが日本国民はただ騙されてゐただけだと考へてゐたら、どうしてその「無辜」の国民たちの上に原爆をおとすことができたでせうか）。これは相手の「降伏」を引き出すための一つのテクニクでもあつたのです。もしも敵軍が、その国民全体を、この十項にあるやうに「民族として奴隷化せんとし又は国民として滅亡せしめんとする」意図をもつてゐたら、降伏といふことはあり得なくて、ただ徹底抗戦あるのみだ、といふことになりませう。そこで、自分たちはそのやうな意図は持つてゐない。降伏しても民族をほろぼすことはしない——さういふ約束をちらつかせて、相手方の安心感を得よう、といふことだつたのです。

このことの背景には、国民の総力をあげて戦つてきた戦争を（物理的に片方が壊滅状態になる以前に）終結させるといふことがいかに難しいか、といふことがあります。この、戦争終結の難しさといふことについては、実はかのクラウゼヴィッツの『戦争論』にも、詳しい分析がなされてゐないのですが、われわれが大東亜戦争をふりかへつて見るときには、まさにそれこそが注目すべき大切なところなのです。五十年前、われわれ日本人は、その難しい事柄にどう臨んだのか、それをつぎにお話いたしませう。

## 火の玉の一億人が戦争を止める時

現在のわれわれは、日本の「終戦」といふものを、まるでガソリン切れで自然に車が止まってしまうやうに簡単なことのやうに思ひますが、実態は決してそんなものではなかつた。たしかに、文字通り「ガソリン切れ」にはなつてゐましたけれども、まだ軍隊組織はしつかりしてゐましたし、内地決戦に必要な銃や弾薬は沢山残つてゐた。なによりも、まだまだ兵士と国民の士気は決してくじけてはゐなかつたのです。

実は、昭和二十年八月十五日を「終戦」の日と呼ぶのは正確な言ひ方ではありません。小堀桂一郎先生をはじめ、専門家の方々が口をすつぱくして仰つてゐるとほり、この日は「停戦」の日なのでして、本当に「終戦」と呼べるのは、七年後の講和条約の結ばれたときなのです。そして、これをあらためて「停戦」と呼んでみると、この出来事の実態がよりよく思ひうかべられると思ひます。

実際、皆さんが近年のさまざまの戦争——たとへば、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの戦乱など——をご覧になつてお解りのとおり、「停戦」ほど危つかしいものではありません。一応、

不承不承に矛ををさめはしたものの、双方、なにかあれば、いつでもまた発砲しようと身構へつづけてゐる——それが「停戦」といふものの普通の形です。そして、日本のこの停戦も、常識的に考へれば、さういふものであつて少しも可笑しくなかつたのです。

それをいかにして、本当の「停戦」(一糸乱れずピタリと戦ひの矛ををさめて、和平への姿勢をとること)となすか——これは大変なことだつたのです。それをいま、この『終戦の詔書』と『内閣の告諭』のうちに戻つてみたいと思ひます。

それにあたつては、まづその前に、さきのポツダム宣言を受諾するに至つた、当時の日本政府内での議論と、その決断とがどのやうなものであつたかを、ほんの大筋ですが、御紹介しておく必要があります。さきほどお話しましたとおり、ポツダム宣言の日付は七月二十六日となつてゐます。これに対して日本の受諾は八月十四日です。この間、日本政府は何をしてゐたのか、ただちに受諾すれば何十万人の命が助かつてゐたではないか、と非難する人があります。それは、「後知恵」といふもので、当時の日本政府には、アメリカがあつたやうに残酷な大量虐殺兵器を使用するなどといふことは予測されてゐなかつた。となると、いまだ全速力で疾走してゐる超大型コンボイにいきなり急ブレーキをかける、といふやうなも

ので、ポツダム宣言を聞いて次の日に受諾するなどといふことは、現実にまつたく無理な話なのです。

それでは、受諾に至るまで、その水面下で日本政府は必死に何を討議してゐたのか？——その討議の中心となつたのが「国体の護持」といふことでした。この「国体の護持」といふ言葉は、現在の皆さんには耳なれない言葉でせう。この言葉はふつう「天皇陛下が無事にその地位におとどまりになること」と理解されてゐまして、それは決して間違ひではないのですけれども、それだけのことではない。それは、日本民族が「日本民族」として、ほろぶことなく立つてゆけるための根柢が保たれるか否か、といふ意味をもつてゐたのです。つまり、たしかに連合国は物理的には、日本民族をほろぼさないと約束してゐる。しかし、肝心の日本民族を日本民族としてつなぎとめてゐる「核」が失はれてしまつたら、それは民族絶滅と同じことではないか——これが、当時の日本政府の憂慮してゐたことなのです。

このことについて、日本政府は連合国に問ひ合はせを打電してゐます。そして、その回答は必ずしも明快なものではなかつたのですが、昭和天皇は、そこで、御聖断を下されます。すなはち、ポツダム宣言は何ら国体をそこなふ意図のものではなく、その受諾を決意するべきであるとの判断をお示しになつた。これによつて、「停戦」がもたらされることになつた

のです。

ついでながら、この御聖断は、単なる客観的判断をお示しになつたものと受けとるべきではないでせう。ポツダム宣言にも、又連合国からの回答にも、不確定の部分が多々あることを御承知のうへで、自らの御一身はどうならうとも、これ以上一人の国民も殺させてはならぬとの御決意を示されたものと見るべきであります。これは、この時の御製

身はいかになるともいくさどどめけりただたふれゆく民をおもひて

のうちになによりも明瞭に拝察することができませう。

かうした事情を背景として、この『終戦の詔書』をふり返つてみますと、たとへば、

朕ハ茲<sup>ここ</sup>ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾<sup>なんぢ</sup>臣民ノ赤誠<sup>せきせい</sup>ニ信倚<sup>しんい</sup>シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ

といふお言葉が何を意味したのか、といふことが、あらためて身にしみて解ると思ひます。

この戦争といふものは、日本人が日本民族の心身の存亡をかけて戦つた戦争であつた。「臣民」は「臣民」で、天皇陛下の御一身を守るべく、命をかけて戦つた——この部分だけをとり上げて、戦後の「進歩的文化人」たちは「狂信的」であるなどと批判するわけなのですが、日本の本当の「国体」の真意はただそこだけに終るのではないのです。陛下御自身がまた、臣民たちのために「身はいかになるとも」といふ御決意にあらせられる。その相互の命を投げ出し合ふ信頼関係を指して、陛下はここに「爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ」と、また「朕ハ常ニ爾臣民ト共ニ在リ」と仰せられてゐる。そして、この相互関係の総体こそが「国体の護持」といふことだつたのです。

いまふり返つて、これをただの「共同幻想」であるなどと言つて笑ふ人があるかも知れません。しかし、現実には八月十五日を境に、いかにピタリと見事な「停戦」を日本が実現したかを見れば、誰も、「国体」が幻想であると言つて笑ふ人はゐないでせう。

若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ  
信義ヲ世界ニ失フガ如キハ朕最モ之ヲ戒ム



すなはち、いまだ戦ふ気持を捨て切れず、占領にやつてきた元敵軍に対していはゆるゲリラ戦を行つたりすれば、どんな悲惨な泥沼に陥ることになるか——それを陛下は厳にいましめていらつしやる。そして（占領軍自身の驚いたことには）それを破る日本人は一人も居なかつたのです。これは、ほんたうに稀有の出来事と言つてよい。そして、その稀有の出来事を實現させたのは、天皇陛下を核として日本国民がびたりと一つにまとまることができ、日本の「国体」そのものだつたのです。

しかし、戦ひに破れるといふことは、単に「停戦」を實現させることで事がすむやうな生やさしいことではありません。さきほど見たとほり、戦争がゲヴァルトによつて相手に自らの意志を強要することであるとすれば、敗戦者を待ちうけてゐるのは、勝者の掟に否も応もなく従はせられる、といふ運命であります。その運命をどう耐へ、しのいでゆくかといふことは、敗者に負はされた大変に難かしい課題となるのです。それについて、『終戦の詔書』にはかうあります。

爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

「勝てば官軍、負ければ賊軍」といふ言葉がありますが、日本はこれから国全体が「賊軍」あつかひを受けることになる。本當に勝の煮えくり返るやうな思ひをさせられることもあらう。しかし、だからと言つて激情にかられてゲリラ戦に走つてはならない。じつと「堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ」、それによつて、あらたな「太平」の世を築いてゆかうではないか、と励ましていらつしやる。それがこの詔書のお言葉であらうと思ひます。

そして、ここが重要なところなのですが、それは決して単に「負けてケロリとしてゐろ」といふことではないんです。実は、戦後しばらくたつてからの日本人は、「堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ」といふことが何を指してゐるのかわからなくなつてしまふ。つまり、アメリカ人たちの持ち込んだ、「戦前の日本人は天皇陛下のために死ぬなどといふ野蛮な軍国思想にかぶれてゐた。バカな奴らだ」といふ宣伝を、何うたがふこともなく呑み込んで、日本民族としての誇りを奪はれることを格別「堪ヘ難い」こととも思はなくなつてしまつたのです。

さういふ人にとつては、この詔書の「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」といふ言葉のもつ、たうてい敗者の言葉とは思はれない、きりりとした誇り高さといふものも解らない。さういふ人々のとなへる「平和論」などといふものは、つまりは負けた人間が武装解除されて、仕方がないやとあきらめる、といった次元のものでしかない。それは言ひかへれば、戦争肯定の裏返しにすぎないんです。敗者が敗者として、しかも誇りを捨てることなく「太平ヲ開カムト欲ス」といふこと——これが本当の不戦であり平和だと思ひます。しかし、現在の日本人の心は、さういふ場所からはるか遠いところにあります。

いま、われわれがもう一度たち返るべきところは、昭和二十一年、歌会始めの御製の内にあるのではないかと思ひます。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

これこそが、陛下が敗戦後の日本人たちにお送り下さった、直き直きのお言葉なのと思ひます。この時すでに、占領軍の激しい検閲体制はととのひ終つて、少しでも日本人に民族の誇りを思ひ出させようとするやうな書きものは、一切日本人の目にふれさせないといふ体

制が出来上つてゐました。その中で、それに屈することなく、日本国民は日本国民で居てくれるやうに——陛下の祈るやうなお氣持の、切々とつたはつてくるみうたです。

さて、ここでもう一度、最初にお配りしたこの写真にたち返つてみませう。先ほど、この写真を見て、なにか忘れてゐたものを思ひ出すやうな心持ちがしたといふことを申しました。つまりこれは、まさに「堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍」んでゐる日本人の姿なんです。いまのわれわれの感覚で言へば、十才の男の子はただの「子供」ですが、当時十才の男の子は、みんな自分が一人前の兵士のやうな氣持で過ごしてゐた。そこに原爆がおとされ、戦争に負け、アメリカ兵たちがやつてきた。そして、遠慮なくカメラを構へて、弟を失ひ、葬らうとしてゐる自分を写真に撮らうとしてゐるのです。こんなところで涙なんかこぼすものか。弱々しいところなんか見せるものか——負けても尚、みつともないところだけは見せまいといふ、無意識の誇りが、この子の背筋をピンと伸ばし、あふれさうになる涙をおさへてゐる。少なくともこの時、この瞬間、ここにはたしかに、「み雪にたへていろかへぬ松」——小さな松の芽ですが——があつたと思ひます。

これから、この戦後五十年目の年といふものは、まさに「堪へ難キ」「忍ビ難キ」ことの

多い年になると思ひます。さういふとき、この少年の姿を心のどこかで思ひ出していただけたら、といふのが私の願ひです。

### 質疑応答

〔問〕戦後五十年と聞いてもぴんとこない年代の自分たちにとつて、どうすることが敗戦の克服であるのか、先生にとつてそれはどういふことであるとお考へでせうか。

〔答〕敗戦で正義を失つたことをどうやつて取り戻せるのか、これが敗戦の克服の一番の中心課題ですよ。いろいろなモデルがあると思ふのですが、わかりやすくしてしかも既に出て上つたシステムに沿つてやつていけるといふのが、裁判のモデルだと思ふんです。

東京裁判といふのは、これ自体がある意味では、われわれの正義を奪ふために行はれたやうな悪名高い裁判ですが、あの裁判の形といふものは、ある意味で敗者が自分の正義を取り戻すためのモデルになり得るんですね。

法廷の正義と正義の闘ひには、はつきりしたルールがあつて、そのルールに従へば大体平

等に正義を論理の立場で闘はすことが出来る。いまでも三十年たつて殺人犯と言はれてゐた人が冤罪だつた、潔白が証明されたといふニュースが出てゐますね。さういふ時には新聞はこぞつて冤罪を晴らさなければいけないと、大声で言ふのですが、同じことが国のレベルでも言へるわけで、国が力及ばずして敗れて正義を奪はれた状態、これはほとんど冤罪と同じ形だと考へられます。

さうなると、その事件が起こつてから三十年後でも五十年後でも、優秀な弁護士が現はれて、「この事件は公正に判定されてゐなかつたのではないか」と異議申立をするといふこと、これはどんなに時間が経つてゐても、どんなに当事者でない人間でも、出来ることだと思ふんです。私自身として一番びつたり来るのが、もう一度、眞実は何なのかといふことをわれわれの手で公正に検証してみるといふ、それが一番の敗戦の克服ではないかといふことです。

《問》 当時の日本人が持つて居た正義とは、どういふものだったのでせうか。

《答》 大きく言ふと二種類あると思ふんです。一つは、『開戦の詔書』にもあるやうに、自

存自衛のため。第一次世界大戦の後の恐慌で世界市場が非常に窮屈になり、今の時代に似てゐるんですけども、世界市場からの閉め出しを日本がくらつてゐた。直接には「ハル・ノート」があるわけですが、全体の状況としても日本の存自衛が脅かされてゐて、それを打破するためといふことが一つの正義になるわけです。

どうしてそれが正義か、といふ気がするかも知れませんが、正義といふ言葉は、まさにさういふ意味合ひで使はれるんですね。つまり、正義といふのはライトですよね。ライトといふ言葉はもう一つ権利といふ日本語で翻訳され、正義にはほとんど権利といふ言葉に等しいやうな意味合ひがあるわけです。ですから日本が主張してゐた正義といふのは、一つはさういふ存自衛の権利としての正義といふ主張が一つ非常につきりあります。

それからもう一つが、まさにわれわれのイメージする大きな意味での正義に結びつくのですが、当時アジアは日本などの東アジアを除いて、ほとんど全面的に白人の植民地支配のもとにあつた。これは黄色人種全体として世界に訴へるべき不正義であるといふ非常に大きな主張がありましたね。それは大東亜戦争を通じての日本の正義として一貫して意識され続けられてゐたし、それが一つの正義の主張になつてゐたと言へるだらうと思ひます。

《問》 連合国によつて押しつけられた掟とは何だつたのでせうか。又、欧米によるアジア支配が大東亜戦争の遠因と聞きましたが。

《答》 「勝つた者の掟を強要する」と言つてきたのですが、第二次世界大戦の場合、はつきりしてゐまして、連合国は常に自分たちを、民主主義の旗印の下に集ふ人間たちと自己規定してゐた。それに対するものとして、ドイツとイタリアはファシストとナチスといふ、ちゃんと主義の名前がありまして、反ファシズム、反ナチズムといふのが連合国の旗印だつたわけです。ところが日本には、このファシズム、ナチズムに当るやうなイズムがないんですね。つまり日本人は日本人として日本人の正義のために闘つてゐたので、何イズムなんていふものを持ち出す必要もなかつたといふことです。結局、連合国の民主主義対日本人の日本人としての自存自衛といふ、さういふ対立になるわけです。

戦後、連合国が困つたのもそれなんです。日本にもナチズム、ファシズムとイズムといふ名前のものがあると、それを叩き潰せばいいといふので簡単なのですが、日本人は日本人として戦つてゐたので、日本人であることを叩き潰さなければいけないのではないかといふことに当然なつていくわけです。



実はある意味では、さういふ仕方では連合国の占領教育といふものはなされた。公の名前としては、民主主義といふ旗印が勝者の強要した掟だつたわけですが、それはある意味では、日本人であることを叩き潰さうといふ、さういふイズムでもあつたわけです。

二番目のご質問は非常に難しい問題で、これはきめの細かい歴史的な研究を必要とする問題だと思ふのですが。一つ言へることは、まづ最初、確かにアジアの非常に広い地域が欧米の植民地支配の下に置かれるといふことになつた。ただし単に植民地支配の下に置かれるといふことだけからは、それに対する抵抗といふのは生まれ来ないんですね。自分たちもそれに抵抗できるんだといふ、最初の動きが現はれてはじめて抵抗運動といふのができてくる。あんなに支配されてゐてどうして抵抗しないんだと思ふやうな、さういふところ自体では、抵抗は起きないんですね。アジア各国のナシヨナリズムが目覚めて来る一つのきっかけが、日本が日露戦争に勝ち欧米に伍して国力を貯へつつある姿が刺激になつてゐた、と確実に言へると思ふんです。

ただしもう一つここで難しい問題は、例へば日本と中国の関係はまさにそれに当たるんですが、日本の動きに触発されて出てきたアジア各国のナシヨナリズムは、ナシヨナリズムである以上、白人だけでなく隣国との敵対関係も生み出すといふ形になつていくわけです。自

分たちが解放されようといふときには、ある種の動乱がそのアジアの各国に巻き起つて来る。例へば、大東亜戦争に至るに先立つて日支事変といふ、これはある形での宣戦布告をしない戦争だったのですが、なんでさういふものが起つてしまつたのか。しかもさつき言つたやうに日本の大きな正義は、アジア全体を白人の支配から解放するといふ文字通りの大義があつた。その日本がなぜ最初中国と戦闘を始めたのかといふ、これがもう一番大東亜戦争を考へる人間にとつて難しい問題なんですね。

これはやはり、ナシヨナリズムが芽生えてくる時、ゲヴァルトとしてのナシヨナリズムの一面を、生の形で發揮せざるを得ない。それはもうそれこそかういふ比喻を使ふと怒る人も居るかもしれませんが、野生動物が閉ぢ込められて半狂乱になつてゐる時に、それを放してやらうと檻に入るとガブツと噛みつかれるといふことがありますね。アジア全体がさういふナシヨナリズムの芽生えといふ動乱のうちにあつたんだといふことを理解しないと、日本と中国、更に難しく複雑な朝鮮との関係、これらを理解するにも、やはりアジア全体がおとなしく植民地支配が行なはれ、そこから整然と独立運動が起つて来たといふやうなイメージでは説明できない難しい問題だらうと思ひます。

《問》 連合国は敗戦後日本が抵抗しないやうに、その方法として政治的なリーダーと国民を分断しようとしたとお話でした。これは非常に巧妙なやり方だと思ふのですが、どういふ発想からさういふ手段を考へ出してきたのでせうか。

《答》 直截に申しますと、これは第一次大戦の戦後処理の失敗からの教訓と言へるかと思ひます。このやうな、一部の政治的リーダーのみに戦争の責任を負はせる考へ方を「指導者責任観」と言ひまして、その反対に、その国民全体に責任があるとする考へ方を「国民責任観」と言ひます。第一次大戦のときは、この「国民責任観」にもとづいて、敗戦国ドイツに途方もない巨額の賠償を課す。これが遠因となつて、一九二〇年代末の経済恐慌がおきてしまつた、といふことがあつたわけです。そこで、第二次大戦の戦後処理は「指導者責任観」でゆかう、といふ合意ができてゐた。これによつて、ニュルンベルク裁判と東京裁判が開かれて、ドイツと日本の政治指導者たちが極刑に処せられるといふことになつたわけで、連合国側は、巨額の賠償をあきらめて我慢する代りに、敵の指導者たちの首を切つて計算を合はせた、といふことになりませうね。

またもう一つ間接的にかかはつてくるのが、連合国の旗印だつた「民主主義」といふ政治

思想の基本構造といふものなんです。民主主義の一つの大きな特色は、国家といふものを常に「権力をあづかる者」と「一般市民」との対立といふ図式で考へるといふところにありまして、さきほど申し上げたやうな「君民一致」の国体といふものと全く対照的な考へ方なんです。それを強調しつつ、ああいつた言ひ方をしたのだといふことは充分に考へられると思ひます。

最後に、かうした問題全般について——単に日本一国のことだけでなく、広い世界の近代の歴史を見渡して、しっかりと解説してくれるやうな本を、一つ皆さんにご紹介しておきたいと思ひます。入江隆則先生といふ方が、お書きになつた『敗者の戦後』といふ本で、中央公論社の中公叢書に入つてゐます。かなり部厚い本ですが、実にわかり易く、意をつくして書いてありますので、読み始めるとすらすらと読めてしまふと思ひます。ここでは、入江先生はナポレオンの戦争にまでさかのほつて、非常に柔軟な、バランスのとれた見方でもつて「戦争とは何なのか?」「大東亜戦争とは何だつたのか?」を解き明かしていらつしやいます。何か一冊、といふことでしたら、なによりもこの一冊をおすすめしたいと思ひます。

資料

(1) ポツダム宣言（米、英、支三国宣言）

（一九四五年七月二十六日、「ポツダム」に於て）

一、吾等合衆国大統領、中華民国政府主席及「グレート・ブリテン」国総理大臣は吾等の数億の国民を代表し協議の上日本国に対し今次の戦争を終結するの機会を与ふことに意見一致せり

二、合衆国、英帝国及中華民国の巨大なる陸、海、空軍は西方より自国の陸軍及空軍に依る数倍の増強を受け日本国に対し最後の打撃を加ふるの態勢を整へたり右軍事力は日本国が抵抗を終止するに至る迄同国に対し戦争を遂行するの一切の連合国の決意に依り支持せられ且鼓舞せられ居るものなり

三、蹶起せる世界の自由なる人民の力に対する「ドイツ」国の無益且無意義なる抵抗の結果は日本国国民に対する先例を極めて明白に示すものなり現在日本国に対し集結しつつある力は抵抗する「ナチス」に対し適用せられたる場合に於て全「ドイツ」国人民の土地、産業及び生活様式を必然的に荒廢に帰せしめたる力に比し測り知れざる程更に強大なるものなり吾等の決意に支持せらるゝ吾等の軍事力の最高度の使用は日本国軍隊の不可避且完全なる壊滅を意味すべく又同様必然的に日本本土の完全なる破壊を意味すべし

四、無分別なる打算に依り日本帝国を滅亡の淵に陥れたる我儘なる軍国主義的助言者に依り日本

国が引続き統御せらるべきか又は理性の経路を日本国が履むべきかを日本国が決定すべき時期は到来せり

五、吾等の条件は左の如し

吾等は右条件より離脱することなかるべし右に代る条件存在せず吾等は遅延を認むるを得ず六、吾等は無責任なる軍国主義が世界より駆逐せらるるに至る迄は平和、安全及正義の新秩序が生じ得ざることを主張するものなるを以て日本国国民を欺瞞し之をして世界征服の挙に出づるの過誤を犯さしめたる者の権力及勢力は永久に除去せられざるべからず

七、右の如き新秩序が建設せられ且日本国の戦争遂行能力が破碎せられたることの確認あるに至るまでは連合国の指定すべき日本国領域内の諸地点は吾等の茲に支持する基本的目的の達成を確保するため占領せらるべし

八、「カイロ」宣言の条項は履行せらるべく又日本国の主権は本州、北海道、九州及四国並に吾等の決定する諸小島に局限せらるべし

九、日本国軍隊は完全に武装を解除せられたる後各自の家庭に復帰し平和的且生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし

十、吾等は日本人を民族として奴隷化せんとし又は国民として滅亡せしめんとするの意図を有するものに非ざるも吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては嚴重なる処罰を

加へらるべし日本国政府は日本国民の間に於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし言論、宗教及思想の自由並に基本的人権の尊重は確立せらるべし

十一、日本国はその経済を支持し且公正なる実物賠償の取立を可能ならしむるが如き産業を維持することを許さるべし但し日本国をして戦争の為再軍備を為すことを得しむるが如き産業は此の限に在らず右目的の為原料の入手（其の支配とは之を區別す）を許可さるべし日本国は将来世界貿易関係への参加を許さるべし

十二、前記諸目的が達成せられ且日本国民の自由に表明せる意思に従ひ平和的傾向を有し且責任ある政府が樹立せらるゝに於ては連合国の占領軍は直に日本より撤収せらるべし

十三、吾等は日本国政府が直に全日本国軍隊の無条件降伏を宣言し且右行動に於ける同政府の誠意に付適当且充分なる保障を提供せんことを同政府に対し要求す右以外の日本国の選択は迅速且完全なる壊滅あるのみとす

資料

(2) 終戦の詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル  
爾臣民ニ告グ

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カザル

所冀ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主

權ヲ排シ領土ヲ侵スガ如キハ固ヨリ朕ガ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歳ヲ閱シ朕ガ陸海將兵ノ

勇戰朕ガ百僚有司ノ勵精朕ガ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必ズシモ好轉セズ

世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ類ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及ブ

所眞ニ測ルベカラザルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我ガ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラ

ズ延テ人類ノ文明ヲ破却スベシ斯ノ如クムバ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈

ニ謝セムヤ是レ朕ガ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應ゼシムルニ至レル所以ナリ



朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セザルヲ得ズ帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉ジ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セバ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深く軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クベキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラズ爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フガ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信ジ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レザラムコトヲ期スベシ爾臣民其レ克ク朕ガ意ヲ體セヨ

御 名 御 璽

昭和二十年八月十四日

各國務大臣副署



講義

戦争と文学

神奈川県立百合丘高等学校校長

国武忠彦



『麦と兵隊』

小林秀雄

『戦艦大和ノ最期』

死者への畏敬の念

『麦と兵隊』

私は大学生になつて小林秀雄の文章にふれ、はじめて戦争を描いた小説を読みました。火野葦平の『麦と兵隊』です。

火野葦平は、早稲田大学を中退し、父親のやつてゐた仕事、石炭の沖仲仕「玉井組」を継いで親方になります。二十三歳の時です。しかし、文学への志は捨てられず小説は書いてゐました。

ところが、昭和十二年、支那事変（いはゆる「日中戦争」）が始まり、応召をうけて分隊長として中国の杭州湾に敵前上陸をします。翌年、出征前に書いてゐた『糞尿譚』が芥川賞を受賞し、小林秀雄は中国に渡り、これを渡します。部隊が整列したなかでの陣中授与式です。火野葦平三十二歳、小林秀雄三十六歳の時です。

この受賞が機縁となつて、火野葦平は中支派遣軍報道部に転属し、兵隊と共に火蓋の切られた徐州会戦に向ひます。蒋介石が七年をつひやして構築したといふ堅固な陣地に集結してゐる約五十万の敵軍を一挙に殲滅するといふ大作戦です。この南から北進する中支軍の従軍

記が『麦と兵隊』です。

「出発。果しもなく続く麦畑の中の進軍である。陽が上つて来ると次第に暑くなつて来る。雨が降れば泥濘と化する道は天気になると乾いて灰のようになる。黄色い土煙が濛々と立ちのほり、煙の幕の中に進軍して行く部隊が影絵のようになつたり、見えなくなつたりする。(中略) 黄塵のため、口の中はざらざらする。齒にあたつてがちがち鳴る、吐くと黄色い唾が出る。汗が淋漓と流れ落ちる。軍服に沁みて透る。流れた汗に黄塵がくつつき、拭うと斑になつてまるで、下手な田舎芝居の役者の白粉の剥けた見たいである。兵隊はものも云わず行軍して行く。話しかけても、怒つたような顔をして碌に返事もしない。小休止になると、埃の中だろうが、馬の糞の上だろうが、投げるように仰向けに引っくり返つてしまう。背囊には何口か分の米を入れた靴下が括りつけてある。背囊の中にはぎつしり入組品が詰つて居るに違いない。弾薬や手榴弾も入つて居るだろう。引っくり返つた兵隊は一寸の間も惜しむように、足を伸ばし、肩を緩め、一口の冷めた湯を水筒から口の中に大事そうに流しこむ。炎熱の行軍の中で一杯の水筒の水ばかりが頼りである。見わたすかぎりの麦畑ばかりで、クリークは非常に少く、たとえあつても



溷濁した水は呑むことが出来ない。朝沸して水筒につめた湯を一日大事にしなければならぬ。前進。又も黄塵の中の行軍が続けられて行く。背囊の負革が肩に喰い込んで来る。銃は右に担ったり左に肩を換えたりするが、背囊は下すわけに行かない。胸が緊る。弾ね上げる。一寸楽になる。また肩に喰い込んで来る。兵隊はそれでも何でもないような顔をして、進んで行く。黄塵を被り、土人形のようになり、汗に濡れ歩いて行く。」

小林秀雄は、この『麦と兵隊』を、戦争文学の中で、「一番成功もし、又一番優れたものである」と評価してゐる。それは何の潤色もなく、異常な体験を誇張もなく、感傷もなく、ありのままに書かれてゐることに感動したのではないか。根底に、

兵隊への共感や愛情があふれてゐるからではないのか。

いづれにせよ、火野葦平は兵隊に言語に絶する苦しみを見た。しかもそれに「何でもないような顔をして」耐へてゐる兵隊の不思議に驚き、その耐へる力がどこから湧き出るのかを考へてみる。

「私は祖国という言葉があざやかに私の胸のなかにふくれあがってくるのを感じた。それはむろん私がいよいよ突然いだけ感懐ではないけれども、とくにこの数日、眼のあたりに報告された兵隊のたとえようなき惨苦とともに、私の胸のなかに、それは、ひとつの思想のごとく、湧いてきた。杭州湾上陸いらい、常にそうであつたように、こんどの徐州戦線でも多くの兵隊がたおれた。私はそれを眼前に目撃してきた。私も一兵隊である。いつ戦死するやも測られぬ身である。しかしながら、戦場において、私たちは死ぬことを惜しいとは考えないのである。これはふしぎな感想である。」

兵隊のこの生命力のたくましさも、祖国への想ひからくる。祖国のゆく道を祖国とともにゆく。火野葦平は、支那で死ぬときは「愛する祖国日本ばんざいを声のつづくかぎり絶叫し



て死にたい」と書いてゐる。

『麦と兵隊』は、国民の感動を呼びおこし、百万部を超えるベスト・セラーになりました。小林秀雄は、「ここに盛られた精神は寧ろ古い、僕等日本人に大へん親しい昔ながらの或る精神だ。僕等日本人が肉体によつて、それを理解してゐる伝統的な精神がこの作に生かされてゐる。この精神は何何主義といふ様な名目によつて概念化され宣伝されてゐる様なイデオロギーではない。それは誰の心にも共感を起させる或る生きた民族の気質である」（「事変と文学」と指摘してゐる。

### 小林秀雄

さて、小林秀雄は火野葦平に芥川賞を渡したあと中国を旅行します。そして、「日支事変と呼ばれる大事変も突発したのではない。この様な事件を全く予想出来なかつた僕等人間の眼に、突発した様に見えるだけだ。それは長い年月の間に緩慢に蓄積された莫大な諸原因の結果なのである」（「事変と文学」と述べ、日支事変（支那事変）を「全く新しい事件」として扱へてゐる。

「指導理論」を築こうにも築けぬ、豊富な知識も経験も全く役に立たぬ、「現代に生きて現代を知る」といふ事は難かしい」（「事変の新しさ」）と嘆かざるをえないやうな歴史現象であつた。

「事変の性質の未聞の複雑さ、その進行の意外さは万人の見るところだ。そしてこれに處した政府の方針や声明の曖昧さを、知識人面した多くの人々が責めた。無論自分達に事變の見透しや実情に即した見解があつたわけではない。今から思へば、たゞ批評みたいな事を喋りたかつたに過ぎぬ。それにも拘らず、事變はいよいよ拡大し、國民の一致團結は少しも乱れない。この團結を支へてゐるのは一体どの様な智慧なのか。それは日本民族の血の無意識な團結といふ様な單純なものではない。長い而もまことに複雑な單純な伝統を爛熟させて来て、これを明治以後の急激な西洋文化の影響の下に鍛錬したところの一種異様な聰明さなのだ、智慧なのだ。

この智慧は、今行ふばかりで語つてゐない。思想家は一人も未だこの智慧について正確には語つてゐない。僕にはさういふ氣がしてならぬ。この事變に日本國民は黙つて處したのである。これが今度の事變の最大特徴だ。」（「満州の印象」）

戦ひの勝利を信じ、「銃をとらねばならぬ時が来たら、喜んで國の為に死ぬであらう」と覚悟したが、敗戦となり多くの指弾を受けることになった。多くの人は敗戦と同時に「自分は知らなかつた」「だまされた」「間違つてゐた」と、いとも簡単に戦前の自分を否定しましたが、小林秀雄は「僕は政治的には無智な一国民として事変に處した。黙つて處した。それについては今は何の後悔もしてゐない」と発言しました。

「掛け替へのなかつた過去を玩弄」してはいけない。「戦の日の自分は、今日の平和時の同じ自分だ。二度と生きてみる事は、決して出来ぬ命の持続がある筈である」(「私の人生観」)。  
この掛け替へのない命の持続感を持つてといふ言葉は忘れることができません。

### 『戦艦大和ノ最期』

次に読んだのは、吉田満みつるの『戦艦大和ノ最期』です。吉田満は、昭和十八年十二月東京大学法学部在学中の十九歳のとき学徒動員で海軍に入り、昭和二十年四月少尉に任官し副電測士として戦艦「大和」の乗組員となります。

「本作戦ノ大綱次ノ如シ——先ズ全艦突進、身ヲモツテ米海空勢力ヲ吸収シ特攻奏効ノ途開ク 更ニ命脈アラバ、タダ挺身、敵ノ真只中ニノシ上ゲ、全員火トナリ風トナリ、全弾打尽スベシ モシナオ余力アラバ、モトヨリ一躍シテ陸兵トナリ、干戈ヲ交エンカクテ分隊毎ニ機銃小銃ヲ支給サル  
世界海戦史上、空前絶後ノ特攻作戦ナラン」

連合軍は、沖縄本島周辺に五十五万、艦艇・輸送船は約千五百隻で押し寄せてゐた。これに対し日本軍は約十万。沖縄を見殺しにはできない。敗北は必至とわかつてはゐたが、世界最大の戦艦「大和」は巡洋艦一隻・駆逐艦八隻をしたがへて、沖縄に向つて決死的突入を決定する。死に直面した青年士官たちに死の苦悩が襲ふ。絶望の中から死の意味づけをめぐつて議論は沸騰する。

「兵学校出身ノ中尉、少尉、口ヲ揃エテ言ウ 『国ノタメ、君ノタメニ死ヌ ソレデイ  
イジヤナイカ ソレ以上ニ何が必要ナノダ モツテ瞑スベキイジヤナイカ』」

学徒出身士官、色ヲナシテ反問ス 『君国ノタメニ散ル ソレハ分ル ダガ一体ソレハ、ドウイウコトトツナガツテイルノダ 俺ノ死、俺ノ生命、マタ日本全体ノ敗北、ソレヲ更ニ一般的ナ、普遍的ナ、何カ価値トイウヨウナモノニ結び附ケタイノダ、コレヲ一切ノコトハ、一体何ノタメニアルノダ』

議論は鉄拳の雨となり乱闘となる。この論戦を制し收拾したのは、二十一歳の白淵磐大尉いわおでした。その言葉は、

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ 負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ  
日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過ギタ 私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワツテ、本当ノ進歩ヲ忘レテイタ 破レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ 今日覚メズシテイツ救ワルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサ二本望ジャナイカ」

白淵磐については、吉田満は『白淵大尉の場合』といふ伝記を書いてゐます。それによる

と彼は、妹の汎子<sup>ひろこ</sup>を大変可愛がりました。彼は十六歳のときから江田島の海軍兵学校に行くので、妹とは離れ離れに暮らすことになる。一人の間にはたくさんの手紙が残されてゐます。

二人とも音楽が好きで、兄はハーモニカ、妹はアコーディオン。また彼が中学四年までに読んだ本は、妹にすすめた本からみるとメーテルリンク『青い鳥』、イブセン『幽霊』、ガルシン『紅い花』、ゴーゴリ『狂人日記』、ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』、トルストイ、ジイド、ディケンズ、志賀直哉。その他萩原朔太郎や上田敏の詩、蕪村の俳句も愛読してゐます。

「大和」は呉を出港し、豊後水道を通り、九州南端から西南に進む。これらの動静はすべて米軍に把握されてゐました。「大和」を守つてくれる一切の航空機もありませんでした。

四月七日十二時二十分、大編隊の接近を確認。敵機は百機以上か。高角砲二十四門、機銃百五十門、一斉に砲火を開く。護衛艦も一斉に火蓋<sup>ひがた</sup>を切る。戦闘開始である。肩の肉は盛りあがり身体は興奮にたぎる。騒音の中で身近な兵が相次ぐ爆弾に倒れてゆく。硝煙の匂ひ血の匂ひ。護衛の「浜風」たちまち沈没。魚雷は集中してくる。必死に回避する。

「堅牢安固ナル対空電探室 六畳間大、四周ニ鉄壁ヲメグラセルモ、真一ツニ裂ケ、上

部半バヲ散佚ス

大斧ニテ竹筒ヲ叩キワツタル如キサマナリ 直撃弾、斜メニ深く抉り込ミ撃発シタルカ整備ニ整備ヲ重ネ今日ノ決戦ニ備エ来シ兵器、四散シテ残骸ヲ認めズ 部品ノ残滓スラナシ

一切ヲ吹き掃ワレタルカト見レバ、朽チシ壁ノ腰ニ叩キツケラレタル肉塊、一抱エ大ノ紅キ肉樽アリ

四肢、首等ノ突出物ヲモガレタル胴体ナラン アタリニ弾カレタル四箇ヲ認め、抱エキテワガ前ニ置ク

焦ゲタル爛肉ニ、点々軍装ノ破布ラシキ『カーキー』色ノモノ附着ス 脂臭紛々 ソコニ首、手足ガ附ケ根ノ位置ヲ確カメ得ザルハ言ウモ更ナリ」

片仮名まじりの文語体で、壮烈で悲壮な描写が続きます。吉田満二十一歳。先ほどの白淵大尉もこのとき戦死します。

「白淵大尉（後部副砲指揮官）直撃弾ニ斃ル 智勇兼備ノ若武者、一片ノ肉、一片ノ血ヲ

残サズ 死ヲモツテ新生ノ目覺メヲ切望シタル彼、真ノ建設ヘノ捨石トシテ捧ゲ果テタルカノ肉体ハ、アマネク虚空ニ飛散セリ」

兄の戦死の報は、後に石川県に疎開してゐた妹汎子ひろこに母からとどけられました。妹は日記に次の四首の短歌を詠みました。

荒浪のしぶきと散りし兄の靈安らかにあれわれら敗れたり

猛きこと焰のごとき海の君いま散り果てて眠り給ふや

氷雨ふる大海原も沸き立たん底に鎮もる若き血潮に

祈りつつ厨子のみ前に額ぬかづけば嬉しや兄の天にのほりゆく

さて、ただちに第二波の来襲。再び百機以上。魚雷は次々に投下され、避けることは絶望的となる。機銃砲塔は直撃弾にやられ、身の置くところなき修羅場となる。第三波来襲。またもや百数十機。死傷者おびただし。魚雷命中。浸水拡大する。船は傾斜してゆく。復旧のため炎熱のなかを全身これ汗と油にまみれる。第四波飛来す。百五十機以上。魚雷次々に投



下される。攻撃は熾烈しりつとなり、火柱、唸り、硝煙、窓より吹き込む。身じろぎもせぬ司令長官。血しぶきをあげて、兵は折り重なつて次々に即死。浸水により傾斜十五度。復旧ますます困難となる。

第五波百機以上。護衛艦も残るのは二艦。通信機関は寸断され頼るは伝令のみ。兵器はことごとく損傷。第六、第七、第八と波襲。「大和」満身創痍そうい、在りし日の面影もなし。いかにすべきか。ただただ不屈の闘魂と重責感をもつて職責を完遂する外なし。

傾斜三十五度。死に直面。司令長官「作戦中止」の断を下し、長官室に閉じ込めりご最期なり。皆、総員死に方用意のことばを覚悟し、生還を期するものなし。艦長は、共に死せんと思つてゐる兵の一人一人の肩を叩き、「しつかりやれ」と激励しつつ海中に突き落とす。そして、身三カ所を羅針儀に固くしばり、「御真影」をご奉持して、万歳三唱して水没。

四月七日、延約一千機におよぶ敵機の魚雷、爆撃にあひ、わづか二時間たらずで「大和」は沈没した。赤腹をあらはし、海中に突つこむや一大閃光を噴き、火柱六千メートルに達す。最後の描写は、

「徳之島ノ北西二百哩ノ洋上、『大和』轟沈シテ巨体四裂ス 水深四百三十米

今ナオ埋没スル三千ノ骸<sup>ムクロ</sup> 彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」

吉田満氏は、頭に怪我をしてをりました。自爆裂傷で指二本がすつぱり入る傷でしたが、海中を泳いでゐるうちに出血も止まつた。生死の関頭を踏み越えて喜びはなく、「生コソムシロ苦痛ナリ」といつた状況でした。三時間海水に漂流して駆逐艦に救出されました。

### 死者への畏敬の念

終戦の年の九月、家族の疎開先に復員した吉田氏は、父に連れられて疎開者仲間の吉川英治を訪ねてこのことを話すと、吉川英治は端座して身じろぎもせず耳を傾けてゐたが涙を流し、「君はその体験を必ず書き誌さなければならぬ。どんな形でもいい。それは自分自身に対する義務であり、また同胞に対する義務でもある。それは日本の記録ではなく、世界の記録として残るであらう」といはれ、家に帰るとすぐに筆をとつた。文字が<sup>ほとばし</sup>迸るやうに流れ「ほとんど一日を以て書かれた」といつてゐます。

翌年（昭和二十二年）、突然勤務先に小林秀雄が訪ねてくる。今、発行準備中の『創元』第

一輯に是非載せたいと。文語体で書かれてゐることについて、「自分の得た真実を、それに盛るにふさわしい唯一の形式に打ち込んで描くこと、これが文学だ」。これは「敗戦の収穫だ」といはれたといふ（「占領下の「大和」」）。

ところが、占領軍の検閲によつて『創元』第一輯から『戦艦大和ノ最期』は削除された。何故なのか。江藤淳の調査（「死者との絆」）によると、検閲官の意見書に

「最後の二行におけるその結語は、次のようなものである。

『乗員三千餘名ヲ數へ、還レルモノ僅カニ二百數十名

至烈ノ關魂、至高ノ鍊度、天下ニ恥ヂザル最期ナリ』

この最後の二行の表現が検閲官の気にくはぬ点に挙げられてゐます。これは今日私たちが読んでゐる、先に記した最後の二行、「今ナオ埋没スル三千ノ骸ムクロ 彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」とは表現が違つてゐます。どちらでなければならぬか。勿論、あの凄絶な戦ひを戦ひ抜いて死んでいつた死者たちのことを想へば、検閲前の「至烈ノ關魂、至高ノ鍊度、天下ニ恥ヂザル最期ナリ」でなければなりません。

いづれにしても敗戦を迎へました。小林秀雄は「悲劇的」といふ言葉を使つてゐます。悲

いづれにしても敗戦を迎へました。小林秀雄は「悲劇的」といふ言葉を使つてゐます。悲劇を悲劇とは認められぬやうな「運命」といつていいやうなもの。私たちはあゝ、生きたい、かう生きたいといふ希望なり夢を抱いて生きるが、これが無残にも容赦なく踏みにじられてしまふ。それでも生きねばならぬ。「悲劇」とは、さういふ事態に追ひ詰められても生きることだ。「人間は生きて知らねばならぬことがある」(「政治と文学」といつてゐます。

「私達は、若しああであつたら、こうであつたであらうという様な政治的失敗を経験したのではない。正銘の悲劇を演じたのである。」私たちは、万感無量の想ひを託して死んでいつた同胞の心に直面し、その心を共有したい。死者たちの無念の想ひに心をいたす。「過去への敬意を失えば何一つ新しく価値あるものを創り出す事は出来ない」「この事に関して畏敬の念を失えば、もう文化という様な言葉はいっそ使わぬ方がいい」といつてゐます。死者とともに生きる。絶望的な戦局の中で、国のために精一杯生きた人たち。これらの人々の苦悩を無駄にははいけません。国民は総力をもつて戦ひました。私たちはこのことに誇りもち、力及ばずして死んでいつた人たちと共に生き、辛いけど、この悲しみを乗りこえてゆきませう。

(全体研修)

戦前戦後を貫くもの



亜細亜大学教授・文学博士 東中野 修 道

埼玉大学教授 長谷川 三千子

神奈川県立百合丘高校校長 国 武 忠 彦

(発言順・敬称略)

司会

大成建設(株) 国際事業本部企画推進室長

山 口 秀 範

○山口（司会） 合宿が始まり丁度一日経ちました。オリエンテーションの時に皆さんにお願ひしましたことの一つが、開会式を終はつて丸一日、五十年前に終はつた先の戦争、大東亜戦争について考へ続けて下さいといふことでした。その後、東中野修道先生、長谷川三千子先生、国武忠彦先生の順で御講義を頂き、その同じ問題についてお話しを伺つてきたわけです。

皆さん方にとつて、丸一日、戦争のことを考へ続けたといふ経験は初めてだといふ方が大多数であつたことと思ひます。その中で、今まで自分が聞かされてゐた、或は自分がイメージしてゐたものと、先生方の御話や班での話が相当違ひ戸惑つたといふ方もいらつしやるでせう。或は、「ああ、さういふことか」と大きく目を開かれた方もをられるでせう。そこで、この全体研修ですが、これだけ集まつた二百数十名の、他の班でどんな話がされ、どんな感じ方を皆さんがしてをられるかを知つて頂いて、改めてこの場で考へたいと思ひます。まづ、何人かの班長から今までの班での研修の様子を披露して頂きたいと思ひます。

○第一班 ある班員が「僕達が昨日今日とやつて深めてきたことは、マイナスからゼロに戻す作業だ」と語つてくれたのが、非常に印象に残つてゐます。僕達が議論を深めてゐることは、右、左といふ次元ではなくて、現実から目を逸らさずに真実を知るといふ根本のことだ

といふことは、班員の中で大体共通して理解できてゐると思ひます。

○第二十二班 先生方の御講義の後、「学校やマスコミの報道から日本ばかりが悪いと聞かされ、さう信じてゐたのに、日本が自存自衛のためにか、正義のために戦つたといふことを知つてすごく驚いたとともに、日本のことを誇りに思つたり、感激した」といふ意見も出ました。

同時に、「国にはそれぞれの正義があつて、どちらが正しいなんて言へないんぢやないか」といふ意見も出て、とても難しい問題で、結論は出ませんでした。

また、「何故私達が戦争のことを学ぶ必要があるのか」「何故私達が敗戦を克服する必要があるのか」といふ根本的な意見も多くありました。

それから、「日本はやむを得ず戦つたといふことがわかつたにせよ、戦争をすること自体が悪いことなのではないか」といふ皆の思ひに対して、私達の班に來られた長谷川先生が、「例へば、日本の中でAさんがBさんに土地を奪はれたとしたら、裁判で取り返すことができるかも知れないけれど、国際的にすべての国が信頼できる警察とか裁判所とかはないので、泣き寝入りするか、それとも正義は正義として貫き通して戦争をしなければいけない場合もある」と言はれて、私は目を開かせて頂いたやうな気がしました。



○第八班 まづ、東中野先生の御講義は今まで中高の歴史教科書などにならない話であり、また、「学校の先生からは侵略戦争と習つた」といふ学生もゐて、「どちらを信じてよいかかわからない」といふ学生がゐました。

○司会 ありがたうございました。もう二、三聞いてみたいと思ひます。

○第二班 私の班でも、東中野先生の御話と、今まで学校で勉強してきたこととのすごいギャップに戸惑ひがあり、どちらを信じればいいのかといふことがあります。それで、例へば東中野先生のおつしやることをすべて信じることは、『朝日新聞』を読んで信じる危険性と同じ危険性があるのぢやないかといふ意見もありました。やはり自分でどちらが真実かを見極める姿勢が大事なのではないかと感じてゐます。

あと、ある班員から、「戦時の日本人と戦後の日本人を分けて考へてしまつてゐるのが良くないのではないか。戦時の日本人といふものに、僕等は感情移入しにくい状態になつてゐるが、どうしたらそれができるのか」といふ疑問も出ました。

○第二十三班 先程国武先生の御講義で、小林秀雄さんが戦後「僕は無知だから反省などしない」と言はれたといふところで、「このやうな身の処し方をする人はゐなかつた。皆、掌を返したやうに簡単に戦争中の自分を否定してしまつた」と話されました。私も、例へば戦

争の賠償責任といふことに関しても、日本人は簡単に自分達が悪かつたと認めてしまふところがあると感じてゐます。他の皆さんはどのやうに御考へなのか御聞きしたいと思います。

○第十二班 先程、国武先生の御講義で、『麦と兵隊』を紹介され、日本人が戦つてゐたときの心情は正にかうだつたのだと思へてきました。自分自身、歴史を繙く中で、日本の心を実感していくことが大切だと実感しました。

○第五班 私の班の中で出た問題で解決のついてゐない問題を二点話させて頂きます。第一点は、「敗戦の克服」といふが今の私達が何を克服する必要があるのか、といふことです。先の戦争が侵略戦争だと思つてゐるわけではなく、確かに自存自衛の戦争であつたとしても、一方、私達は戦後の民主主義の中で何不自由無く育つてきたわけで、何を「克服」すべきなのかといふことです。

第二点は、第一点と重なりますが「やはり、戦争は悪ではないのか。大東亜戦争が侵略戦争ではなく自存自衛の戦争であつたことは理解できる。しかし、戦争をしたといふことはやはり悪いことであつて、それは、アメリカ、イギリスその他の国々も、その点では同罪ではないか」といふ点です。

○司会 七名の方から発表頂きましたが、皆さんも同感される部分も多かつたのではないで

せうか。それでは、ここで、登壇して頂いた先生方に今の学生達の発表を受けて御意見を頂きたいと思ひます。東中野先生、如何でせうか。

○東中野　フィリピンから生還された小野田寛郎さんが「わがブラジル人生」といふ本のかなで、「一つ日本にたいして不満がある」と言はれ、「戦場に斃れた人びとに礼をつくさぬ国家が世界のどこにあるのだらうか。私は寡聞にして知らない。国家のために犠牲となつた人びとに対して礼をつくすといふのは、人間としてごく自然の姿ではあるまいか」（原文現代仮名遣ひ）とおつしやつてゐます。また「マッカーサーの涙」といふ本を書いたブルーノ・ピツテルといふローマ法皇庁の日本代表の方も、「いかなる国家も、その国家のために死んだ人びとに対して、敬意を払ふ権利と義務がある」（原文現代仮名遣ひ）と言はれてゐます。

先程、「戦前の日本と戦後の日本とは変らないのぢやないか」といふご意見がありました、すつかり變つてしまつたのではないでせうか。ラフカディオ・ハーンは、日本人が死者をカミとして崇拜し、生きてゐた時と同じやうにうやうやしく仕へることを、神道の精髓と捉へ、このやうな日本人の信仰や信念が日本文化の根底にあると指摘してゐます。それにたいして現在の私たちは戦死者にたいして実に冷たい気持ちを持つてゐるんですね。深い哀惜の念、話を聞いてゐて目頭があつくなるやうな気持ちを抑へようとしてゐますね。その点で日本は



すつかり変つてしまった。国旗「日の丸」も進んで掲揚しない。国歌「君が代」も喜んで歌はうとはしない。さうなるやうな教育が長く行はれてきました。「君が代」を歌はうが歌ふまいが、関係ないと思ふのは浅薄な意見でして、アメリカに留学して「君が代」も歌へない日本人学生は、決して尊敬されませんね。

結局、このやうになつた原因は、歴史の解釈にあります。誤つた解釈から、結果としては、自分の国を常に悪し様に言ふことになつた。これは大変な問題ではないでせうか。仮に私たち一人一人に置き換へて考へてみますと、自分に静かな誇りと自信が持てず、しかも自分のことを悪く言つて元氣を出してゐるやうなものです。これが異常だとは、私たち一人一人の場合、誰にも分りません。ところが、国のこととなると、我が国に静かな誇りと自信が持てないばかりか、我が国を

不当に悪く言つて喜びを感じてゐる。さういふ異常な精神状態の下に在りながら、異常とも思はない状態が続いてゐます。

ところで昨日提起しました歴史の解釈の問題ですが、『朝日新聞』の主張と丸反対であることは承知してをります。若い学生諸君にすんなりと受け入れられるとも思つてをりません。しかし私が思ひ出しますのは津田左右吉の言葉なのです。昭和十五年に『神代史の研究』などで発禁処分を受けた津田左右吉は、敗戦直後に龐大緻密な皇室論を展開した学者ですが、「学問の立場から見た現時の思想界」といふ昭和二十一年の講演のなかで、「自国のものごとを反省し批判し、謙虚な態度で世界に学ぶのは、正当に自国を重んじた事実として存在する自国の美点を美点として認識するのと、同じ精神から出るものであることを知らねばなりません」と語つてをります。自国のものごとを批判することも、自国の美点を美点として知ることも、ともに事実の正当な認識から出発しなくてはならないと津田左右吉は言つてゐる訳です。その意味で、今日の日本を覆ふ歴史解釈は、はたして事実の正当な認識から出発する歴史解釈なのか。それとも、勝者が敗者を一方的に裁いた東京裁判のご託宣そのままの歴史解釈なのか。そのことを一度考へていただきたい、その問題提起を、昨日はさせていたいただきました。敗戦から五十年、日本は経済的には驚異的な復興を成し遂げましたが、精神的

な復活はとなると、ますます混迷の度を深めてをります。東京裁判によつて日本近現代史に加へられた歪み、この歪みを正して歴史を正しく解釈する事が、今、求められてゐるやうに思ひます。

○司会 ありがたうございました。では、引き続き長谷川先生お願い致します。

○長谷川 いま、色々難しい問題が出てきてゐますが、非常に大きく分けてみると二種類の問題が出てきてゐるやうな気がするのです。一つは、今も東中野先生がおつしやつたお話の中に関連するのですが、戦後の、殊にここ十年、二十年の日本人の心の在り方と、それから、戦争前、或は戦争中の日本人の心の在り方がどうしてこんなに違つてしまつたんだらうかといふことです。東中野先生は寧ろ戦前から連続した日本人の心の立場からおつしやつてゐましたけれども、それを現在の平成の世界に生きてゐる若い人間の方から考へてみると、一所懸命で理解しようと思ふんだけど、どうやつたらその心持ちに辿り着けるのか、まづ、どうやつて共感し、どうやつて気持ちをおつたらいのか、それがまづ掴めないといふ率直な気持ちがおつしひしと伝はつてくるやうな気がします。

例へば、「何を克服したらいいんだらう」といふやうな質問も、勿論、一つは非常に論理的な問題としてあるんですけども、やはり、「実感」の問題として、どうやつたら共感

できるんだらうといふ戸惑ひがあるんだらうと思ふんです。それで、私はある意味では、皆さんが途方にくれるほど今の日本は幸せなんだといふふうに言へるんぢやないかと思ふんです。どなたかが、「どうやつたら戦時中の日本人の気持ちがわかるんだらう」と言はれておりましたし、殊に先程の国武先生のお話の『戦艦大和ノ最期』のお話にもありましたやうに、「二十一歳であんなキリッとした文章が書けるなんていふのは人種が違ふんぢやないか」といふ絶望感を持つた方もおありぢやないかと思ふんですね。ところが、人間といふのは不思議なもので、いざといふときには本当にノホホンとしてゐた人間が人が変はつたやうにキリッとするんですね。皆さんが「でもこれで幸せぢやない。そこからどうやつて動く必要があるのか戸惑つてゐる」といふのは、つまり、それだけ今の日本が幸せだといふことでもあると思ひます。

ただ、今の日本の幸せといふのは、どうやつてきたのか、棚からぼた餅みたいに降つてきたのかといふと、さうではなくて、やつぱり皆さんのお父さん、お母さん、それから更にお祖父さん、お祖母さんたちがかういふふうに頑張つてやつてきて下さつたからなんだといふことは知つておく必要があると思ふのです。今、とにかく幸せな日本になつてゐますが、この幸せはいつまで続くかわからないんだといふことを胸に抱いて頂ければいいんぢやないか

といふ気がします。

それからもう一つ、先程最初に一班の方のお話に出てきた言葉、「マイナスからゼロに戻す作業だ」といふ言葉が私にも非常に印象に残つたのですが、さういふふうに捉へられるといふのは非常にいい意味での想像力のある方だと思ひます。つまり、物質の面だけ眺めてみると一体我々のどこにマイナスがあるのかといふことに気がつかないですね。マイナスだといふことが見られるのは、これは一種の精神の冒険ですね。さういふ形で今の自分を取り巻いてゐる世界から何らかの形で飛び出して自分を眺めてみるといふところが必要なんだらうと思ひます。それは、或は、非常に上質の文学がそれを手助けしてくれるかも知れないし、或は、東中野先生のお話を聞いて、「ぢやあ自分もさういふ資料を見てみよう」といふ論理的なところからさういふ飛躍の道が開けてくるかも知れない。いづれにしても、なにか非常に精神の冒険といふ形で今自分があるところから飛び出さないと、何を取り戻すべきなのか、何が欠けてゐるのか、それが見えて来ないといふのが今の日本ではないかといふ気がしてゐるのです。

それと最後にもう一つ、これは先程二つの班から出てきたことで、他の班でもでてゐることではないかと思ひますが、「戦争といふものはやつぱり悪ではないか」といふ率直な疑問



です。私はそれは非常に大事な疑問であるし、「戦争は悪なのだ」と我々が自信を持つて言ひ切れるやうにならなければいけないと思ひます。先程の班の方が、日本だけが悪いのではなくて、戦争をやつた、例へば、第二次大戦で戦つた国全部がさういふ意味では悪いと、さういふふうには反省すべきではないかとも言はれましたね。私はそれが恐らく正しい戦争の振り返り方だと思ふのです。つまり、色々な大義があるし、正義があるし、権利がある。但し、やはり人間が人間を殺すといふのは悲惨なことなんだといふ、ほとんど宗教的な立場といつていいと思ひますが、それは人間の心の非常に高いレベルからの反省として、丁度、東中野先生がおつしやつた「死者を弔ふ気持ちが大仕事である」といふ気持ちとびつたりと歩みを揃へて、人間にとつて必要な心の反省ではないかと思ひます。

ただ、実は今の我々は、さういふ本当に高次元の、「人間としてありとあらゆる戦争はどんな人間がした戦争もいけないんだ」と言へるやうな立場には未だぬないわけなんです。負けた人間が勝つた人間に頭を下げる、さういふ次元の反省しか、実は、国会議員も、新聞も、テレビも考へてゐないといふ、さういふ状況にあるわけなのです。

それで、何とかさういふ事態を本当のきれいなゼロの状態に戻して、死者を弔ひ、そして、「これからは戦争のない世界にしよう」といふことを政治的プロパガンダではなくて、いは

ば、宗教的な高次元の思想として語ることができるやうになるといふ、これは恐らく我々にとつて遙か遠い未来になると思ひますけれども、今後の我々の目指すべきことではないかと私自身は考へてゐます。

○司会 大変ありがたうございました。

今、お二人の先生方に多くの問題についてお答へ頂きましたが、これまで出てきた意見の中で、「戦争前のことが実感としてわからない。戦争のときに日本人がどんな気持ちで生きて戦つてきたかといふことがなかなか捉へられない」といふことがございました。そこで、この合宿にはその戦争のときに丁度皆さん方のやうに学生生活を送つてをられた先輩方もられますので、お話を伺つてみたいと思ひます。宝辺正久先生（国民文化研究会副理事長、終戦当時二十三歳）、戦争当時どういふお気持ちで過ごされたかといふやうなことを中心にお話をお願ひ致します。

○宝辺 私 は昭和十四年に旧制高等学校に入り、昭和十七年に大学に入りまして、十八年の暮れに学徒動員で入隊し、海軍の特殊潜航艇に乗り込み、実戦には参加しないまま終戦を迎へました。今、そのときの学生生活についてお話するにはあまり時間もありませんが、私に強烈に印象に残つてゐますのは、昭和十八年の暮れ、大学生活を一年半でおさらばして、い

よいよ戦地に出て行かなければならぬときのことです。私は、高等学校以来の友人、松吉正資君と手を携へて大竹海兵団に入隊しました。この松吉君はやがて飛行機乗りになつて、沖繩に出撃する途中で飛行機が海上に墜落して、誠に不本意な特攻の戦死を遂げるのですが、その松吉君が入隊する前の、兵役に従ふまでの短い期間を静かに故郷の瀬戸内の大島で過ごします。そのときの歌に

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあた、かきかな

といふ歌があります。その他にもまだ幾つもの歌を作つて出て行くわけですけれども、自分の故郷、郷党の温かい心に励まされながら自分の命を国に捧げようと密かに誓つて出て行くわけです。

つまり、私が今皆さんに申し上げたいのは、私どもが送つた学生生活といふのは、色々なことがありました。気の合つたもの同士で実に愉快な旅もしたし、酒も飲んだ。そして、「こんな学問でいいのか」といふ学問自体に対する地団駄を踏むやうな非常に大きな不満も持つてをりました。しかし、要するに、「命を捧げるべきだ」といふ覚悟を決めたときに、頭に思ひ浮かぶのは、本当に心通はした友人であり、故郷の人の情けであり、親であるといふことと、日本を守らうと心から誓つて、日本を信じて戦争に行かうといふことを心に決め

たことは、間違ひない私どもの学生生活の中心に座つてゐた一つの心であつたといふことを申し上げたいと思ふ。

○司会 ありがとうございます。もうお一方、徳永正巳先生（国民文化研究会常務理事、終戦当時二十二歳）に特に戦争が終はつて、どういふお気持ちで生きて来られたかをお伺ひしたいと思ひます。

○徳永 私は高等学校は昭和十五年に、大学は十七年の九月に入りました。やはり、昭和十八年の十二月に学徒出陣したわけですが、陸軍ですが、電信連隊と言ひまして、大本営と軍司令部と師団司令部を連絡する特殊な部隊に居りましたので、敵陣に斬り込んでいくといふことはしなかつたわけです。満州の国境にしばらく居り、実際の作戦は中支にまゐりました。中支の上海から杭州の辺りで作戦任務に就いたわけですが、さういふ兵種です。汪兆銘（孫文の思想をうけつぎつとも蒋介石と袂を分かつて南京に親日的政権を樹立した）の政権が出来てゐる時代の軍司令部の近くにをりました。

その当時は中国兵は汪兆銘の軍隊ですから大体味方なわけです。私は将校になつてをりましたから、馬に乗つて自分の小隊を連れて行きますと捧げ銃の敬礼をするわけです。こちらは答礼をしていく。百メートルばかりすると後ろからこちらを撃つてくるのです。味方の中

国兵の筈ですが撃つてくるわけです。

この敵襲といふものは普通の軍服を着た兵隊ではなく、便衣隊と言ひまして、普通の民間の服を着た者が射撃してくるわけです。いはゆるゲリラです。さういふ者には、私は射撃で応戦させました。或いは、部隊で作業をしてをりますと、必ず米軍のB51が飛んできて機銃掃射をしますので、これにも応戦させました。

ただ、誓つて申し上げられるのは、支那の民衆を殺害したことは絶対にないといふことです。杭州の町、上海の町でもみんな店を開いてをりましたし、それから、我々が物を買ふにしましても、ちゃんとお金を出して買ふといふことでありまして、絶対に中国の民間人を殺すといふやうなことは致してをりません。戦場でも第一線でやるときにはいろいろと激しい事があつたかも知れませんが、戦争といふのは、あくまでも軍服を着た者同士が撃ち合ふ、殺し合ふといふものであり、民間人を敵とするものではないことを是非知つて頂きたいし、そのやうに行動してきたといふことを誓つて申し上げたいと思ひます。

今年は何「戦後五十年、戦後五十年」と言ひますが、近頃の政府の声明などを聞くと、日本が植民地支配をしたことを反省する云々といふやうなことを言つてゐます。しかし、大東亜戦争以降五十年目を迎へる今年は、日清戦争から百年、日露戦争から九十年にもあたる年



まつてゐます。しかし、現実には戦争は全世界で起こつてゐるわけですから、そのときに我々がどうすればいいのかといふことは、やはり日本人として覚悟を固めていくべきではないかといふ気がするわけです。

○司会 ありがたうございました。それでは国武先生、お願いします。

○国武 随分前にオーストラリアを旅行したときのことですが、飛行機の下に海が見えたとき、心が重く複雑になりました。戦争のことを思ひ出したからです。私より歳をとつた人たちは皆そんな経験をもつてゐるのかなあと思ひました。「知る」ことは「生きる」ことだと私は先ほど話をしましたが、やはり「知る」ことによつて生き方は違つてくるのではないかと思ひます。

私たちは、自分の生まれ育つた家とか祖先のことを知りたくなるやうに、五十年前の戦争を知りたくなるでせう。大悲劇、運命的な、国民が一丸となつて戦つたあの戦争は、一体なぜ起こり、どう進行し展開したのか。学生だつたら誰だつて知りたい、読んでみよう、勉強しよう、話し合つてみようといふ気持ちになると思ひます。オーストラリアのある駅の前に、大きな石碑があつて「戦争のことを忘れるな」と書いてあるのです。日本とは違ふなあと感じました。また、カウラといふ捕虜収容所に行きましたが、オーストラリア人はなぜ日本人

がここから脱走しようとしたのか、その理由がわからないのですが、私たち日本人にはわかるのです。

戦前と戦後はどういふふうに変はつたのだらうかといふ疑問がありました。私は変はつたと感じてゐます。私は仏壇が恐かつた、母親が恐かつた、厳しかつたのです。どの家庭にも天皇陛下の御写真があつたでせうが、母は「足を向けてはいけない」と言つてゐました。その母親が亡くなつたとき、何か芯が抜けたやうな気がしました。自分を抑へ支へてきた何か重いものが無くなつたやうな気がしました。あのころは生き方がはつきりしてゐた、自信をもつてゐた。かういふふう子どもを育てなければならぬ、といふふうなものがあつた。家庭といふものがしつかり存在してゐたと思ひます。

○司会 ありがとうございます。

○長谷川 ええと、一寸コマースナルになります。国武先生が一番最初にお取り上げになつた『麦と兵隊』といふご本。すでに皆さんの半分以上の方が読まうと思つてをられるでせうが、残りの半分の方にも、この本を改めてお勧めしたいと思ひます。

といふのは、実は私自身が国武先生よりもほぼ十年近く後に生まれてゐるものですから、自分自身でまるつきり戦争のことを知らないんですよ。さつきはなにか偉さうに話をして



みたんですが、私は大学時代は多分皆さん以上に全く戦争のことを考へたことがなかったし、自分からは既に遠い時代だと思つて、戦時中の人間が何を考へてゐたのか自分によくわかつてゐないといふ自覚さへなかつたぐらゐなんです。それで、その私が一体何でこんなことをいろいろ考へたり読んだりするやうになつたのか——ある班に行つたときにさう問ひつめられました、そこでちよつとお答へしたんですけれども、実は私が一番最初に読んだのが『麦と兵隊』なのです。

例へば、皆さん、ちよつと古い時代を写した映画で日本兵といふと、いつもこはばつた顔で、台詞回しも怒鳴り声の台詞回しばかりで、到底人間らしさなんて感じないといふ日本兵ばかり見てゐると思ふんです。でも、この『麦と兵隊』の中に出てくる日本兵といふのは、本当に隣にゐて、一緒に話をして、一緒にわいわいお酒が飲める、「ああ、かういふ奴なら一緒に友達になりたいなあ」といふ、さういふ人間ばかりなんです。

それで、さういふ人間が苛酷な戦争の現場を歩いて見せるわけです。ですから、読んでゐるうちに、自分も戦争と一緒に体験してゐるといふ、そんな非常に不思議な気持ちにさせられる。良い文学といふのは皆さういふものだと思います。

ですから、ここで話を聞いてゐるうちに、ある意味では、「到底自分には五十年前のこと

なんかわからない」といふ不安に駆られる方も多いと思ふんですけれども、さういふ方を含めて『麦と兵隊』をお読みになることをお勧めします。

○司会　先生方、ありがたうございました。時間が参りましたのでこれで終はりますが、この一日間頑張つて考へてみたことは、また色々と繰り返し出てくる問題だと思ひますので、いまの気持ち、いま持つてゐる疑問をしっかりと持ち続けてこれからの研修に臨んで下さい。それでは、これをもちまして全体研修を終はります。

講義

# 天皇と国民

——かへりこぬ人をおもひてうれひはふかし——

九州造形短期大学講師

小柳陽太郎



硫黄島

沖繩

肉親の情

世界に類を見ない「君臣の情」

〈質疑応答〉

硫黄島

合宿も四日目の朝を迎へましたが、いま、さまざまなおもひが皆さまの胸を去来してゐることです。合宿に来てよかつたといふおもひもありませんが、一方まだ充分納得出来ないといふお気持ちをもつていらつしやる方もられるでせう。特に昨夜行はれました慰霊祭において、万葉集の中の、大伴家持が詠んだ、「海ゆかば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ」といふ、大伴家の「言立て」を作曲された「海ゆかば」といふ歌を皆さまと御一緒に歌ひましたね。あの中に「大君の辺にこそ死なめ」といふ一節があります、このことばにふれてこのやうな考へには到底ついてゆけないといふ感想をおもひの学生さんがいらつしやつたといふことを聞きました。たしかに皆さまは学校で、戦後、天皇を中心とする「絶対主義体制」は崩壊し、天皇主権は国民主権の憲法に改められたと習つてきてをられる。とすれば、たとへ天皇を否定するとか、反感をいだくといふことはないにしても、少くとも天皇との間には或る程度の距離を置かなければいけない、あまり接近しすぎると、また戦前のやうなことになるかもしれないと考へられる方が沢山いらつしやるの

は当然でせう。従つて「大君の辺にこそ死なめ」などといふことはとんでもない、そんな考へには到底ついてゆけないと思はれるお気持はよくわかります。だが果してさうなのか。学校で習つた天皇像は一体それでいいのか。もしそれが単なる虚像にすぎないとすれば、私たちはフィルムをもう一度はじめから巻きもどして考へなほすべきではないか。天皇とは本当にどういふ方なのか、天皇の御存在の意味は何か、そのことについて、昭和天皇や現在の天皇、皇后両陛下がお詠みになつたお歌を中心にお話していきたいと思ひます。最初に昨年の二月、天皇、皇后両陛下が硫黄島におでましになつた時の御歌についてお話いたします。

硫黄島といふのは東京の南、小笠原諸島の最南端の、半日もあれば一周できるやうな小さな島です。しかし戦略的に大変重要な位置を占めてをりますので、アメリカはこれに狙ひをつけて、昭和十九年、終戦の前年ですが、その二月十九日に六万の大軍が上陸してくるので、それを迎へ撃つたのは二万一千の日本の軍隊でした。アメリカは小さな島ではあるし、短期間で攻略できると高をくくつてゐたのですが、我が軍の抵抗はすさまじく、一ヶ月以上の熾烈な戦闘がつゞけられて、遂に三月下旬、二万一千の日本軍は玉砕、アメリカも七千を越える戦死者を出して戦闘は終結したのです。我が軍は最後の突撃にうつる前、三月十六日、大本営あてに別れの無電をうつのですが、その時、全軍を指揮した栗林兵団長は



国のため重きつとめを果し得で矢弾やだまつき果て散るぞかなしき

といふ悲痛な一首の和歌を遺してをられます。その硫黄島に去年の二月十二日、建国記念日の翌日、両陛下は慰霊のためお出ましになつたのです。折しも東京は大雪、その中を自衛隊の輸送機でおでかけになつた両陛下は着陸後、日本の将兵をお祀りしてある天山慰霊碑、島民の墓地に御詣りのあと、日米の戦死者をお祀りしてある「鎮魂の丘」に御参拝になりましたが、その時天皇陛下は次のお歌をお詠みになつたのです。一首目は

精根せいこんを込め戦ひし人未だ地下に眠りて島はかなしき

といふお歌でした。「精根を込め」といふお言葉は、その日の夜、小笠原の父島で、硫黄島での感想を記者団にお下げ渡しになつた御文章の中にも使はれてゐるお言葉で、当日の陛下がどういふ御氣持で戦歿将兵の上を偲ばれたかが凝縮して表現されてゐるやうに思はれます。「人未だ地下に眠りて」といふのは、先程申し上げたやうに、二万を越える日本の将兵が戦死されたのですが、遺骨が収集されたのは約七千七百、未だ一万三千以上の遺骨はそのまま、地下に眠つてをられるのです。陛下はそのことをお聞きになつて、万感のおもひをこめて、「島はかなしき」とお詠みになつたのでせう。二首目は

戦火いくさびに焼かれし島に五十年いそとせも主なき蓖麻ひまは生ひ茂りぬ

戦火に焼きつくされた荒涼とした島、実際今そこには一般の人々は誰も住んでゐない。その淋しい島に、生ひ茂つてゐるヒマ、それは航空機の潤滑油に使はれるために戦前よく植ゑられたものですが、そのヒマが植ゑられてから五十数年、今は生ひ茂るにまかせて主もないまゝに淋しく風にゆらいでゐる。一首目とあはせて耐へがたい悲しみに満たされたお歌です。



その時皇后陛下は次の一首のお歌をお詠みになりました。

慰靈碑は今安らかに水をたたふ如何ばかり君ら水を欲りけむ

この島は硫黄島と名づけられてゐる通り、地下壕には硫黄の臭ひがたちこめてゐて、地下の温度も五十度に近いといふ、言語に絶する苦しみの中で戦ひがつゞけられたのです。それを思ふと、將兵たちがいかに水を求めてゐたか、胸痛いまで偲べれますが、皇后さまはその兵士たちの心情を全身をもつてうけとめるやうに「いかばかり君ら水を欲りけむ」とお詠みになつたのです。今、慰靈碑のかたはらに豊かにたゞへられてゐる水、その水の一滴でも、亡き將兵に頒つことが出来たなら――。皇后さまはどんなにかかなしいおもひで、その水を碑に注がれたことか。この両陛下の戦死者をお偲びになる御心、それはもはや「肉親の情」としか言ひやうがない、いとし子を見つめる親の目なざし、さういふものを痛切に感じるのです。

## 沖繩

この「いかばかり君ら水を欲りけむ」といふ皇后さまのお歌を読むといつも思ひ出すのは、同じ皇后さまが、平成四年、沖繩で行はれた植樹祭に両陛下下お揃ひでお出ましになつた折にお詠みになつた次のお歌です。

波なぎしこの平らぎの礎いしづなと君らしづもる若夏わかしづの島

このお歌はその翌年の歌会始の時、「波」といふ御題で発表されたお歌ですが、前の硫黄島のお歌と同じく、沖繩に命を捨てた数多くのみ霊に對して「君ら」といふ言葉で呼びかけていらつしやるのです。沖繩では春の彼岸あけから五月初めころまでのさはやかな晴天の日を「若夏わかしづ」と言ふさうですが、この沖繩ならではの美しい言葉に包まれた平和の島、しかしそこにはその平和の礎となつた二十万に及ぶみ霊が眠つてゐる。そのみ霊に思ひを馳せて、美しくも悲しい歌をお詠みになつたのです。「如何ばかり君ら水を欲りけむ」「君らしづもる若夏の島」——そこにはいづれも我が子をだきしめるやうなおもひがある。それは勿論天皇

さまも同じで、とりわけ天皇陛下が沖縄に寄せたまふお心の深さはたゞならぬものがございますが、ここでは陛下がお詠みになつた「琉歌」について一言申し添へておきませう。

陛下は昭和五十年、皇太子さまの時ですが海洋博御臨席のため、はじめて妃殿下とともに沖縄の地をお踏みになりました。その時殿下は沖縄の地に遠い昔から歌ひつがれてきた「琉歌」といふ独特の調べをもつた歌謡に強くお心をひかれて、専門の学者を宮中にお招きになつて昔の琉球の言葉を御習得、自らその琉歌の歌詞をいくつもお作りになつたのです。私どもはそのことを昭和六十一年に出版された皇太子殿下、妃殿下御共著の歌集『ともしび』ではじめて知つたのですが、その中の一首を御紹介しておきませう。

花よおしやげゆん 人知らぬ魂

戦ないらぬ世よ 肝わむに願て

正確な琉球の言葉では

ハナユウシヤギユン フイトウシラヌタマシイ イクサネイラヌユ チムニニガテイ  
と読むのですが、意味は「花をさしあげます、名もない多くの方々のみ霊に。戦ひのない

世を心から祈念して」といふことでせう。「肝ちひ」といふ言葉も美しい言葉ですね。「肝に銘じて」の「肝」、心の一番深いところといふ意味でせう。沖繩の人々の心を偲び、その心に直接語りかけるためには、やはり沖繩の言葉でなければいけない。さうでなければ沖繩の人の心の傷を本当に癒いし、慰めることは出来ない。さう思はれたからこそ、勉強を重ねてこのやうなお歌をお詠みになつたのでせう。思へばたゞならぬことではないでせうか。古来、世界に君主多しといへども、これほどに心を碎いて国民に接しようとされた人が一体他にあるだらうか。

沖繩といへばすぐ思ひ出されるのは、父君昭和天皇が、昭和六十二年の秋、重い病ひの床でお詠みになつた次の一首です。

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを

御存知のやうに天皇はその年の九月十八日に御病状が悪化、二十二日に手術をおうけになりました。その大手術を終へられてから二日目の夜、陛下は傍らの人に「もうだめか！」と一言漏らされたさうです。それを聞いたお傍の人は「自分はもう再起することはできないの

か」と仰言つたのかと思つたのですが、さうではなかつた。実はその秋には陛下は沖縄で行はれる国民体育大会行幸のため、戦後はじめて、待ちに待つた沖縄の地をお踏みになる御予定だつた。その沖縄への行幸がだめになつたのか！ と仰言つたのです。あの重い病ひの床に、夢寐むびの間にもお忘れにならなかつた沖縄、その念願の沖縄に行けなくなつたその時の御心を、陛下は先の一首に托し給うたのです。「沖縄をたづねて果さむつとめありしを」——何と悲痛なお言葉でせう。現在沖縄についてはあれこれと報道されてをりますが、この昭和天皇から今上陛下、皇后陛下へとうけつがれた沖縄に寄せ給ふお心の深さ、それだけは沖縄県民に限らず、国民のすべてが心の奥深くに刻んだ上で、沖縄が直面してゐる問題を考へていかなければいけない、さう思はれてなりません。

ここで一言つけ加へておきますが、よく「沖縄の犠牲者」といふことを申しますね。私はさういふ言葉を耳にするたびに本当に申しわけないと思ふのです。沖縄の方々は決して犠牲者などではない。たゞひたすらアメリカの軍隊を本土に上陸させないために、命を捨てて、アメリカの攻勢を防ぎとめていただいた尊い恩人なのです。そのため米軍は予想を遙かに越えた月日を費し、六月二十三日、摩ま文ぶ仁にの丘に全員が玉碎するまで実に三ヶ月に近い戦ひを強ひられたのです。かうして沖縄の方々の悲願の通りアメリカは日本本土への上陸を諦めた

のです。沖縄の方々のお力によつてこそ、今の日本がある。私たちは心から感謝の誠を捧げべきであつて、かりそめにも犠牲者などといふ言葉で呼ぶべきではないと思ふのです。

### 肉親の情

さて天皇が国民を思はれる時、この肉親の情としか言ひやうのない御気持を示していただいた場面は無数にあります。ここでは昭和二十四年、昭和天皇が国外からの未帰還者を思はれてお詠みになつた二首のお歌を紹介しておきませう。それは、

外国とくこくにながくのこりてかへりこぬ人をおもひてうれひはふかし  
国民くにとみとともに心をいたためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

といふお歌です。戦争が終つた時、海外には数多くの方が残つてをられた。その数六百六十万位と言はれてゐますが、このお歌が詠まれた昭和二十四年には、その大部分は引揚げが完了、たゞ一つ残つてゐたのは不法にシベリアに抑留された同胞たちだけでした。しかし漸く

にしてその年の六月にはソ連からの引揚げも再開され、その第一船高砂丸が舞鶴に入港する、さういふ背景の中でこの歌をお詠みになつたのです。本当に身にしみるお歌ですね。とりわけ一首目の「人を・おもひて・うれひは・ふかし」、その三・四・四・三といふコトバのシラベ、その中に陛下の御真情はこもつてゐる。それは二首目の「ただ・まちに・まつ」といふ切迫した御表現にも偲ばれるところです。最初に天皇の御存在の意味を、そのみ歌にお偲びしたいと申し上げましたが、かういふ御歌を拝誦してみると、万言を費した天皇論でも言ひつくせない天皇の御存在の意味、その重みがよくわかりだと思ふ。陛下は何にも仰言らない。しかし常に国民の傍らにあつて、「国民とともに心をいため」ながら未帰還者の帰国を御待ちになつてをられる天皇、さういふ天皇を戴いてゐる国民の幸せは、或る「構へた考へ」をもつてさへみなければ誰の心にもすなほにしみこんで感じられるのではないでせうか。

さらにこれは戦争中のことですが、昭和天皇が胸にいだいてをられた「肉親の情」をさらに痛切に思はしめらるゝお話がございますので御伝へしておきませう。それは昭和十八年の五月のことでした。太平洋のずつと北のアリューシャン列島にアツツといふ島がありますが、その島にアメリカの軍隊一万一千が上陸してきます。守る日本兵は僅かに二千六百、先ほどの硫黄島の時と同じですが、五月十二日に戦がはじまつて、激戦の末、遂に五月二十九日我

が軍は玉碎する。その愈々最後の時、守備隊の山崎部隊長から大本営あてに電報がはひるのです。それにはこの電報を発信したあと、暗号書は焼却し、すべての無線機も破壊して、最後の夜襲攻撃に移るといふ内容でした。それで時の参謀総長は杉山大将でしたが、翌三十日参内して陛下に御報告申し上げた、その時のことを杉山大将は次のやうに語つてをられます。「陛下は静かに奏上をお聞きになり、何も御下問はなかつた。アツツ島部隊の将兵を追悼されてゐる様に拝した」。ところが陛下はそのあと「部隊の将兵は最後までよくやつた。この事を伝へよ」と仰言つたのです。それで大将は「畏れながら、只今奏上いたしました如く、無線機は既に破壊してしまつてをりますので、お伝へすることはできません」と申し上げた。——ところが陛下は何と仰せられたか。それは「それでもいいから電報を出してやれ」といふお言葉だつたのです。このことは昭和天皇崩御のあと出版された『文芸春秋』の特別号「大いなる昭和」の中の、瀬島龍三氏の文章で知つたのですが、そこで瀬島氏も言つてをられるやうに、まさに我が子の最後を看取つてゐる母親が、すでにこと切れてしまつて、もうだめだとわかつてゐても、まだ子供の名を呼びつゞける母親のやうなおもひではないか。今度のあの激しい戦争のたゞ中に、さういふ場面があつたことを私達は決して忘れてはならないと思ふのです。かういふ天皇の御存在、そこにこそ何千年と続いた日本の天皇の御本質がある



と思ふのです。

世界に類を見ない「君臣の情」

御存知の方も多いと思ひますが、昭和の初めから天皇のお側で侍従をおつとめになつてこられた木下道雄といふ方がいらつしやいます。この方の名著『宮中見聞録』の中に有名な「鹿児島湾上の聖なる夜景」といふ一文がございます。その冒頭に木下先生は次のやうな挿話を書いてをられます。

これは先生御自身の経験ではないのですが、先生の友人の三宅といふ判事さんがある時ドイツから来た客人を案内して二重橋の前に行つたことがある。丁度それは支那事変が勃発した頃でしたが、出征を前にした沢山の兵隊さんたちが陛下にお別れに来てゐる。さういふ情景があちこちで見られた。その中に田舎から来たらしい、出征する兵士を交へた親子三人連れの人が近づいてきて、遠慮勝ちに、二重橋の奥の玉垣のところまで敬虔なお祈りを捧げてゐる。三宅さんは非常に感動してその様子を見てゐた。しかしドイツ人にはなぜこんなに多くの方が天皇にお別れの挨拶をしてゐるのかよくわからなかつたらしく、二重橋の上の伏見櫓

を見上げながら、「皇帝陛下はあのお城の窓からこちらを見ておいでになるのか」と三宅さんに尋ねたのです。ドイツ人は皇帝陛下が見ていらつしやらないのに、国民がこんな敬虔な態度をとることはあり得ないと思つたのでせう。その時三宅さんははつと思つた。その個所を木下先生の文章で読んでみませう。

「この問ひをうけた瞬間、三宅君の脳裏に閃めいたのは、かの眼をいからし、腕を振つて、群衆の前に、叱咤激励、獅子吼する彼の国の独裁者の姿であつた。かくしなければ国民の心を捉へることのできない国柄と、わが日本の国柄とのいちじるしい違ひを、深く心に感じながら、三宅君は『否』とのみ答へて、しばしその場を立ち去りかねた。」

ここなのですね。ここに見られる国民と天皇とのこころのふれあひ、そこに天皇の御存在、天皇政治の本質、国柄のすがたがある。それはかうでなければいけない、教育されたからさうするといふことと全く違ふ。そこに見られる君臣の心のふれあひ、それは一朝一夕に出来るものではない。それこそ二千年、三千年といふ長い歴史の中にもし出された世界なのでせう。それを皆さんお一人／＼のお心で偲んでいただきたい。さうすれば最初に申し上げた大伴家持が「大君の辺にこそ死なめ」と歌つたその気持がきつとわかつていただけると思ふのです。天皇といふ世界の中に、搦めとられてしまふのがこはいといふお気持は、今の

教育界の現状からしてありうることでせう。しかしそれがいかに貧弱な思想であるか。こんなに美しい世界があるのに、それに全く反応することが出来ないといふことであれば、それがどんなに淋しいことなのかをよくよく考へていたゞきたいと思ふのです。私が、「天皇と国民」といふ題のそばに「かへりこぬ人をおもひてうれひはふかし」といふ副題をつけましたのも、この君臣の心のひびきあひの中に、他の国には見られない、概念の操作では到底理解できない、日本の国の天皇の本質があると思つたからなのです。

### 《質疑応答》

《問》先生は天皇のお歌には「肉親の情」を感じると仰言いましたが、私は肉親として庇護されるといふやうな関係としてではなく、お互ひに同じ人間として本当にわかりあへるやうな関係でありたいと思つてゐますが、どうお考へでせうか。

《答》同じ人間として、といふやうに言つてしまつていいのか、これは実に重大な問題ですがこのことについてはこれからゆつくり考へていたゞくとして私がここでお話したかつたこ

とは、天皇と国民の間がどうあるべきかといふことよりも、天皇がどういふ気持ちで生きてをられるのか、どのやうに国民に接してこられたのかといふことを、天皇の御歌を通して知っていたゞきたいといふことでした。さういふお気持ちを知るといふこと、心の中にしつかりうけとめるといふことがいまの君にとつては何より大切なのではないでせうか。その上で天皇と国民との関係がどうあるべきかといふことについて、自分で考へてほしいのです。しかし現在は一般的にそれが逆になつてゐて、まづ天皇に対して例へば最初に申し上げた言葉でいへば、或る程度距離をおくべきだといふやうに、こちらの姿勢をきめたあとで天皇と国民の関係はどうあるべきかと考へる。君が「お互ひに同じ人間として」と言はれた、その考への中にはすでにさういふ前提が用意されてゐるやうに思ふのですが、さういふ身構へがあればどんなにお話しても何の意味もないのです。昨日、青山直幸さんが短歌の導入講義の時におふれになつた、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」の一節に「人は何事にまれ、感ずべきことにあたりて、感ずべきところを知りて感ずるを、もののはれを知るといふ」といふ言葉がありましたね。私はその言葉に尽きると思ふのですが、大切なことは感じることに。人間であれば当然感ずべきことに感じる、すなはちもののはれがわからなければ、どんなに学問をしても何の意味もない。ところが現在はなまじつか学問をしたばかりに逆にそれが感じられ

なくなつてしまつてゐるのではないか。とすれば、天皇論にはひる前に、学問のあり方そのものが問はれなければいけないのではないでせうか。よく考へてみて下さい。

《問》天皇の御心を理解するために、天皇がお詠みになつた和歌を味はふことが大切だといふのはわかりましたが、和歌の他にどのやうなものがあるのでせうか。

《答》私たちが和歌を大切にするのは、結局はコトバを通してしか人の心はわからないと思ふからです。この世に天皇論はあふれてゐる。しかし肝腎の天皇御自身がどういふお氣持で生きていらつしやるのか、それを理解しないでたゞ制度の面だけを問題にしたり、概念的な理論をいぢりまはすだけではほんものの天皇論は決して生れないと思ふ。夏目漱石を論ずる時には当然、漱石自身の作品を徹底して味はふといふのが前提なので、作品をぬきにした漱石論などあり得る筈がない。それと同じく歴代の天皇が一貫して和歌を詠みつゞけて来られたことを考へるならば、天皇の御本質を考へるためには、どうしても天皇がお詠みになつた和歌を素通りすることは、絶対に許されない。しかも皆さまがこの合宿で和歌を詠んでおわかりのやうに和歌では決して嘘がいへない。もし嘘を言つて自分を飾らうとするとすぐわか

つてしまふ。そこには人の心が鏡に写すやうに正確に写し出されるのです。私たちが天皇のお歌を大切にするのはさういふ理由からです。そこに天皇の御存在の意味がはつきり読みとれるからです。

なほ和歌以外に「詔勅」がある。もつともこれは一応臣下が起草するものですが、さうであつても、その起草者は些かも私心を交へることが許されない。たゞひたすら天皇の大御心になり切つて起草するといふ、大変な精神の緊張のもとに筆をおろすわけですし、しかも当然のことながら最後には天皇が御自身で加筆して御下しになるわけですから、御製と同じく天皇御自身の御表現として大切にお偲びすべきでせう。

《問》 イギリスも君主制の国で女王がいらつしやいますが、イギリスの君臣関係も日本と同じ「肉親の情」のやうなもので結ばれてゐるのでせうか。

《答》 それは難しい御質問です。よくはわかりませんが、言ふまでもなく、イギリスと日本とはその王室の発祥の形態は全く違ふ。日本では皇室が実に自然な形で遠い昔から連続とつゞいてゐるのに対して、イギリスでは幾多の血腥い事件をくぐりぬけて、現在の王室が

ある。従つて君臣の關係にもそれなりの相違はあるのでせう。しかしさうは言つてもイギリスにはイギリスなりの歴史があつて、その中で蓄積された王室と国民の間の感情には美しいものが沢山あるはずでせう。とりわけ明治以来、日本の皇室とのつながりも深く、日本の皇室もイギリスの、王室と臣下との關係について学ぶべきものを多く見出していらつしやるのではないでせうか。御質問に答へることはできませんが、イギリスの王室についての感想を一言申し上げておきます。

なほそのことと関連して申し上げておきたいと思ひますが、御存知のやうにフランス革命以来、とりわけ第一次大戦以降、世界の君主国は次々に姿を消しつゝある。従つて今の若い方の中にはそれが時代の流れであつて、ことさらに君主制を倒すべきだとは思はないもの、いづれ時の流れで君主制は姿を消すだらう。従つて天皇制もさういふ時が来るにちがひない、さう漠然と考へてゐる人が相当をられるのではあるまいかと思ふのです。だがそれは間違ひです。たしかに世の中は君主制から共和制に移つてゐるやうですが、今世界で安定してゐる国はどこか、と考へてみればすぐわかります。王室をもつてゐる国は実によく治まつてゐる。といふのは人類は遠い昔から、いはゞ本能的に君主制を求めてゐるからではあるまいか。君主世襲といふ形を国家の中心に据ゑることによつて、国家が永久に持続してゆく時の流れを

確保してゆく。それは、いはゞ、人間自然の情であり知恵なのではあるまいか。それにことさらに逆らつてきたフランス革命以後二百年こそ、人類の進歩どころか、むしろ人類の歩みを逆転させた、特殊な時代だつたのではなからうか、今はそれが問はれてゐる時だと思ふのです。バスに乗りおくれまいとするやうな愚かな考へを捨てて、君主制のあり方、ひいては天皇政治が今後、世界の歴史に果すべき重大な役割は何か、さういふことを皆さま一人々々、自分の目で勉強を積み重ねていたゞきたいと思ひます。

《問》いつか紀宮さまが、皇后さまは「いつも皇室は祈りでありたい」と仰言つてゐるといふことを新聞で拝見しましたが、このことについてどのやうにお考へでせうか。

《答》大切な御質問ですね。御手許にお配りした資料についてお話する時間がなくなつてしまひましたが、これを御覧になれば、天皇さまをはじめ皇室の方々がどんなに心をこめてお祭りをおつゞけになつていらつしやるかがおわかりいたゞけると思ふのです。昭和天皇が七十歳の御誕生日をお迎へになつた時に

ななそぢを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ



とお詠みになりましたが、二句目で「この朝も」と仰せられたやうに、天皇さまは毎朝々々国の平和と国のいのちが永遠であるやうに神さまに祈りつゞけていらつしやるのです。

今日は天皇さまのお歌のお話で終つてしまひましたが、当然のことながら、その前提として御質問の中にありましたやうに、「皇室は祈りである」といふ、天皇のご存在の本質が悠久の歴史を貫いて存在してゐることを知らなければなりません。国民が自分の生活にかまけて生きてゐるさ中、皇居の奥では不斷にこのやうなお祈りがつゞけられてゐるといふこと、それは一般の報道では全く伝へられてゐないことですが、そのやうな厳肅な世界が、日本の中心部に厳として存在してゐることに、国民すべてが思ひをはせなければいけないと思ひます。



講話

木のいのち、木のこころ

——西岡常一とつりよう棟梁と私——

宮大工・いかるが鶴工舎 舎主

小川 三夫



宮大工を志して

内弟子時代のこと

木の話

鶯工舎の弟子たち

西岡棟梁の教へ

法隆寺と口伝について

《質疑応答》

## 宮大工を志して

皆さん、こんにちは。私は「無駄口を叩くな、黙つてゐろ」と言はれながら育つた人間です。その私がこのやうに皆さんの前で話すのはちよつと場違ひと思ひますが、今やつてゐる仕事の話を聞いて下さい。

私は、昭和四十一年の二月に法隆寺大工へ弟子入り志願に行つたんです。でも、私は栃木県なので法隆寺の大工さんにどういふ人があるか、どういふ人に会ひに行つたらいいのかわ分からなかつたんです。先づ奈良の県庁へ行つて、「私はこのやうな仕事をしたかったので、お世話願ひます」と言つた訳です。さうしたら県庁では、「法隆寺には西岡檜光といふ棟梁があるから訪ねてみなさい」といふことでした。さうして法隆寺へ行つたんです。法隆寺の仕事場へ行つたら、大工さんが二人仕事してゐました。そこで、「西岡さん、どなたでせう」と言つたところ、「西岡誰だ」つて言ふんですね。私はとても頭のいいはうなので、西岡誰だと言はれて、ポーツと上がつてしまつて分んなかつた訳です。さうしたら、「西岡は、俺だ」と言つて会つてくれたのが、今までの師匠である西岡常一だつたんです。

法隆寺には西岡楯光、その子供さんの西岡常一、西岡楯二郎と、三人棟梁がをつた訳です。で、一番先に行つてしまつたのが西岡常一のとこで、私はまあよかつた訳です。「西岡楯光」といつたらその頃お爺さんは八十位でしたから、もう弟子を取ることはかなはなかつたでせう。ですから、頭がいいつていふのばつかしが自慢ぢやないんですね。そこで忘れたから私は運が開けたんです。

そこで西岡棟梁と話してみたら、「今は仕事がない」と、それと十八で行つたんですけども、「お前の年齢がたけ過ぎる」と、その二つの理由で宮大工になるといふことは断られてしまひました。しかし、帰りに「どうしてもと言ふなら、文部省への紹介状を書いてやるから行つてみなさい」と。紹介状を持つて文部省に行きました。さうしたら文部省では、大工を養成する機関ではないといふんです。それで「一年でもいいから、のみ・鉋を使つてきて下さい、その後はどこかの現場へ世話する」といふことでした。

なぜ私は宮大工になりたかつたかといふと、高校二年の修学旅行の時に、初めて法隆寺の五重塔を見たんです。その時に案内してくれた人が「この塔は、一三〇〇年前に建つたものです」と、さう言つた時に、私は一三〇〇年前にどうしてこのやうな材料を運んだか、さうして、どうして塔の相輪を上げたかとか、さういふことを考へてゐるうちに、この仕事をや



つてみたいといふふうになつた訳です。

さうして、「二年でもいいからのみ・鉋を学んでこい」といふことを信じて先づ一番先に、家具屋に行つたんですね。家具屋に行つたらみんな機械ばつかしで駄目なんで、すぐに辞めてしまひました。

でもさうかうしてゐるうちに、旅行雑誌に長野県の飯山の仏壇作りが紹介されてたんです。その仏壇を習へば多少宮大工に近いんじゃないかと思つて、長野県の飯山に修業に行つた訳です。そこで仏壇を作つてゐる人が弟子にしてくれたんです。それで住み込み修業が始まつた訳です。

住み込み修業つていふんですから、それはちよつと大変なんですね。そこには家族が六人ゐました。親方と奥さんとお婆さんと小学校三年の女の子と小学校一年の女の子と、生まれて十か月位の女の子がゐたんで

す。その頃の昭和四十年代は仏壇がすごく売れた時代なんです。それで奥さんは金箔張りの職人だつたんで、仕事に行つて帰つてくんのが七時位なんです。さうして、十八で行つたんですから、十八の色気盛りに夕方になると十か月の女の子を背負はされて、買ひ物かご持つて買ひ物に行く訳です。

さういふ生活をして、飯山での一年が過ぎて、また法隆寺へ行きました。法隆寺には、その時丁度文化財の修理監督が来てて、島根県の大社町といふところに日御碕神社といふのがあるので「そこへ図面書きに行くか」といふことになつて、私は日御碕に行きました。

### 内弟子時代のこと

大凡二十か月位過ぎて今度は兵庫県の豊岡といふ所へ行きました。酒垂神社の解体修理をして四か月位過ぎた時に、「奈良の法輪寺の三重塔の工事が始まるので、お前一人位ならいい」と、西岡から手紙をもらひました。それは昭和四十四年三月でした。西岡を初めて訪ねて丁度丸三年経つて、四年目でした。

先づ一番先に「道具を見せな」つて言ふんです。かうやつて見せたら、見たらポイツと投



げちやうんですよね。一生懸命研いでいつたんですけども、西岡は使へる道具と全然見なし  
てくれなかつたんでせう。次に棟梁は「納屋の掃除をせい」と言ひました。納屋には作りか  
けの仏壇、厨子、それとか今建ててゐる建物の凶面の引きかけがあつたり、西岡が使つてゐ  
る道具が置いてある訳ですね。ああ、それで「これで弟子入りが認められたんだな」と思ひ  
ましたね。弟子にするとか何とかつていふことは言はないんですね。回りくどく「納屋の掃  
除をせい」と。それで、納屋の仕事場を見せてくれた。次に言はれたのは、「これから一年間、  
新聞・ラジオ・テレビ、さういふもの一切見る事ならん。ただ、刃物研ぎだけをしなさい」  
といふことでした。さうして毎日毎日朝飯食つて弁当もらつて、法輪寺へ行つて二人で仕事  
する訳ですね。仕事してゐると、私はまだ未熟ですから、手を切つたことあるんです。槍やり  
鉋がんなを研いでて手を切つたと。さうすると手を切つたら怒られると思つて黙つてゐた訳です。  
血がかうたれますからね。「手切つたんか」言ふから、「はい」。「なぜ言はねえ」つて怒るん  
ですよ。ああ、これは言はなくちやあなんねんだなと思つて。二回目にもまた切つたんです。  
こんだ言はなくちやなんないと思つて言つたら、「ほけつとしてゐるからだ」と怒られんです。  
どつちにしろ、怒られなくちやなんないんです。理屈はないんですね、もうさういふやうな  
生活です。

しかし、徒弟制度つていふのは色んなところで変なふうに見えるけども、緊張の連続なんです。自分の時間は全くありません。でもこのやうな生活をしてると自分の癖が分かるやうな気がしますね。個性は師を見て学び取ることができるんです。一番大切なのは、よい師匠につけばこれは幸せですね。

## 木の話

木といふのは、色んな育ちがあります。丁度、峰の一番尾根のところで育つた木はいつも太陽に照らされてて、自然環境の厳しいところですわな。それに比べて谷のはうで育つた木は、自然環境がいつも穏やかなところですね。それで木の使ひ方といふのは、谷のその穏やかな所で育つた木は、内部造作つていつて、建具とか天井板とかに使ふ訳です。峰で育つた木は、いつも自然環境にもまれてゐますから、屋根を支へる材料に使ふ訳です。垂木とか、柱とかで使ふ訳です。

捻<sup>ねぢ</sup>れる木といふのがどういふふうにしてなるかといふと、今は大体植林で木を育てますから、苗床で三年から四年育てます。その育つた木を山に移し替へる時に、これが大切なんで

すね。山に移す時に同じ方向へもつて移さなくちやなんないんです。南に育つたら南に向けてやんなくちやなんないんです。これをもし苗床の反対に植えてしまった場合には、一年で完全に南に向きます。木はそのやうにして、捻つて苗床の環境と同じ陽の受け方をします。それと、いつも同じ方向から風を受けてゐたのでは木は捻れます。捻れた木は元に戻らうと反発をして捻れるんです。反発する力が出てしまふ訳です。ですから、木は環境によつて育つ訳です。

木材といふのは、先程言つたやうに密植で育てます。(講義室から外の森を望みながら)こつから外に見える木はみんな密植で育つた木です。それで、どういふふうにするかと言ふと、一町歩、大体、三〇〇〇坪なんですけど一町歩に対して四〇〇〇本から五〇〇〇本の木を植えるんです。ちやんと用材として使へるやうになるのは、その一割の五〇〇〇本位なんです。なぜ密植にするかといふと、生存競争をさせる訳です。強い木はポツと上に伸びて、その木は隣の木を日陰にしてしまひます。日陰になつた木は、もうそれ以上は伸びません。そして強い木同士がまた大きくなると、密植になつてしまひます。しかしその時には大きく伸びて隣の木の下のはうには陽が当たらないといふことになります。さうするとその下の木は枯れてしまつて下枝がなくなる。ただただ上に伸びお互ひに真直ぐに伸びるといふやうな

ことをさせる訳です。でもさういふ木は真直ぐに伸びてゐますから、下の木の末のはうも上のはうも同じ太さで育つてゐる訳ですね。さういふ木は節がなくて真直ぐに育つた木ですから、扱ひやすい木なんです。それを良質材といふんですね。それに比べて庭の真ん中にあるやうな木、四方八方から陽の光を浴びて育つたやうな木はもう大きくなるといふよりも横に太くなるからずんぐりむつくりの木ですね。それは製材した場合には相当使ひにくい木になつてしまひますね。しかしその中に使ひにくいけども、樺なんかでいふとその中に銘木と言はれる木肌の素晴らしいのがあるんです。普通、良質材を取るのは学校教育みたいなもので、銘木を取るのは個人で育つていくやうなものでせうな。それに大切なのは杉は杉、檜は檜の山にしてしまひますわね。これがとつてもいけないんですね。

檜があり杉があり、色んなものを混植することが檜のため杉のためにはいいんですよ。それが証拠に自然の山は、色々な木が混じりあつて一つの林を作つてゐるんですね。一種類の木だけ生えてゐる山はないんです。

それに木には寿命があるんですよ。生ひてあるだけでいい訳ぢやないんですね。それで私たちは実生のもの、これといふのは種が落ちてそのまま生えたものですね。実生のものなら檜・翌檜<sup>ひば</sup>で二〇〇〇年、杉で一〇〇〇年、松で大体六〇〇年位といふふう聞いてゐます。

それが植林したのではその実生の木の寿命の半分位しか生きないですね。

今、木造の家を作つても、大体二〇年、三〇年位の寿命しかないですわな。ですけども、今の木造建築の柱を取る材料は、六〇年位育たないと柱を取れないんです。六〇年のサイクルで家を作つていくんでしたならば、木材資源はなくなることはないんですね。ですから、老木になるまでに切つて利用し、山をきれいにして種子の発芽を助けるんですね。〃千年の木は千年もたせる〃といふのが、これが私たちの言ひ伝へであり、工人の腕です。千年の木つて言ふんですけど、千年の木は沢山生えてゐる訳ぢやないんですね。あつちにポツン、こつちにポツンとあるんです。台湾の檜なんですけどそれはまるで回りの木の養分を吸つて、自分の縄張りを張つてゐるかのやうな生え方をしてゐますね。千年の木には千年の風格があるんですね。

社寺建築、法隆寺・薬師寺、ああいふものがなぜ千年ももつてゐるのかといふと、「礎石造」だからなんですね。礎石造といふのは、石の上にポーンと柱が建つてゐるだけですから、千年、二千年もつ訳ですよ。これが「掘建柱」といつて、柱を埋めて縛つて建物を建てた場合には、柱が腐つてしまつて駄目なんですね。ですから、伊勢神宮は二〇年に一遍の遷宮をしますね。二〇年に一遍建て替へて、ずうつと今まで守つてきました。さうでないと柱が腐つ

てしまひますわな。法隆寺なんかの場合は、石の上にトンと乗つてゐるだけです。腐ることはないですね。どういふ利点があるかといふと、この前の神戸の地震のやうに、ああいふ地震が来ても建物は倒壊しなくて、歩いていつちやうんですよね。地面がガラガラッと揺られても、コトコトと歩いていくことができる訳です。

### 鵜工舎の弟子たち

それでは弟子の話をしてします。私は昭和五十二年の五月に、いかるが鵜工舎を作りました。今、栃木と奈良と福岡に大体二〇人位の弟子がゐます。工舎に入つてきた子は、先づ飯焚きです。朝五時から五時半に起きて職人の弁当を作ります。それで朝食を食べて行きます。仕事場に行つても仕事がないから、掃除したり時間があれば刃物研ぎの練習です。それで帰つてきて夕飯食べてまた時間があれば研ぎ物の練習です。毎日毎日さういふ飯作りと掃除とだけやつて、日常生活が苦にならなくなつてから仕事を学び始めるんです。

若い子ですから色々なことがあります。愛知から来た三輪田つていふ子は、来て一週間目に「脇の下が痒いんで薬下さい」つて言ふんです。何と「ダニでも発生したかな」と思つ

たんですよ。さうしたら違ふんです。洗濯機の中へ洗剤入れて洗濯はするんですけども、濯ぐことを知らずに、そのまま干してた訳ですから洗剤でかぶれた訳ですね。

そんな中和歌山の竜神村から来た松本源九郎つてのがあるんですけど、これは私のところへ来るまで切符買って電車やバスに乗つたことがないでせうな、自分では。それが来て食事当番やつてます。

皆が源ちゃんカラオケに行つたことがあるらしいです。「源ちゃん歌へよ」つて源ちゃんが歌つたらしいんです。さうすると英語の横文字が入るところになるとニコニコしてんです。「英語駄目か」つて言ふたら、「うん、わしゃ英語、1ぢやよ」つて皆笑つてるわな。さうしたら「ほんととは嘘ぢやよ」つて言ふて「ほんととはゼロぢやよ」つて言ふんだ。「通信簿にゼロがないから1くれたんぢやよ」つて言ふんですよ。さういふ子なんですな。だからさういふ一つ一つの会話で皆が和んでゐる訳です。

ですから、弟子に入つてきて一番先に先生にするのは源ちゃんであり彼に皆教はる訳ですね。源ちゃんから刃物の研ぎを教はつて、他の現場に行く訳です。池上つて子なんですけど、これはとつても頭がいいんですね。しかしその子はいくらやつても源ちゃんの腕、研ぎまでにはいかないんです。それはやはり頭で考へるんでせうな。研ぎ方をね。体で覚えんぢやな

くて。

家に来た子でも色んな知識を持つて来た子もゐます。学校へ行つて、どうのかうのいつて、知識を植ゑ付けられて来る子がゐます。しかしそのやうな子は知識が邪魔をして、ゼロに戻すまでが大変なんです。家に来たら先づ刃物の研ぎからですから、色んな知識はいらないんです。なぜゼロに戻すか、戻さなくちやなんないかつていふと、中途半端で物事を覚えてしまふと、波になつてしまふんです。いい時はいいんですけど、いざとなつて困つた時は全く駄目になつてしまふやうに、波を打つてしまふんです。ですからゼロに戻すんです。それは大変なことなんです。源ちゃんやんのやうに何にも分ないと、こつからきてずうつとただ上がるだけなんです。ゆつくりゆつくり上がつて行く訳ですね。色んなこと覚えてくるとこれをゼロに戻すまでの期間に、ものすごく怒つて怒つて、その人間性が無くなるまで私のところは怒りますね。で、ゼロにしてそこから上がるんです。ですから、修業に来るには、無垢で素直が一番です。それはどういふことかといふと、疲れないことです。さういふ子は疲れないんですね。無垢で素直な子は、この素直さが修業する時には一番大事だと私は思ひます。



## 西岡棟梁の教へ

家に来た子たちは時間があれば研ぎの練習ばかりです。私も西岡に初めに「先づ研ぎ物だけをしなさい」と言はれて、行つて何日か経つてから、西岡が納屋に上がつて来てくれました。私が研いでゐるところへきて「鉋屑はかういふもんだ」つて鉋を引いてくれたんですね。その鉋屑は真綿を広げたやうに向かうが透けて見えるんですよ、薄くて。すうつかう広げておいたらパーと向かうが完全に透けて見えるやうな鉋屑なんです。鉋屑はかういふもんだ、それだけです、私は二十何年間一緒にゐましたけども教へてくれたのは。手取り足取りでは絶対何にも教へてくれない。その鉋屑を示してくれたのが最初で最後のものです。ですから、「研ぎ澄ます」つていふやうな言葉があるやうに毎日毎日研いでゐることによつて、大工としてその精神、さういふものは磨かれていく訳です。研ぐことが大工の第一歩です。何ほ器用な人でも、爪では木は削れませんからね、道具を借りなくちやなんないですから、道具を丁寧扱ふ気持がなくては駄目でせうな。ですから何にも教へないことです。教はるといふことは甘えにつながるんです。それで本人が学ぶ気持が湧いてくるま

で、放つておくんですね。そしてほんとに学びたいと思つてきた時に仕事場を与へてやればいいと思ひます。ですから職人は学校のやうなところではちよつと育ちません。現場で仕事を見習はせながら育てていく外ないんですね。私たちのやつてゐる仕事は長い長い年月がかかります。それで建物がとても大きいですから材料も重いです。さういふ仕事を皆して一生懸命やつてゐると、そして同じ所で寝て同じ所の空気を吸つて、同じ物を食べて生活してゐると、自然に相手を理解してくる優しさが生まれてくるやうな気がしますね、うちの弟子たちを見てゐると。ちよつと走つても木をもつにしても、重たいはうにすうつと自分が行きますから。軽いはうを持たうつていふ子はゐないですから。先輩がゐたら自分はすうつとかう重いはうに走つて行くやうに見えますね。

ですから仕事度胸と優しさを育てるなら、何も教へないことが一番だと思ひます。それは黙つてて見守つてやらなくちやいけないんですよ。

西岡棟梁は今年の四月十一日に亡くなりました。今その棟梁をじつと亡くなつてから思つてみると、棟梁つていふのは、とても自分自身に厳しく生きた人です。厳しく生きた人が、感じ得た優しさつていふものを持つてゐますね。優しさつていふ言葉が今流行つてゐるやうですけども、本当の優しさつていふのは、とても厳しく生きた人が感じ得たものが本当の優

しさではないかといふ気がしましたね、棟梁を見ててですね。

私たちの仕事を通してみると、今の世の中はあまりに急ぎ過ぎてゐるやうに思へますね。耳と目で学ぶ知識つていふのは、頭で少し位急いでも対応できるんですよ。しかし、手で覚えることは、対応するまでに時間がかかります。その頭で適応できる時間と体が適応する時間に大きな時間の差があるんです。それを一つと思ふとんでもないことになるやうな気がします。ですから簡単に職人は育ちません。時間をかけて、手に記憶させるのです。古代建築を守つてきた技は文字や数字ではないんですね。手、体に覚えさせた記憶が今のものをもたせてきた訳です。

それに頭でものを考へてしまふ人は、どうしても自分の今までの経験や勘で物事を捉へてしまひますから、物事に対して素直に入つていけないと思ふんですね。それは私が奈良にゐますから、修学旅行生に見る思ひがしますね。修学旅行生が来ると、大体において見方は「この仏さんは、腰がひねつてゐる」だとか「この仏さんは、指がきれい」だとか言つて、五十人ゐるクラスだつたら皆同じ見方をします。ですから、さういふやうな見方ばかりですから、仏さんを目の前にして手を合はせる子はゐません。美の対象としてしか見てゐないんですわな。やはり仏さんなんですから、お寺へ来て見るんですから、手を合はせる位のこととは

あつてもいいと思ふんですね。

建物にしても、これはエンタシスの膨らみがどうのかうの、そればつかしなんですね。さうぢやなくて塔を見たら、この塔は何で千年以上も建つてゐるか、何で風雪に耐へてゐるかといふことを感じられるやうな子があつてほしいんですね、さういふ子はゐないですね。それは仕方ないですね。学校の先生がそのやうに見なさいと言つて教へて来るんですからね。

### 法隆寺と口伝について

なぜ木造建築が千年も建つてゐるかといふことと、西岡棟梁から学んだ鶯寺工の口伝のことを話します。西岡棟梁と仕事をしてゐる時に、法輪寺に歸つて来る途中に、私が来て半年位経つてから、棟梁が一言言つたんですね。「法隆寺の塔は安定してゐて、動きがあるだらう」つて。私はそれを聞いた時、安定といふのは分かるんですね。法隆寺の塔は低減率と言つて、上でぐうつと小さくなります。木柄が太いですから、それで安定といふのは感じとれるんですね。でも、「動きがあるだらう」つて言ふんです。それはちよつと分かんなくつたんですね。

そしてまた三か月位経つてから、「松の木を見てみい」と言ふんですね。普通の松は下枝

がずうつと出て、二の枝は下がつてゐますね、それで三の枝がかう出ますね。下が出て、二番目がちよつと下がつてます。

法隆寺の五重塔の一層・二層・三層の軒は、さういふふうになつてゐるといふんですね。それは下から見ると、確かに外がかう平面で見ても分らないですけども、丁度五重塔の四隅の端から上をずうつと見ると、一層目と三層目は見えますけど、二層目はちよつと軒先がへつ込んでゐますわな。

それは聞いてゐたんですけども、目の錯覚ではないかと思つてゐたんですよ。しかし、それが薬師寺の西塔を再建するに当たつて、西岡棟梁と私で全部寸法を採る訳ですね。その採つた時に、柱間はしらまですけども一寸四分位堂が絞られてゐるんです。普通の寸胴にしないで、真ん中をちよつと絞つてかうしてあるんですね。それに、例へば薬師寺の西塔、裳階の柱は、内側へ大体七分五厘、二センチ位内側にこけてゐるんですね。あの柱の長さで、内側にかう二センチ位こけてゐる訳です。そして柱の天辺が真直ぐぢやないんです、水平ぢやないんですよ。そこにも四センチ位の伸びがあるんですね。ですから柱の上だけでもかう伸びてゐて、内側に転んで、本建ちは一寸四分ほど堂が絞られてゐると。これが真直ぐでは、外に開いて見えますわな。柱が真直ぐに建つてゐるのでは上の柱が開いて見えるから、内にちよ

つと転ばして、そんで真直ぐではかう真ん中がむくつて見えますから、隅柱をちよつと伸ばす。それを工事としてするのは大変なんですけども、それがしてあるんですね。それは目の錯覚を矯正したとか、大自然の力を、その塔の中に入れたのか、受入れたのか、それはどつちだか私も分りませんけども、古代建築はさういふやうな微妙なところで考へてある訳ですね。

それぢやあ西岡から教はつた一つづつの口伝を話します。先づ伽藍を作るのには、どこに建てるかといふことが一番先ですわな。一つには「伽藍の造営には四神相應の地を選べ」といふのがあるんです。これは四神、守り神、四方の守り神があることなんです。その守り神といふのは、東に青竜、西に白虎、南に朱雀、北に玄武といふ守り神のある土地。その土地の形態は東に清流があること。南は自分の立つてゐる所よりずうつと低くなつてゐること。西に大きな道があること。北に小高い山を背負つてゐる土地が、「四神相應の土地」と言ふんですね。ですから、それを取つてあるのが相撲の櫓のとこに青房、赤房とか言ひますな。青房は東の房です。赤房は朱雀だから南です。西に白虎の白、玄武の黒が北です。それを象かたどつてあれは下がつてゐるらしいですけどね。その土地を見つけた時に、法隆寺なんかはその土地になつてゐますな。西に富雄川が流れて、法隆寺寄りの正面には大和川が流れてゐ

て、西の大路があつたつて、ちよつとそれが今はどれだか分らないんですけど、北に矢田山系を背負つてゐる、とてもいい土地に法隆寺は立つてゐると思ひます。

口伝の二つ目は、「堂塔建立の用材は、木を買はず山を買へ」といふのがあつてゐるんです。檜といふ木はちよつと不思議な木で、伐採してから二〇〇年位は強くなるんですね。それからずうつと弱くなつていくんですよ。ですから法隆寺は殆ど全部檜で作られてゐます。法隆寺の昭和大修理をした時に、取り替へ材は三五パーセント位、あとの六五パーセントは飛鳥時代の木をそのまま使用してゐるんですね。それが檜でなくて櫟や松で作つたら、法隆寺は五〇〇年しかもちません。杉であれば八〇〇年位ですね。檜だから一三〇〇年以上もまだ塔を支へてゐるのです。

次に、「木は生育の方位のままに使へ」といふのがあります。法隆寺の柱には芯がないんですね。芯がないといふのは、大きな原木を四つ割りにして、それをかう丸くして使つたんですから、今の原木としたら、ものすごく大きな木があつたんでせうな。「方位のままに使へ」といふのは、例へば、原木があつてバーンと割つてみて、南の木は南に使ふ、そのままを使ふんです。北の木はそのまま北のはうの建物に使ふ訳ですね。さうすると南のはうは必ず木は枝が張ります。ですから、節だらけの木が正面にくるといふことになりますね。でもそれ

が一番強いことです。古代建築は正面のほうに、南に向いた木をもつてきた訳です。

次に、「木組は寸法で組まず、木の癖で組め」といふのがあるんです。塔の中に心柱といふものがドーンとあります。それは下からかう建てる一本、三本位継ぐんですけれども、縦方向に使ひます。しかし、その心柱を被ふ回りのものは、木を横にしてそれを積み上げて塔の形にします。柱だけが縦で、あとは皆横の木を積み上げてゐます。さうすると、その屋根の瓦を乗せ、壁土を乗せていくことに対して、だんだん木の収縮とか乾燥、圧縮とかで、ドンドン背が低くなります。その心柱のほうもそれに伴つて低くなればいいんですけれども、ならないですから、それは心柱を初めに切り縮めておくんです。二〇〇年位経つたならば大体ピタツと落ち着くやうに、これを計算して切り縮めておく訳です。そんな位の建物ですから、例へば建てた時はグラグラなんですね。瓦を乗せるのにもこちらに瓦一枚乗せたあと、そつちへ一枚乗せ、そのやうにしてやつていかないと、ドーンとひっくり返つてしまふ訳ですね。もう一つは、木の癖でもこの木は左に曲がる癖、右に曲がる癖、そしてこつちにも右に曲がる癖を使つてしまふと、建物はぐうつと捻つてしまひますね。ですからこつちは右、こつちは左に曲がる癖、その木を抱き合はせてやるやうにしないと、塔ができ上がつてしばらくすると捻つたやうな状態になつてしまふ訳です。それで「寸法で組まずに、木の癖で組め」と



言ふんです。

そして、棟梁になるには「工人の心組みは匠長が工人への思ひやり」つていふのがあるんですね。次に、「百工あれば百念あり、これをひとつに統ぶる。これ匠長の器量なり」といふのがある。最後に「百論を一つに止めるの器量なき者は謹み惧れて匠長の座を去れ」、さういふやうに棟梁から教はつてきた訳です。

たまに私は薬師寺の塔や法隆寺の塔に上がる時があるんですけど、塔の中は木の塊ですね。木が沢山あつて、木と格闘した跡がありありと分ります。その頃には道具がないですから、木の木口なんか皆切つてあるんぢやなくて、叩き割つてあるんですね。斧か何かで叩き切つてあるんです。それで材料は皆不揃ひです。その不揃ひの木をうまく組みあはせて、あれだけの立派な形を整へてるんですから、古代の工人といふのは、よつほど腕が良かったんでせう。

私はその塔の中に入ると、一番先に工人の汗を感じます。ですから、これから私は、時間を越えた安心感のある建物作りをしていきたいと思つてをります。どうもありがたうございました。

## 質疑応答

《問》 私たち大学生ですと、知識を勉強してゐるといふことになりましたが、先生のおつしやつたことを大学の場でどのやうに活かしていつたらいのか教へて下さい。

《答》 今年は工舎に五人ほど入りました。今までは中学生とか高校生が多かつたんですけども、大学生も三人入つてきました。しかしこの大学生はかはいさうなことに、付いていけないんですね。中学校から来た子は、フウフウ言いながらも付いてこられるんですね。それつていふのは、丁度自分が成長する時にその仕事をやつてゐると、職人の体になつていくんです。大学を出てきてかうすると、もう成長がある程度止まつてきますから、さうするとものすごく辛いらしいです。能力とか何かちやなくて、辛いのは体なんです。ですから自分はやりたいんですけども、付いていけないといふ不安が往々にしてあります。それともう一つ。勉強とか何かを沢山したらいいんですよ。しかし、それをもつて教はりに行くといふことはやめたらいいと思ひますね。いいですか、それをもつて行くんでしたならば教はりに行く

くことはないんですから。その知識を自分もつて教はりに行くといふことは、失礼に当たるでせう。ですから勉強することは確かにいいです。しかし、教はりに行くんでしたら、無垢で素直になつて行くことが一番大切だと思ひます。そしてもつともつと教はつたらいいことです。しかし、ちよつと言つてみたくなつたりする。これがいけないといふことです。それが、ない人だつたらゼロに戻すまでしなくていいんですよ。何となく分かりますか。ですから一生懸命に勉強して下さい。

それでは、先ほど話をした槍鉋をちよつと削つてみます。これは室町時代までは、これが最高の仕上げだつたんです。しかし、台鉋といふのが出来たんで、この鉋は能率が悪いから使はれなくなつた訳です。しかしこれをなぜ使はなくなちやなんないかと言ふと、法隆寺の修理をしたり、薬師寺の再建をする時には、室町以前の建物は削り肌も文化ですから、削り肌を同じにしなくちやと。それで今までも残つて、今、法隆寺関係の人だけは使へるやうに残つてゐるんです。かういふふうにして削りますから、笹の葉のやうに波打つたやうに仕上がりますね。夕日がかう横から入つた時なんかは、フワーとした感じに見えますが、古代建築のゆつたりとした感じが見えるのがさうなんです。コンクリートでパツと固めたやうな

建物ぢやなくて、フワーとした感じがこの削り肌で出る訳です。

講話

若き友らへ語りかける言葉

—— 観察の目より語り合ふ仲へ ——

(社) 国民文化研究会常務理事兼事務局長

長内俊平



はじめに

深く耕す（田返へす）といふこと

有機肥料（堆肥）つみごえを澤山施すこと

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

觀察と語り合ひ

「勝鬢しょうまんは是れ我が女むすめ」とは讚重さんちゆうの辭ことばなり

國民同胞感といふ道は易くして難き道である

「心豊かな國にもう一度なつてほしい」

はじめに

オウムによる戦慄すべき事件も警察の方々の必死の努力のお蔭で解決の方向が見えてきて、全国民お互ひにホッとさせられてをります。

しかし、これで一件落着きといつて喜んでゐる訳には参らぬのであります。と申しますのは、斯う言ふ事件を生み出した我々国民といふ土壤をこのままにして置いたのでは、決して健全な稲は育たないからであります。

今日は、私の貧しい體驗をかへりみながら健全な稲を育てるために、他人ひとに求めるのでなく、私がしなければいけないこと、自分で出来ることは何かについて皆さんと共に考へてみたいと思ひます。

私は貴君達とあまり年齢の違はない年頃（二十三歳）に百姓を始めました。

先の戦争に敗れ、生きてゆく力を失つてしまつてゐたときに、再び生きる力を與へて下さつたのは、

産うみなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける（「地」明治卅七年）

といふ、明治天皇の御製でございました。

自分は今まで、書の上での學問、即ち知識を得るといふことしかして来なかつた。母なる大地と語り合ふことがなかつた。よし!!一切を投げうつて百姓をしよう。然うしたらきつと何か得られるに違ひない、といふことだつたのです。

私は、道路に落ちてゐる馬糞ばふん拾ひから百姓の仕事を始めました。肥料にする為です。

さうした百姓の経験から稔り豊かな稲を育てるには、いくつかの大事があることを教へられました。

### 深く耕す（田返へす）といふこと

その一つは「深く耕す」といふことであります。皆さんもご承知の様に、「耕すたがへ」といふ言葉は、「田返す」といふことから来てをります。言葉通り、田の土を裏返して太陽に当てることを言ふのです。

私の故郷の津軽では辛夷こがしを田打桜と呼びます。あの白い美しい花が岡辺に咲き始めますと、「さあ田打ちだぞ!!」と互に呼びかけ、田んぼに出て、一鍬一鍬田を返してゆきました。そ





れは大変な労働であります。一人で一日に、一人役やく（約一反歩）の田を返さなくてはなりません。

その時表土と共に、その底土そこつちをいくらかづつでも深く掘り返して土のいのちを再生し、沃土よくとの量を増やしてゆく、それを深耕といふのです。

深く耕すと、稲の根が土深く延びて丈夫に育ち、少しばかりの風に倒れず、また土の生命いのちを豊かに吸収することが出来て、稔り豊かな稲が育つのです。

それは、學問で言ふと、例へば、「須佐之男命様とはどんなお方ですか」と問はれた時「日本の神話に出てくる神様で、天照大神様の弟神おとうとでいらつしやり、大変亂暴な神様で、お父上、伊邪那岐大御神の言ひつけを守らず、高天原を追放され、出雲の国に至つて、八俣大蛇やまたのをろちを退治なさつた、国つ神の祖神に当られる神様です」と答へるのは私に言はせると、丁度田の表

面の沃土を機械で掻き雜ぜてすましてゐる様なものであります。

一見何か知つてゐる様にきこえますが、それは須佐之男命様に関する單なる知識にしかすぎません。

それに比べ、一体須佐之男命様はどんな神様だつたのだらうかと、『古事記』を繙き、声朗々と読んでゆくうちに

故、各々、依し給へる御言の隨に、知ろしめす中に、速須佐之男命、所命し給へる國を知らさずて八拳鬚胸前に至るまで哭泣ちき。その泣き給ふ状は、青山を枯山如す泣き枯らし、河海は、悉に泣き乾しき。是を以て、悪神の音なひ狭蠅如す皆満ち、萬物の妖ひ、悉に発りき。

故、伊邪那岐の大御神、速須佐之男命に詔り給はく「何とかも、汝は事依せる國を知らさずて哭泣ちる」と詔り給へば、答し給はく「僕は、妣の国、根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭く」と申し給ひき。爾、伊邪那岐大御神、大く忿怒して、「然らば、汝、此の國には勿住みそ」と詔り給ひて、乃ち、神逐ひに逐ひ給ひき。

と読み進んでゆくうちに、おなくなりになつたお母上のあとを追つて子供の様に哭かれる須佐之男命様が好きになつて、ああ自分もこんな素直な神様の様に生きたいなあ、といふ生

きる勇氣が恵まれてくる。

斯ういふ勉強をすることを、私は「深く耕す」ことと思つてをります。

私が母をなくしましたのは、五十五歳のときでした。母は八十歳でした。

その時、私は涙が涸れるまで慟哭しました。そして、須佐之男命様の慟哭の幾分かを身をもつて知り、いよいよ須佐之男命様が好きになりました。

私達国民はいま、知識といふ表土だけを掻き雑ぜて、父祖伝来の尊い土を瘦せさせ、その活力を失はせつつあることに、本当に気付かなくてはならないと思ふのです。私達は、一人一人一鍬一鍬土を田返す苦勞をしなくてはなりません。

深く田返すといふことは、知識といふ衣を脱ぎ捨て、生れながらのをさな心……まごころに、太陽の光、即ち我が民族の草創時代の若々しく素直で雄々しい生命の光を当て、そのもとの生命を我が心にとりかへすことであると言ひうると思ふのです。

それは困難な道ではあつても、至難な道ではありません。何故ならば私達には、父祖の血が脉々と流れてゐるからです。日本武尊様の様に、弟橘媛様の様に生きたいなあ、と切に懐ふとき、必ず音たてて祖先の瑞々しい生命が血潮のなかに甦つてくることを信じて疑ひません。

有機肥料（堆肥）を澤山施すこと

次には堆肥などの有機肥料を澤山施すことであります。有機とは、生命を有するといふこととであります。堆肥を施すと土は柔かになり、ほどよい栄養がゆきわたり、ふくよかな稲が生育いたします。

皆さんは、科学が進めば、自然の秘密が解き明かされ堆肥などといふ手間隙かかるものは必要なくなると思つていらつしやるかも知れませんが、さうではありません。

本居宣長さまは「そもそも天地のことわりはしも、すべて神の御所為にして、いともいとも妙に奇しく靈しき物にしあれば、さらに人のかぎりある智もては、測りがたきわざなるを、いかでよくきはめつくして知ることのあらむ」（『玉勝間』二三）と言つてをられます。

また岩槻邦男さん（生物学者）は「現在までに生物學は、地球上に百五十萬種ほどの生物を認知してゐる。しかし実際には、数千萬種の生物が現存してゐると推定されてゐる」（産経新聞・平成七年五月二日所載「植物は語る」より）と言つてをられます。

私達が知つてゐることは、自然のいとなみの九牛の一毛に過ぎぬことを、しつかりと気付

いてゐなくてはなりません。

太陽にどんな力があるのか、堆肥にどんな靈妙な働きがあるのか、私達人間の智では、到底知り得ないのです。

それを人間の傲慢と言ひませうか、植物の育成に必要な養分は、窒素・燐酸・加里であるとして、これを化学的に合成して、施しさへすれば立派に稲は育成すると信じ、お袋の味とも言ふべき堆肥を中心とする有機肥料の造成・施肥を疎うとんずることは丁度、インスタント食品や出来上つてしまつた様な料理ばかり子に与へ、眞心こめてつくる「お袋の味」や、「燈火ともしび近く衣縫きぬぬいふ母」のぬくもりのある着物やセーターなどを与へることを怠ることと同じであります。

食べ物や着物は、單に身体を養ひ、寒さや暑さから身を守るだけではないのです。お母さんが心をこめてつくつて下さる食事や衣類には母の慈いづくしみといふ人の眞心を養ふ最も大事な養分も併せもつてゐるのです。

どうか女子の學生さんはお母さんになつたら是非實行して下さい。しかしいまでも出来ることがあります。それは勉強の合間に、おぢいちゃん、おばあちゃん、御両親そして弟妹のために、手袋一つでも編んでお正月のお土産に持つて帰ることであります。男子の學生さん

は、ハガキ一枚でい、ですから時折便りを書いて送つて下さい。「人ごみのなかに祖母に似し人ありて思はずおばあちやんと呼びかけにけり」などと即席の歌一首でも添へて送られたら、おばあちやんはどんな宝物を頂いた以上によるこび、生きる力を恵まれるか知りません。

### ヒデリノトキハナミダヲナガシ

次に、丈夫で稔り豊かな稲を育てるのに欠かせない大事は、稲と語り合ふ仲になること、即ち稲をわが子の如く可愛がることであります。

宮澤賢治は、『雨ニモ負ケズ』といふ詩のなかで「ヒデリノトキハナミダヲナガシ、サムサノナツハオロオロアルキ」とうたつてをりますが、宮澤賢治は稲が可愛くてならないのです。ですから寒い夏には、ただオロオロするしかないのです。稲と一緒に泣いてゐるのです。

昭和天皇様は、

嵐ふきてみのらぬ稲穂あはれにて秋の田見ればうれひ深しも（「水害」昭和廿八年）  
と詠まれ、

明治天皇様は、

山田もるしづを思へばかばかりの秋の夜寒をなにかいとほむ（「秋田家」明治廿九年）

と詠んでいらつしやいますが、天子様もお百姓さんや稲と物語りをしていらつしやる、即ちお百姓さんも稲もわが事のように思はれる、自他を分たぬ大み心が私達に深い感動を与へるのです。

私の義兄、加藤信克（昭和二十年六月十三日・ルソン島で戦死・享年二十七歳）は、東北帝大医学部の学生の折（二十五歳）次の様な詩をつくつてをります。

雨をたまへよ 篠しのつく雨を やんさのえ 稲が枯れるよ龍神さん 水汲み掛けるを  
いとひはせねど せめて七分も穫れるまで（註・七分とは七分作のこと）

といふ詩であります。義兄の實家は百姓家ではありません。父は官吏で母は文房具店を営んでをりました。それでも当時の學生・青年は、夏の寒さにつけ、日照りにつけ、稲作に思ひを馳せたのです。

国民同胞感といふのは、同胞の痛み、苦しみ、悲しみが我が事のように感ぜられてならないと言ふことでせう。

しかしそれは決して大袈裟なことではなく、雨につけ、日照りにつけ、百姓さんや稲の上  
に心が馳せられる、そんな極く当り前の心の働きのなかに実現されるものだと思ふのです。

## 観察と語り合ひ

只今私は語り合ふ仲と申し上げましたが、それと違ふのは観察といふ態度であります。観察といふのは、観てゐる自分は、必ずこちら側に居ります。

かれがれになりぬる庭の蟲のねはなかな夜よりもさびしかりけり

〔蟲聲欲枯〕明治四十四年

といふ明治天皇の御製がございますけれども、明治天皇様は、虫と物語りをなさつてをられるので、決してこちら側に居つて、虫を観察なさつてをられるのではないのです。

この世に眞にある世界は、観察し合ふ仲ではなく、花をみては惚れ惚れとして我を忘れ、鳥の鳴く音にわが心を移す、お母さんが具合が悪くなると自分が具合が悪くなつた様な気持ちになる、まして皆さんが病気になるればあなたの方のお母様は我が身に替へても思はれるでせう。さう言ふ相手と一体となつて共に喜び、共に嘆く、さういふ世界でありませう。

かつて私が、諸君と同じ年齢の頃（私は十九歳で仙台高等工業の二年生でした）仙台から少し南に行つた「野蒜のびる」といふ海水浴場で泳いでをりました。



陽も傾き始めましたので、帰る支度をして、しばらく浜辺で海を眺めてをりました。

その時です。後の方で若い女性の方が、砂浜を気狂ひの様に走りながら「救けて下さい!!」と呼び廻つてをります。

本人はちゃんと元気で走つてゐるのですから「救けて!!」といふ意味がすぐには分りませんでした。よくみると、その方は沖の方を指さして「お兄ちゃんを溺れてゐる、誰か救けて下さい!!」と叫んでゐるのです。

私は、指さす方をみますと渚から五十メートル程の沖合ひで、手をあげながら腕もがいてゐる人の姿をみつけました。

私はすぐ服を脱いで海に飛び込みました。

私は泳ぎながら締めてゐたふんどし 褌ふんどし を外し（褌は鯨尺で巾九寸——約三十五センチ——長さが六尺

——約二メートル二十五センチ——あります）それを五、六センチ位の巾に割きいて繋つなぎ合せ、十メートル位の紐にしなからその人に近づいてゆきました。

「しつかりしなさい!!」今この紐であなたを結ゆはへ、私は懸命に陸をかに向つて泳ぎますから、ガンバツて下さい」と言つて勵むめました。丁度そのとき、いま一人の人が抜手ぬきてを切つてやつて来てくれました。私はその人に「貴方は、この方の頭を支へて水を飲ませない様に、ただ

そのことをして下さい。私は懸命に浜に向つて泳ぎますから」と言つて泳ぎますが、いくら懸命に泳いでも陸はなかなか近づいて来ません。

その時は丁度引き汐だったので。私は陸に向つて懸命に「誰か綱を持つて来て下さい」と叫びました。運よく浜に磯舟が一艘あげてあり、そのなかから一人の人が綱を持つて泳いで来てくれました。私は、その綱と禰でつくつた紐を結び「引つ張れ」と叫びました。

浜にたどり着いた時は、その方は殆ど意識はありませんでした。急いでその方を、両手で抱きかかへて浜に運びました。すぐたくさんの人が集まり、水を吐かせたり、人工呼吸をしてくれて居りましたが、やがて病院に運んで行つた様でした。

私は、疲れた身体を休め、やがて日ぐれになりましたので帰らうかと思ひましたが、果してその人が救かつたかどうか心配でしたので、病院に寄りましたところ、「無事救かりました」と聞き安心して仙台に帰りました。

私にも、諸君と同じく、人の苦しみをみて、わが身の苦しみの如く直ちに反応する純情な時代があつたのです。

ところが、七十歳にもなつて大きな失敗を致しました。それは三年程前のことですが、その日は、友人が營んでゐる銀座の居酒屋で飲んでをりまして、興に乗つてをるうちに、家

へ帰る地下鉄の終電に近い時間になったことに気付き急いで有楽町駅に行きました。

すると地下鉄の階段に、青年——服装から學生さんだと私は思ひました——が酒に酔つて寝てをります。私は、つかつかと寄つて行つて「どうした？ もう終電の時間だぞ、御両親が心配してゐるだらう。さあ帰らう。家はどこだ」と聞くと、「横浜だ」と言ひます。「それではJR線ぢやないか、ここは地下鉄だぞ、僕がそのホームまで送つてやるから立ちなさい」と言つて、その青年に肩を貸して、JRの駅まで行きました。

私も自分が帰る地下鉄の終電が気になりますので、その青年を横浜行きの電車の来るホームへ出る階段の中頃まで送つて行つて「ここを登れば君の乗る電車が来る、ここまで来たら一人で行けるだらう」と言ひましたところ、その青年は、「ここまで来て敵にうしろをみせるとは何事ぞ、断乎として、自分を電車に乗せて無事に乗つたことを確認してから帰れ、それが出来ないなら、もと俺が寝てゐた地下鉄の階段へ、もとの通り寝せて帰れ」と言ふのです。私も腹が立つたので「そんなに言ふなら仕方がない、もとのところへ帰してやる」と言つて、その青年をもとの階段のところまで連れて行つて寝せようと思ひました。

ところがその青年は「ここはもとの階段ではない、俺が寝てゐたのは、もう一段下だ」と言ふのです。私もいよいよ腹が立つて「それなら勝手にしろ」と言つた途端、いきなり私の

顔を殴りつけました。

その青年は拳闘を習つてゐたのでせう。私の右の目の上を思ひ切り殴りました。その勢で、私は十メートル位離れた向うの壁まで吹つ飛ばされてそこに蹲うづくまりました。騒ぎを聞きつけて駅員が二人駆けつけ、その青年を両方から押さへて交番へ連れて行きました。あとから私にも交番まで来て欲しいと駅員が迎へに来ました。

交番へ行きますと「貴方は、この青年を訴へますか」と言はれるので「私は訴へません。どうかこの青年を無事ご両親のもとへ届けてやつて下さい」と言つて帰りました。

「勝鬢しょうまんは是れ我が女むすめ」とは讚重さんちゆうの辭ことばなり

私は、皆さんに謝らなければなりません。折角、諸君の年代には持つてゐた純心、人の溺れんとするをみるや我を忘れて海に飛び込んだその純心に歳と共に塵がつもり、七十歳にもなつて、一見青年の身の上を案ずる如き態度をとりながら、終電車に乗り遅れまいといふ自分を思ふ心を拭ひ切れなかつたのです。

日本が悪くなつたではありません。私が悪くなつてしまつたのです。

私は、それから三ヶ月近く眼の上の腫はれが引かず、物が翳かすんで見えませんでした。

そのことがあつてから家内は「もう齢ですから、そんなことはしないで下さい」と申します。私も妻の言葉に絆はだきれさうになります。一方、私がお慕ひ申し上げてゐる、聖徳太子様のお言葉が私に呼びかけて参ります。その御言葉と申しますのは、昔印度の舍衛国の王様（波斯匿王）と奥様（未利夫人）が、自分の女である勝鬘様（阿踰闍国の友稱の夫人）にお釈迦様の教（大乘の心）を勤めるため書（手紙）を遣はさうとしてお二人で語り合つてゐる折の言葉（勝鬘經）に、「勝鬘夫人は、是れ我が女むすめなり。聰慧利根、通敏にして悟り易し、若し佛を見たてまつらば、必ず速すみやかに法を解げして、心疑うたがひ無きを得む。宜よろしく時に信たよりを遣はしてその道意どういを發おこすべし、と」あるその經文の初めの方を釋された次のみ言葉であります。

是れ我が女とは鑽重の辭なり。言ふところは、子を相あひまること父母に過ぐるはなく、臣を知ること君王に如しくはなし。我が子の稱は自他を別たす唯善にあり、今勝鬘は既に己が子たり、且つ明德ありて應まさに勝道を聞くべきが故に、亦おのづから我が子と稱するなり（勝鬘經義疏——「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」一〇六頁——）

と言ふみ言葉であります。私はこのみ言葉を次の様にうけとらせて頂いてをります。

私達は、得てして自分の子供を、己が子と思ひ勝ちです。即ち自分の思ふままに出来る自分の所有物と思ひ勝ちです。しかし、太子様は、「さうではないのですよ。子供は授かりものなのです。どんな深い因縁があつて私達の子として生れて来たか知れないのです」と仰つてをられるやうな気がいたすのであります。

私達は、よく「我が国」「我が村」「我が母校」と言ひます。「我が母校」といふ言葉を聞くだけで、共に學んだ校舎まなびや、朝夕睦み合つた級友や先生方の懐かしい顔、そしてそれにまつはる数々の思ひ出がどつと甦よみがへつて来て胸が熱くなるのを覺えます。

あの「我が」と言ふ言葉には「我々皆の」といふ思がこめられてゐると思ふのです。ですから、自分の子も自分達だけの子ではないと同時に、余所様よそさまの子供も皆我々の子なんだ、平ひとしく將來の日本を背負ふ後継者あとつぎとして慈いづくしみ育はぐまなければならぬのだ、といふ思ひがこもつたお言葉と拝するのであります。

### 國民同胞感といふ道は易くして難き道である

ですから、家内が「もういい齡ですから、そんなことは止めて下さい」と申しましても、

私は、諸君の様な身体の重い若者に肩は貸してやれないまでも、せめて隣近所の子供達には、朝は「お早う!!行つてらつしやい」夕には「おお、お帰り!!」泣いてゐる子が居れば「どうした?」と声をかける位はしてゆきたいと思つてゐるのです。しかし、

明治天皇様は

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして〔行〕明治四十年  
ともお詠みになつていらつしやいます。

お父さん、お母さんに「お早うございます、お休みなさい」と朝夕の挨拶を欠かさず、紙屑は捨てず、見たら拾ふ、といふ様なことは、いとも容易なことの様であつて欠かさず実行することはなかなか出来ないことであります。

「心豊かな國にもう一度なつてほしい」

本年五月廿九日「アジア共生の祭典」が日本武道館で開かれました。私は何一つお手伝ひは出来ませんでした。お招きをうけて出席しました。

その席上で、来賓として挨拶されたマレーシアのマラヤ大学副學長をしてをられる、サイ

ド・フセイン・アラタス閣下の次の言葉が心に深く刻まれました。

「私が十四歳の頃、ジャワにやつて来た日本軍のなかに年若い兵隊さんが居つて、実に親切にしてくれました。そして明日ありとも知れぬ身でありながら、私達少年達と心の通ひ合ひを求めて、懸命に日本語と日本文化を伝へ様とされました。私は、いまでもその兵隊さんの顔を覚えてをります。」と語られ、最後に「どうかバイクや自動車を紹介するのではなく、日本の美しい文化を伝へてくれる様な、心豊かな國にもう一度なつて欲しい」と訴へられた言葉であります。

おぢいちゃん、おばあちゃん達のしたことを、僅かばかりの知識をもとに「あれは侵略戦争だつた」と言ふことは、誰にでも簡単に出来ます。

しかし明日とも知れぬ身でありながら、他国の少年達に、日本語を教へ、何とか日本の文化を伝へ様とする様な——そして五十年経つても、その方の顔は忘れられないと思はれる様な——青年になることは、しかく簡単でありませうか。

本日は至らぬ体験に基づいてお話を申し上げて参りましたが、どうか心に残る一言でもありましたらそれを実行して下さい。

明治天皇御製に



ほどほどにこころをつくす国民くになみのちからぞやがてわが力なる（「民」明治廿七年）  
とございます。

世の中の悪いことを決して人の所為ひとせみにせず自分の立場立場に於て、自分の出来ることを、年月長く倦うますずおこたらず、こつこつ勤めてゆくととき、いつの日か心豊かな國へ回帰してゆくことを信じて疑ひません。ご静聴有難うございました。



短歌入門

短歌創作導入講義

戸田建設(株)開発計画部勤務

青山直幸



- 一、はじめに
- 二、短歌創作の心構へ
- 三、短歌創作の作法
- 四、短歌創作の意義

一、はじめに

(1)本合宿ではなぜ「短歌創作」「短歌相互批評」に取り組むのか。

いよいよ、これから皆さんが心待ちにしてゐたレクリエーション・短歌創作の時間が始まります。中には、不安に思つてゐる方もゐらつしやるでせう。私の話を眠らずに聞いてゐれば、必ず短歌が作れるやうになりますので安心して下さい。

さて、現代の学校教育の中では、知識が優先され、情緒面での教育は疎かおろそになつてゐます。特に戦後は、伝統的な情意の世界を否定することが、進歩的、科学的であるとの誤つた教育思想のもとに、知識偏重、理論重視の教育が行はれてきました。

その結果、青少年の心の荒廃、情意の涸渇が進み、いじめや登校拒否等の問題が後を絶たないのです。今回のオウム真理教事件も、真因を辿れば知識偏重教育の中で心を鍛へることを教へられなかつた青少年の心の中に生じた「精神的空洞」に目をつけた被害妄想的なカルトの教義に行きつくのではないかと思ひます。情意の涸渇が、教祖への盲目的屈従を生み、教義の爲には、「無差別殺人」さへも正当化されてしまふ非情の世界を生み出してしまつた

のです。

私共は青少年の心に本来息づいてゐる健全な情意の力を少しでも回復させることができた  
らと願つてゐます。短歌を創作することにより、みづみづしい情感を涵養し、心情の洗練陶  
冶を行ふこと、又、互ひに歌を交はし味ふことにより、広やかな共鳴共感の世界を感得する  
こと、これが「短歌創作」「短歌相互批評」に取り組む理由です。

ところで短歌は誰にでも作れるものですが、自分の思ひを五七五七七に表現するには、そ  
れなりに苦心するものです。中には七転八倒の苦しみを味ふ方もゐるでせう。昨年の合宿教  
室に参加した学生が、次のやうな歌を詠んでゐます。

提出の時間をかなり過ぎたれど今だによめぬことの苦しき  
熊本学園大商三 喜多村 純

苦心の末に、自分の思ひが、短歌に表現できた時の喜びは、何にも代へ難いものです。

## (2) 私と短歌の出会い



私が初めて短歌に出会い、その素晴らしさを実感したのは、高校二年の古典の授業で万葉集を習ひ、次の二首の短歌を読んだ時でした。その時の鮮烈な感動は忘れられません。

よろこび  
の歌

志 貴 皇子

いほげし なるみ  
石走る垂水の上のさ 蕨の萌え出づる春になり  
けるかも (万葉集卷八・一四一八)

滝の上の蕨が芽ぶく様を見て春の訪れを心から喜んでゐる作者の気持が、そのまま伝はつてきます。何とさはやかな生命力あふれる歌ではありませんか。

あしひききの山川の瀬の響るなべに弓月が嶺に雲立

柿本人麻呂

瀬音が響く中に、山に向つて忽然と沸き上る雲の様を歌ひ上げてゐます。実に雄大なダイナミックな歌だと思ひます。

自分にもこのやうな素晴らしい歌が詠めたら、いいなあと思ひ、以来折にふれて短歌を作るやうになつたのです。

(3) 阪神大震災被災者の歌

人生には予期せぬ出来事が起きるものです。その折の喜びや悲しみ、苦しみを私達日本人の祖先は、率直に短歌に表現してきました。

今年の一月十七日関西方面に突然マグニチュード7.2、震度7といふ未曾有の烈しい地震が襲ひました。私も現地に二度程行きましたが、その被害の凄まじさは想像を絶するものがありました。約六千三百人の方が亡くなり、今なほ約一万八千人の方々が避難所生活を送つてゐることです。次の歌は、阪神大震災の被災者達が、その恐怖体験を赤裸々に短歌に詠んだものです。



ぐらぐらっと突上げ揺する振動にこけつまろびつガス栓を止めぬ  
宝塚市 藤原益蔵

不気味なる地鳴りと共に倒れ来しタンスの下でふるへ止まらず  
西宮市 三井芳子

「ばあちゃん！」と崩れし家に絶叫する声は終日耳を離れず  
神戸市 橘 美智子

温かき手を握りしが救ひ得ず焼かれし夫を偲び絶句す  
神戸市 服部 淳子

小雪舞ふ大焼野原に骨片をねんごろに拭き手のひらに置く  
大阪市 宮 井 あき子

この下に母がみますと泣きながら瓦礫の上で指さす少女  
神戸市 橘 紅<sup>く</sup>仁<sup>に</sup>子

暗がりに救ひの双手さしのべし嫁は神とも仏とも見ゆ

大阪府 伏井 猛 朗

粉雪舞ふ校庭にはに五人の遺影掲げ黙禱ささぐ地震なみをさまりて

寝屋川市 三木良子

抱き合ひて再会喜ぶ被災者にみぞれ混りの雪降りしきる

大阪府 平山澄恵

隊員と被災者たちが抱き合ひて別れゆく日はきさらぎの雪

岐阜県 大前久八郎

罹災者を励ましたまふ皇后はおのづからなるこぶしを振りて

保谷市 浅井絃子

皇后の「ファイト」の仕草国民の想ひの全てを告げてくれたり

〔「阪神大震災を詠む」朝日新聞歌壇俳壇編 朝日新聞社発行より〕

これらの歌の作者は、専門歌人ではない、皆さんと同じ一般の国民です。突然の大地震といふ悲痛な体験の中で感じた驚き、恐怖感、家族や友人を失つた悲しみ、苦しみをありのままに表現してゐます。恐怖と悲しみの極限状態にありながら、家族や友人や師弟に思ひを寄せる人々の心が、ひしひしと伝はつてきます。短歌は、まさに国民の人生の叫び、心の歌と

して生き続けてゐるのです。

## 二、短歌創作の心構へ

(1) 体験に根ざした切実な感動を素直に、ありのままに詠むこと。理屈や観念を詠むことは避けること。

日本の皇室には、歌の道が伝承されてをり、歴代天皇方は多くの短歌を詠まれましたが、中でも明治天皇はなんと九万三千余首の短歌を詠まれました。その中に短歌を詠む際の心構へについて詠まれた御歌があります。

### 歌（明治四十年）

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

をりにふれたる（明治四十五年）

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

心に感ずるままを率直に言葉に表現していけばそのまま歌になるといふ歌の基本を御自分の作歌体験に基いた実感としてお示しになつてゐるのです。

次に、良寛の歌をご紹介します。良寛と言へば、子供達と一日中手まりをついて遊んでゐたお坊さんといふイメージが強いのですが、実際は、備中五島の円通寺の大忍国仙和尚について約十年間厳しい修行をし、その後諸国行脚の旅を続けた求道僧なのです。古今の学問や、書・短歌にも通じた人でしたが、越後に帰住してからは常に農民や子供達と親しく交はり、慈愛に満ちた生涯を送つた人でした。

風はきよし月はさやけしいざともにをどり明かさむ老おいのなごりに  
いざ歌へわれ立ち舞はむひさかたのこよひの月に寝いねらるべしや  
もろともに踊りあかしぬ秋の夜を身にいたつきのゐるも知らずて

これは、村の盆踊りの折の歌です。村人達と共に盆踊りを心ゆくまで楽しんでゐる良寛の浮き立つやうな喜びが、何のてらひもなく率直に表現されてゐます。この歌のやうに、心に

感ずるままを素直に言葉にしてゆくことが大切なのです。

(2) 詠まうとする対象に、心を集中すること。自分の感動を正確に表現すること。

正岡子規を尊信し、伊藤左千夫の門下となり、後に大正期アララギ派の巨匠と言はれた島木赤彦は、「自己」の歌をなすは、全心の集中から出ねばなりません。これは歌を作すの第一義でありまして、この一義を過つて出発したら終生歌らしい歌を得ることはできません（「歌道小見」より）と詠まうとする対象に心を集中することが短歌創作で最も大事なことだと言つてゐます。

今年の合宿教室の参加学生の歌に、

九州大文二 井野口 武志

高らかにひびめ鳴らして一頭の駒かけぬけり力強くも

といふ歌があります。一頭の馬が力強くかけてゆく様に目を凝らし、全心を集中してゐる作

者の気持が、そのまま伝はつてくる、実にさはやかな良い歌だと思ひます。

正岡子規の歌に「星」といふ連作があります。子規は、晩年の約十年間は、脊椎カリエスといふ難病にかかりながらも強靱な意志で生き抜き、俳句・短歌の改革といふ大事業を成し遂げた人です。

### 星

真砂まさごなす数なき星ほしの其そのの中に吾なかに向ひて光る星あり

たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光吾を照せり

玉水の雫しづく絶えたる檐のきの端はに星かがやきて長雨はれぬ

空はかる台うてなの上に登り立つ我をめぐりて星かがやけり

天地あまつちに月人男つぎひしやうじん照り透り星ほしの少女をじめのかくれて見えす

久方ひさかたの星の光の清き夜にそことも知らず鷺鳴ささぎきわたる

草づつみ病の床に寝がへればガラス戸の外に星一つ見ゆ

満天の星の中の一つの星に全神経を集中してゐる子規の研ぎ澄まされた心情が伝はつてき

ます。一人の人間の生命が、大宇宙の不可思議なる力と感応し合ふやうなスケールの大きな素晴しい歌だと思ひます。

### 三、短歌創作の作法

さて、短歌創作に当つては、次のやうな点を心得ておくことが必要です。

#### (1) 題材

題材は全く自由ですが、自分が直接体験し、感動したことを素直に具体的に詠むことが大切です。

#### (2) 一首一文

短歌は、五七五七七の定型詩ですが、一息で詠みあげるもので一文が原則です。途中で切れる歌は、「腰折れ」と言つて統一性がなく、勢ひのない歌になつてしまひます。

大海の磯もとどろによする波われてくだけでさけて散るかも

源 実朝

これは、鎌倉幕府の三代將軍実朝の歌です。大波が磯に打ち寄せ、碎けて飛沫となる様  
実にダイナミックに生き生きと詠まれてゐます。怒濤の動きを息をもつかせず、一氣に詠み  
込んでをり、一首一文の名歌と言へませう。

(3) 字あまり、字足らず

思ひがあふれ、どうしても五音、七音におさまらない場合、表現上不自然でなければ、  
「字あまり」でも良いのですが、「字足らず」は歌のしらべ、リズムが壊れてしまふので避  
けるべきです。昭和天皇の御製に、

引揚者に対して（昭和二十四年）

国民とともに心をいたためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

といふ御歌があります。先の戦争が終つて、戦地から引揚げてくる夫や息子を一日千秋の思  
ひで待つてゐる家族と同じ思ひで、帰還をひたすら待つてをられる天皇の切々たる御心が伝  
はつてくる御歌です。「帰りこぬ人を」が八字で「字あまり」ですが、思ひのこもつた御言



葉で不自然どころか歌全体に莊重な響きをもたらし、無限の哀切感が表現されてゐると思ひます。

(4) 用語

切実な体験や感動を表現する場合、日常語つまり口語体だとしても浅薄な感じになつてしまひます。文語体の方が味はひ深い表現ができと思ひます。ただできるだけ難解な表現は避け、自然で平易な表現を心がけることが大事です。

(5) 連作

複雑な思ひや、連続的な体験を一首の短歌に詠みこまうとすると抽象的、概括的なものが出来てしまひます。それを避ける為に、一つ一つの体験を具体的に何首にも分けて詠むと自然な表現ができます。前述の子規の「星」などは典型的な連作と言へませう。

#### 四、短歌創作の意義

それでは最後に短歌創作が皆さんの人生に於てどのやうな意味を持つのかまとめしてみませう。

- (1) 感性を磨き、心を鍛へることができる。
- (2) 心の交流をはかることができる。
- (3) 古人の心に触れ、歴史に連なる喜びを味ふことができる。
- (4) 生きていくことの充実感が実感できる。逆境にあつても、生きていく力が湧いてくる。



古代より短歌は個人的な趣味・芸術としてだけでなく、「歌ひ交はす」ことにより、人との心の交流のよすが、(手段)として生き続けてきたのです。明治の漂泊の歌人・若山牧水は、次のやうな素晴らしい友情の歌を残してゐます。

### 友を思ふ歌

いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふ  
何事のあるとなけれど逢はざればこころはかほく逢はざらめやも  
逢ひてただ微笑みかはしうなづかば足りむ逢なり逢はざらめやも  
寂しさに耐へて彼をりさびしさにたへてわれをり逢はざらめやも  
あやふかるいのちを持ちておのもおのも生きこらへたり逢はざらめやも

〔山桜の歌〕より

次に広瀬誠さんの短歌を紹介しませう。広瀬さんは国文研会員で富山県立図書館の館長をされた方ですが、昭和五十六年三月癌の宣告を受けられ、八月に手術、以後壮烈な闘病生活の末、無事退院、職場復帰されたのです。

舌の三分の一切除されたため、発声思ふに任せず毎日屋上にて発声訓練を

兼ねて萬葉集を朗読す、この日もまた

萬葉歌力のかざり誦みゆけどふし声はとぎれて続かず

発音しえぬ音韻いくつ舌の根に手術受けたるわが口あはれ

とぎれつつわれは誦みゆく声かざりわれは誦みゆく万葉の歌

記紀萬葉実朝麻須美潮とひびき萎えゆくわれを奮ひ起たしむ

〔坂の沼琴―癌病養中詠草―〕より

広瀬さんは、この歌集のあとがきの結びで、「歌を詠み歌を作ることにはわがいのちのあか

しである」と述べられてゐます。まさに歌を朗読し、創作することで、病魔に立ち向つていく勇氣と力を振ひ起こし、見事逆境を克服されたのでした。

○

それでは皆さん、合宿教室での体験や、感動をできるだけ素直に、ありのままに五七五七七の言葉に表現してみてください。きつと良い歌ができると思ひます。

短歌入門

創作短歌全体批評

福岡県立春日高等学校教諭

興 島 誠 央



はじめに  
批評と添削  
をはりに

## はじめに

合宿教室も終盤となりました。この時間は皆さんが昨日、提出された短歌の中から、いくつかを取り上げて「短歌の相互批評」とはどういふことなのかを全体で考へていきたいと思ひます。自分の歌が例として俎上に上がったらどうしよう、とさぞかしドキドキしてをられることでせうが、私も徹夜して先程まで準備してましたので、どうなる事やらとドキドキしてゐます。

お手元に配られてゐる歌稿には、参加者全員の歌が載つてをりますが、国文研会員の方々の努力で深夜二時に完成しました。一読して良い歌が多いなあと思ひました。表現には多分に推敲の余地がありますが、真心がこもつてゐます。不真面目な歌がありません。これが一番大切な事です。ですから私が添削する歌は駄目な歌では決してないのです。かう手直しした方がより良く気持ち伝はるだらうと助言してゐるに過ぎないのです。

まづ批評に入る前に『短歌のすすめ』の二七頁を開いて下さい。皆さんに是非紹介したい一節があります。この合宿に参加された熊本の中学校にお勤めの北島照明さんが生徒達に短

歌の指導をなさつた記録です。

「すなほに自分の思ひをことばにしてみよう。ありのままに、隠さずに、どんな思ひでもよいからことばにしてみよう」と呼びかけた最初の作品が、

おかあさん庭は寒いよおかあさん早く休んでね朝きついから

父と母わたしたちのために働くが病気をするとみんな心配

この先は北風がふき雪もふり寒くなるだろうどうしようかな  
うちの母わたしをいつもおこるけどほんとはどんな気持かな

であつたといふのです。北島さんは、「ことばは実に幼稚でただどしいし、そのうへ短歌形式もほとんど生かされてゐないが、子どもたちの純情な美しい心は、そのやうなこととかはりなく流露してゐるのだ。親子の情も、自然への思ひも、自己を見つめる心も十分に働いてゐるのではないか。知らないのはおとなの方だけかも知れないのだとつくづく思ひ知らされた」と感動を記してをられます。心をこめた指導が重ねられた三回目には、





母の手はともきたないよ子のために来る日も来る日も働いているよ

お父さんしわがふえたね私たちがわがままだから  
ごめんね

春の日や梅の花咲いてきれいだなやっばり春って  
気持ちいいなあ

といふ作品が出て来たのです。「歌をつくるのはことばが巧みで美しいばかりでなく、真実の思ひをことばにすることであることが、生徒等は分つてきてゐた。そして、そのやうな心とことばだけが人の心をうつことも、である」といふ感想も実に美しいと思ひます。何か心のふるさとかへる感じがしませんか。素敵なことですね。

## 批評と添削

ではいよいよ本題に入りませう。第一班、橋口英明君（中央大一年）の歌

寝ころがり煩悶しつつ辞書を繰り初めて出来し短歌嬉しき

初めて短歌を創る苦勞と出来た喜び、よく分ります。残念ながら彼はこの前にある二首が削られてゐます。でもこの歌が一番思ひがこめられてゐます。ただ、寝ころがるといふ楽な姿勢と煩悶するといふ苦しげな表現がアンバランスなのです。

辞書を繰り身悶へしつつ作りしも初めて出来し短歌は嬉し

としてみると如何でせう。次は第二班、澤部和道君（日本大四年）の歌

食堂に遅れ来たりて入りしがうれしきかな班員の待つ

良く見かけた風景です。班長さんを皆が待つてくれてゐる。仕事の多い班長さんの疲れも癒されることでせう。良い歌ですが字足らずですから「うれしかりけり」としてはどうですか。第三班、喜多村純君（熊本学園大四年）の歌。

新しき出会いに期待をふくらませ送迎バスを足速に降りぬ

青年らしくて良いですね。でも、ふくらむのは胸でせう。そこが不正確。かな遣ひや字余りを整へて

新しき出会いに期待を抱きつつ送迎バスを急ぎ降り来ぬ

とすると良いと思ひます。第四班、松原央君（慶応大一年）の歌

山道を語らひながら歩むれば汗の中にも学ぶことあり

気持ちは分る。でも、汗の中に学ぶといふ表現はどうだらう。ほんとは汗かく程体動かして、身をもつて知る所があつたといふことでせう。つめ込みすぎてきついですね。連作にしてみても如何ですか。

友どちと語り合ひつつ山道を歩みてゆけば汗のふき出づ

汗だくになりつつ体を動かして知らるることもありと思ひぬ

友どちといふ言葉は友達といふ意味で良く使ひます。どうでせうか。第五班、庄嶋健君（桜

美林大四年）の歌

夏のころ友をさがしに山に入りまくらを並べて語り合う夜

びつくりしました。庄嶋君の仲の良い友達が山で遭難して、救助に向ひ、見つかった。二

人で一安心して枕を並べて床に就きながら「大変だつたなあ。でも助かつて良かったなあ」と話してゐる様子を想像したのです。でも、なぜこんな思ひ出の歌をわざわざ創つたのだらう、としばらく考へてアツと気がつきました。夏のころといふのは、現在只今の事で、友をさがすといふのも友をこの合宿に求めて参加したといふことなんです。そんなに曲解されは心外だ、と庄嶋君は思ふでせうが、この表現では多くの人が私に似た様な受けとめ方をしてしまいますよ。それを防ぐために、詞書きを付けて次の様にしては如何でせう。

合宿二日目の夜

つながりを求め得たりし友どちと枕をならべて語り合ふなり

第六班、肥沼祐一君（垂細亜大一年）の歌

今までに学んだものとの隔たりにわれの内心微妙に動く

肥沼君、微妙でしたか。私はこの合宿に初めて参加した時は、大変とまどひを覚えました。

自分の国のこと、戦争に命を捧げていかれた方々の話は、大変に感銘深くもありましたが、今までの経験と全く違ふものでした。大変不安になりました。君はどうなんですか。微妙といふ表現ではまだ分りにくいのです。この部分は肥沼君自身によく見つけてもらはないと私が添削することは不可能です。それでも無理に推しはかると

今までに学びしことと隔たりを覚えてわれはとまどひにけり

といふ様な気持ちかな。参考にして下さい。ただ、皆初めて参加した時はとまどふと思ふよ。あまりに違ひすぎるものね。でも肥沼君、合宿後もしっかり勉強してくれよ。何が真実なのかとね。僕も勉強するよ。

第七班、林耕次君（拓殖大一年）の歌

講義聞きみんなはあつく語るけどぼくは夏バテ何も語れぬ

林君、本当かい。僕には夏バテといふのが単なる言ひ訳にすぎないと思へて仕方無いんだ。

あつくと夏バテをかけたのかも知れないが、そんな技巧に走つちや一番大事な君自身のころを見失つてしまふぞ。君はきつと皆が一生懸命話し合つてゐるのを見ながら、異次元の出来事の様子に思へて中に入つて行くのが恐いのぢやないのかい。違ふかも知れないが、もし僕の直観が当つてゐるなら、君は君のありのままの心を表現すべきだ。誤魔化しちや駄目だ。

講義聞き友みなあつく語れどもわれはいまだに語る氣湧き来ず

自分に正直であることを恐れちやいけない。僕も偉さうに言へる人間ではないけれど、この合宿で僕等が求めてゐるのは、ほんとの自分に出会ふことだと思ふ。僕の考へすぎなら濟まない。次に、第八班、葉丸賢吾君（拓殖大三年）の歌

一日の疲れを風呂で流しつつ鏡にうつる己をほめる

俺つてカッコイイなあ、とほめるのだらうか。それは冗談だけれど、正確に言ふなら一日の自分の努力をほめてゐるのでせう。

一日の疲れを風呂で流しつつ己が努力に満足覚ゆ

としてみても如何ですか。第十二班は対照的です。まづ野崎讓君（横浜国大四年）

思うこと自分の言葉にならないで苦しさ感じる班別研修

さうだね。自分の思ひを言葉にするのは本当に難しいね。ここぞといふ時はなほさらだ。ラブレター書く時と同じだ。ところが同じ班の小池隆寛君（大阪府立大三年）はと言ふと、

なつのそらこころほかんと見上げればいちわのとりのただただゆくかな

小池君、大丈夫か？野崎君はこんなに苦しんでゐるのに、君は鳥と一緒に飛んで行きさうぢやないか。小池君もガンバレ！野崎君の歌は「ならないで」が口語表現だから文語表現に親しむ意味で



思ふこと己が言葉にならずして苦しく思ふ班別研修

としてみても如何でせうか。先に跳んで女子班の第二十二班に行きます。三浦しのぶさん（佛  
教大三年）の歌

今日出逢ひし見慣れぬ顔のともどちと心開きて語りゆきたし  
様々な想ひ抱きて集ひ来しともらと共に学び深めむ

友を求める心が素直に詠めてゐます。良い連作ですね。添削の必要もありません。ただ、  
今後はふとした友達の仕草や心遣ひなど具体的な場面を活写する様な歌づくりを心がけてみ  
てください。次に第二十四班、星野有佳子さん（桜美林大三年）の歌

若くして戦地に消えし多くの命悼む心を持とうと思ふ

胸がつまります。亡くなられた方々がこの歌を見たら、涙をこぼすに違ひありません。祖国を守るために戦場に散った方々への何よりの慰めであると私には思はれてなりません。この気持ちを大切にして下さい。

たたかひのにはにみ命ささげましあまたのはらからしのびまつらむ

「には」は場所、命をみ命とし、あまたは多くの意、はらからは同胞や兄弟を指し同じ国民の意になります。少々難しい表現ばかりですが、今後の勉強の糧として下さい。

をはりに

時間が迫りました。最後に国民文化研究会の会員のお歌を紹介します。指揮班長として厳しい言葉も仰有る内海勝彦さん（日産自動車(株)勤務）のお歌

師の君は自らうつしゑカットして我らがもとにとどけられけり

日本人の忘れしものがここにがあるとふ師のみ言葉は切々として

日の本の男の子のたましひけなげにも示してありしこれのうつしゑ

しみじみとながめてをれば胸迫りあふるる涙とどめかねつも

長谷川先生が下さった息絶えた幼い弟をおんぶして齒をくひしばる男の子の写真（うつしゑ）には、本当に心が震へました。あの時の切ない思ひをこんなにも丁寧に詠んで頂いて有り難い思ひで一杯です。

御仕事のため、この合宿の準備に多大に尽力されながらも参加できなかつた澤部壽孫さん（日商岩井(株)勤務）がインドネシアのバリ島から届けられたお歌

厚木なる七沢の合宿二日目は如何にあらむとしのぶ夜更けに

七沢の合宿しのぶバリ島の夜空をちこちに星かがやけり

待ちに待ちし合宿なれば後髪ひかるる思ひに旅立ちて来ぬ

小川先生・長谷川先生御二人のお話聞かばと思ひをりしに

四十回を数ふる合宿つつがなく終れと祈る夜空の星に

言葉のいのちは時空を越えるのですね。このお歌を誦む時、バリ島の澤部さんの心が私の心を打つてやみません。

現代に生きてゐる私達が『万葉集』に触れる時、千年以上の時間を越えて、歌のいのちが直接に私達の心に響いて来る感動を覚えます。皆さん、こんなにも奥行き深い歌の世界に共に分け入つてゆきませう。きつと私達の人生はより豊かになるものと信じます。このあとは班別での短歌相互批評です。勇気を出して互ひの心に飛び込んで行つて下さい。

青年の言葉

ドイツに留学して

麻生飯塚病院循環器内科医師

長澤一成





御紹介戴いた長澤です。私は循環器疾患を専攻研究する醫師として平成三年三月から平成五年十月迄の二年半の間ドイツ連邦共和国にあるマックスプランク研究所に留學してをりました。明治の世ならばいざ知らず、現在では海外に居住し種々の經驗をするといふ事は別に珍しい事でもなく、況してや生活するに汲々として語學も怪しい私の話などから得る事はないと思はれますが卑近な事から垣間見たドイツとドイツ人の事を御話したいと思ひます。

私が仕事をしてゐたマックスプランク研究所は自然科学、物理、化學、生物、醫學、地學、天文學等を中心とした研究を國家的に行つてゐる研究機關で、その前身は前世紀末に設立されたカイザーウィルヘルム科學協會でありました。第二次大戰で敗れた後、この組織は解體されたのですが、戦後の失意と混亂の中でドイツが眞先に取組んだ事業がこの科學研究機關の再興だったので。國家再興の礎を基礎科學研究に置くといふ事は、ドイツ人の歴史、精神史に裏打ちされた信念の様なもので、先のアインハイント（東西ドイツ統一）にあつても、苦しい經濟的事情の中からドイツが第一に手懸けた事の一つは、舊東ドイツに十箇處餘のマックスプランク研究所を開設するといふ事でした。

研究所で仕事を始めて先づ氣付いた事は、紙がないといふ事でした。日本の病院や實驗室ではメモ紙・ノート・コピー紙・そして實驗に使ふ種々の紙類に至る迄、探さなければなら

ないなどといふ事は先づありません。ドイツでもそれらが決してない譯ではないのですが、紙といふものを實に大切にします。買物に行つても包装は、こちらが特に要求しない限り、實に簡単ないかのどちらかです。實は、これは紙だけに限らず、あらゆる物に對して浸透してゐる考へ方の様です。これはドイツの吝嗇りんしやくと誤解されてゐるのですが、その基には、消費文化に對する嫌悪と警戒があるのです。消費文化の代表は矢張りアメリカで、ドイツ或はヨオロッパがアメリカ文化との緊張状態にある事はよく感じた事です。

私が勤めてゐた研究所はフランクフルトから約五十キロ程北方にある人口四萬人程度のバート・ナウハイムといふ小さな町にありました。日本では餘り知られてゐないと思ひますが、ドイツでは有名な保養地で静かで美しい所でした。尤も、居住者の平均年齢もドイツの中では二番目に高いといふ、實にのんびりとした、時が止つてゐるのではないかといふ様な街でした。若い研究者や研究所の人々は一週間休めばもう十分だと言つてゐましたが、私の住んでゐたのはその小さな市の更に周辺にある（ドイツではシュタットマイルと言ふ）人口数千の小さな村でした。薔薇の産地として有名なシュタインフルトといふ村でローゼンシュタインフルトと呼ばれ、五月から九月頃迄は村中が薔薇の花に包まれます。ベルリン、ハンブルク、フランクフルト、ミュンヘンと言つた大都市はありますが、基本的にはこの様な小さな





村や町がドイツ全体に散らばって生活の基盤になつてゐます。従つて田舎と都市といふ選別も餘りなく、政府の役所も内政・外交・經濟・司法といくつかの都市に分散してをり、大學も日本の様に優劣がありません。都市國家の集合により共和國となつた歴史の違ひでせうが、明治以降、強力に中央集權を進めて來た日本との違ひには驚かされました。

地圖を見れば判る様にドイツは、ドイツのみならず歐州の各國が隣國とは地續きなのです。この判りきつた事を日本人が實感する事は難かしい事だと思はされました。彼等は歴史上いつも隣國、或は異國との葛藤と共存を繰返しながら生きて來た。他國、異文化との戦ひと妥協の歴史を生きて來た國民を見ると、日本といふ國の特殊性を改めて思はされます。詰らぬ事です、が、歐州では各國が同じ陸續きの大地にありながら、

その食生活は截然としてゐます。ドイツ人の食事は将に質素で、繊細とはとても言ひ兼ねるものです。一方、隣國のフランスでは食事情は全く異なります。フランス中部のライン川沿ひに嘗てドイツ領であつたアルザス地方があります。現在ではドイツとの國境の街ですが、その地域の小村に有名な佛蘭西料理のレストランがあります。私も休日に訪れた譯ですが、いくつものテーブルからドイツ語が聞えてくるので給仕に尋ねると客の六割がドイツ人だと言ひます。しかし、彼等は家に戻るとそんな料理を作る事は勿論、食べる事ありません。訝しく思ひ研究所の友人に尋ねると、フランスの食事はおいしいし素晴らしいと言ふ。ならばどうしてその料理がドイツの料理に影響しないのか、何故、町にフランス料理のレストランがないのかと問ふと、それは、ドイツ料理は彼等にとつて所謂「お袋の味」だからだと答へました。日本ではとても考へられない事です。

食物一つとつても東京程、世界中のあらゆる種類の料理が集合してゐる場處はないでせう。日本人は異つた文化を受容するのに殆んど抵抗がない、といふよりも寧ろ欧州やアメリカの文化文物には抜き難い憧憬を抱いてゐます。その受容力には感心もしますが、大した軋轢もなく異文化を次々に受容してゆく姿に惧れを感じない譯にはゆきません。さういふ眼で見れば、今の日本人は自らが何者で、何に歸屬してゐるのかといふ事を正面から問ひ詰められた

事がない、或は、他から喉元に刃をつきつけられた事のない、單なる好奇心の強いお人好しにしか見えて來ないのです。

ドイツ人のみならず歐洲の人々は御國自慢が大變好きな様です。概して日本人はそんな事が不得手の様です。御國自慢などは無邪氣で他愛もないものですが、そんな瑣事にも、しぶとく生き残つて來なければならなかつた事が體に染み込んでゐる人々と、民族と國家の存續の為に拂はれた血と汗の自覺が稀薄な國民との差異を感じたものです。この合宿教室でも過去何度も語られた様に、日本の歴史は聖徳太子の昔から、いつも異文化との交流接觸の歴史で、その事は今に於ても變る處がありません。たゞ、海に囲まれてゐたといふ地理的條件もあつてか、それに伴ふ國民一人一人の危機感稀薄だつたのではないでせうか。昔は船に乗つて極く稀にしか訪れなかつた異文化も、今や飛行機や電波に乗つて溢れんばかりに押し寄せて來る時代となりました。國家の獨立と民族の文化の存續の為に流された血と苦勞を忘れてしまつた現在の日本人が、この怒濤の様な異文化の流入に耐へられるかどうか、既に破綻は様々な處に現れてゐる様ですが、實に危い状況だと思ひます。

御存知の様にドイツは戦后外國人を多く受容して來ました。のみならず、相當な優遇もして來ました。しかし、今やネオナチと言はず、それに伴ふ種々の軋轢は、國內問題化してゐ

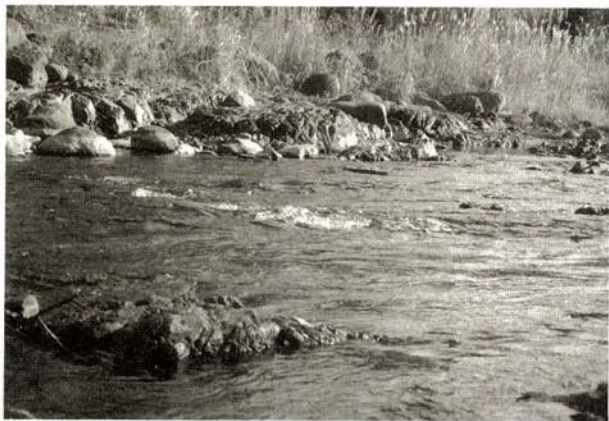
ます。歐洲の歴史はこの様な異民族、異文化の衝突の歴史だつたし、又今后も、さうであり續けるでせう。昨今「國際化」といふ言葉が持つて囃されてゐる様ですが、國際化といふのは、將にこの様な軋轢を、戰ひと妥協を繰返しながら生きて行く事に他ならないのです。出来る事なら鎖國でもした方が餘程安全で樂な道ではないかとさへ思ひます。しかし、それも不可能でせう。私達の世代は餘りにも御目出度い「國際化」といふ夢から早く醒めて、否應なく押し寄せてくる「國際化」といふ苦しい大變な現實に当らねばなりません。その為には正確に意志を傳へ得る語學の修練は當然の事、傳へるべき何物かを學ばねばならない。それは、自分とは、そして日本人とは何者であるかといふ事を知るといふ事ではないでせうか。

青年の言葉

恵まれた日々を振り返って

(株)BBS金明代表取締役

中田一義





私は、このやうな場で皆様方にお話しできるやうな経験は、何一つございませんが、これまでの自分の未熟な生き方をお話させて頂きながら、自らの人生を振り返りつつ、明日からの生活の力になればといふ思ひで貴重な時間を拝借します。

一、“如何に生きるか” “世の為、人の為になるとは”（学生時代）

私は富山大学に入学して、社会に出た時にどうすべきか、大学を出た以上は社会の役に立つ人間であることは当り前でありますから何を目的として生きるべきか考へました。地位、名誉、富、それらを手に入れることが社会に役立つとは思ひ難く、人生の目的とするにも疑問が残りました。禅寺の高僧や、明治の志士達を目標にして、世の為、人の為になるやうに生きていきたいと考へましたが、いざ自分を振り返つてみると、そのやうな力もなく、このままではいつ死んでも大差はないと思ひました。そこで、結論の出ぬまま、大学生活の中で一所懸命やつたと言へる事をして、“何か”を掴みたいと、空手道に没頭して四年間を過ごしました。でも、自ら計画したことこの三分の一も実行できませんでした。

## 一、父の鉄工所入社・倒産の危機と会社再建（卒業後）

大学の卒業と同時に、父の鉄工所に入社しました。その頃会社は、借金多く欠損の連続でしたが、大学四年間の恩返しおんがへしの気持ちと、世間知らずの果敢さを持つて、自らの判断で次々と打開策を実施しました。しかし、悉く失敗し、三十二才の時、倒産の危機、窮地に陥りました。当時、父はその三年前に病に倒れ、療養に専念してをり、六名の社員との信頼、自らの人生、一族郎党の行く末などを考へ、しばし悶々とした日々が続きました。

倒産するといふ事は、金がないといふことです。ならば金を作ればいい、金を作るにはどうしたらいいか。私は、最悪の場合、割腹する覚悟で、一年後自殺有効な生命保険に加入しました。そして、やれるだけのことをやつてみることにしました。まづ、当座資金の用意として、友人や先生、約三十名近くの方に恩借おんしやく回り（六年後完済）をし、仕入先などの債権者の方々に割賦返済をお願いひし、銀行には元金返済を猶予してもらひ、社員には減給賞与無支給等々で凌いでもらふことにしました。

数ヶ月にわたるこれらの対策を實行していくうちに、地元鉄工業界における父の五十年間





の信用の厚さを、心底実感しました。債権者の誰彼も父の立場に同情し、私に励ましのお言葉をおかけ下さるのです。倒産の危機を招く最大の原因となった卒業したての私の「自分がやらねば！」といふ思ひ上がり を恥づかしく思ひました。結局、親の「七光」で救はれ、学生時代に父から聞いた言葉が蘇りました。

「人生は、あの人はいい人やつたといはれて、終ること」

父は、その言葉のとほりに生きてきたんだと思ひます。人と人との出会い、つき合ひを大切にし、世のため、人のために、一生懸命生きてゐたのです。

一、“如何に回りに迷惑をかけずに過ごすか”の大切さと厳しさに気づいて

私は、この倒産の危機を乗り越えて、人生に対する考へ方が大きく変りました。人生とは、如何に生きるかといふより、如何に回りに迷惑をかけずに過ごすか、どうしたら人の気持ちにくめるかといふことが大切だと思ふやうになりました。回りに多大な迷惑、負担をかけた倒産の危機以来十七年間、恙ない日々を送つてこれたのも、私をこのやうな人柄で世に出してくれた両親、ご先祖様、また倒産の危機の時から今まで一緒に頑張つてきた社員の方々のお陰です。現に、倒産の危機の時から、大学同期の友人（現専務）の下、五名の社員の方々の一糸乱れぬ再建努力によつて、今では六十余名の機械メーカーに育ててもらいました。

また、人の気持ちをくむといふ点でも、社員の方々に對して、“信頼し切れる有難さ”を感じてゐます。今、社内に専務も含めて、同期が三人あるのですが、それぞれがそれぞれの立場で、一生懸命やつてゐるので、“あいつのすることなら大丈夫”とお互ひが信頼し合つてゐます。と同時に、相手の気遣ひを感じられる喜びもあります。お互ひに、信頼しつつも、気づかつてゐるので、いざといふ時の機転が速いのです。大変有難いと思ひます。家庭でも、

同じことが言へるはずです。お互ひに少し気づかつてあげること、みんなで幸せな時を過ごすことができます。会社や学校で解決できぬことがあつた時など、本人は帰つてきた顔がひきつつてゐないつもりでも、出迎へる側が百も承知の上で、ほほゑんで「お帰り」を言つてもらへる一言が得難い救ひです。それが家庭の幸せです。結局のところ、人生の意義といふのは、身近な日暮らしの中にあるのです。

### 一、国文研の合宿教室に参加し始めて

この合宿には、大学生の頃と、また五年前から参加させて頂いてをります。年に一度、自らの行き方を振り返る、大変良い機会となつてをります。諸先生を拝し、諸兄に接し、国文研に対する自分の力不足を痛感致します。

私は、北信越学生空手道の世話をしてゐることで、たくさんの学生が、毎年私の前を通り過ぎていきます。そんな学生たちとの出会ひは私にとつて大変勉強になりますし、また喜びでもあります。学生たちとは、空手を通じて、交流を重ね信頼関係を築いて行きながら、この合宿にぜひ参加してほしい、必ず、何か得るものがあるといふ信念を持つて、学生たちに

声をかけてみます。参加してくれる学生たちは皆、合宿のことを良く理解できておなくても、「中田さんがいいと言ふのなら」と参加してくれます。学生たちとの日頃の交流の有難さをひしひしと感じつつ、この合宿でたくさんのことを、中でも出会ひの大切さを、学んでいくてほしいと思ひます。

ご静聴有り難うございました。

青年の言葉

歌とともに教職十年

船橋市立法典東小学校教諭

竹内孝彦





友人から、「先生は、夏休み冬休み春休みがあつていいね」と言はれます。氣分的にはのんびりとしてゐますが、午前中はサッカー部、午後は法典東小ビーチで水泳部の指導といふ毎日です。皆さんのやうに遊びながら日焼けがしたいものだなあと思ひます。

私が教師になりました十年の歳月が流れたわけでありました。その間の體驗を拙い歌にしてまゐりましたので、その事についてお話し致します。

私が歌といふものに出會ひましたのは、この合宿教室に於いてです。苦吟して何とか形が整つた歌を一晩かけて班員相互で批評し合つた記憶は今でも鮮明に残つてゐます。一首産み出すには、産みの苦しみが伴ふわけです。しかし翌日その歌を眺めてゐますと、何かつまらぬ歌に思はれるので手直しをしてみます。また次の日に見てみるとどうもよくない。どこがよくないかすらわからないのですが、何かしつくり來ない氣がするのです。このやうな事を繰り返しながら、雑事に追はれてゐますと、そのうち、作歌する事が途絶えがちになつてしまひます。私が、この合宿教室を契機として、十年間歌を作つて來られたのは、歌會の力が大きいと思ひます。定期的に、歌を作らねばならない状況に追ひ込んで、他人からの歌評をいただくことにより、歩み續けて來られたと思ひます。

そこで、指摘された事の多くは、一首の調べがすらりと整つてゐないといふことでした。

口唱してみても、何かごつごつとひつかかるやうな歌はよくないと指摘されました。言葉を入れ替へたり、ひつくり返したりしながら、心の中の叫びが、それに近い形に調つてゆく過程の楽しさを感じはじめてゐます。

では、拙詠を紹介致します。

自分の取柄は子供と歳が近いことしかないのだからと、ただ、朝から夕暮迄子らにつきあつて遊んだ一年目でした。

吾が甘き顔してをれば背なに乗り手にぶらさがりからみつくり子ら

通知票一氣に書かねば間に合はぬ花梔子くちなしの匂ふ今宵を

子と親の一人一人に書くことの思ひ浮かばぬいらだたしさよ

教室が汚ない、うるさいと指導する一方、子らを思ふ様に動かさないものですから、怒つてばかりゐて嫌はれてしまつた二年目でした。

先生を代つてほしいと書く子あり腰の重たく蟬の聲聞く





叱ること度を重ねて子供らに心の傷を負はせたる  
吾

次は平成二年（五年目）の歌です。一學級三十數名  
ゐますと、一日中會話のなかつた子が出てしまひます。  
先輩から教へられるままに子らの帰つたあとの机と話  
する事をしてゐました。

子供らの帰りし後の教室に一人ゐて

子の机なづれば浮かぶ授業中まみ輝かし聞き入る  
姿

子の机三十七と語らひて外に出づれば月影まぶし  
も

初めて卒業生を出しました。もう高校三年生です。

卒業式

胸元に小さき薔薇の花つけていよよこの子らはなやぎゐたり

泣きぬれてしづしづ歩む三組の子らの姿は涙ぐましも

今はただ別れのときと子供らの列見送りぬ涙垂りつつ

次は、平成三年（六年目）の歌です。

中河興一著『天の夕顔』は、こんな戀をしたものだなあと思ひながら読み耽つたものでした。

はげしくも切なき戀にあくがれて天の夕顔読み耽りつも

平成二年は秋に今上陛下御即位の御大典がありました。自分も歴史の大きな節目に参画してゐる思ひでした。

提灯行列

平成のみ民らの波たうたうと二重橋前廣場へと寄す

よろづ民おのもおのもが一燈を掲げて聖壽萬歳を唱ふ

天皇様皇后様のみあかしの二つしづかにゆるるをみまつる

出でましの終はりてもなほ御手振らすかたじけなさに吾涙せり

次は、平成五年（八年目）の歌です。三度目の卒業式です。卒業式は何度やつても感慨深いものです。

あけぼのすぎ木末に高く日の御旗かかぐるけさはうららかなりし  
拙きは拙きままに精一杯尽しきと思ひ式場をゆく

日々に日に歌ひ重ねて來し歌もつひにはむせびなく音となりぬ

おさへかねおつる涙の涙さそひ涙の波にのまれて泣きぬ

少女子ら肩よせむせび泣くばかり廊下階段とくろかまはず

茫然と目高ら泳ぐをながむれば子らの面輪の浮かびては消ゆ

一介の小学教師に吾が生をかくる幸しみて思ほゆ

片戀の歌はどういふわけかすらりと出来てしまひます。

切長の目もとくづして打ち笑まふゆかしき君をわすらえなくに

春風のままに散りゆく花びらのもとにたたづみ君戀ひにけり

書物ふみ讀めどなほうつろなりまなかひに君が面立ちもとなかかりて

春宵を一人しをればすべをなみ受話器をとりて君が聲聞く

次は平成六年（九年目）の歌です。

修學旅行で共に過ごす夜には、子らは、伸び伸びとして瑞々しい姿を見せてくれます。

### 日光修學旅行

くもりなき子等の歌声をちこちゆ聞えきにけり一号車バス

大方は霧の最中もなかにかくらうて華嚴の瀧は見えずかなしも

中禪寺湖大尻川と流れ来る瀧のしぶきに子等と濡れけり  
白糸の千々に乱れてたぎちたる湯瀧がもとに子等と涼みぬ  
幾度も子等の小部屋を見巡りてはじめての夜をいとほしみけり  
星のなき夜空あふぎて湯にひたり子等の寝顔を思ひ見にけり

平成六年は前の年の米不足を契機として、自らもささやかながら米作りをしようと思ひました。

#### 御田植祭

さみどりの吾が目には沁みてつくづくと稲の御霊に祈りささげぬ  
田の泥になづみてをればいとけなき童の頃を思ひ出でけり  
船橋に持ち帰りたる玉苗を愛しき子らは取り分けて植うる  
風薫る小學校のミニ水田苗は株張りいよよ太りぬ

次は平成七年（十年目）の歌です。

實家の建て替へにあたり、一人住まひをする事になりました。殆ど寝に帰るやうなものですが、次の様なひそかな楽しみを見出してゐます

住み慣れし板の間部屋を後にして青き疊の部屋に親しむ

ひとりみ  
独居はわづらはしきこと多かるとかねて思へど心浮かるる

大方の書物は箱にしまひ置き歌集いくつも書架に収むる

### 自炊の歌

一杯の酒含みつつ一日の疲れ忘れてレバナラ炒む

惣菜を惣菜売場にあがなふはやや口惜しくわれ自炊する

あつあつの秋刀魚さんまの開きに醤油垂らし一人食みつつ「春夫」を思ふ

朝には飯に納豆卵かけ鉄砲玉の如く家出づ

友や女性や子供らが、私の前を風のやうに通り過ぎていつた十年間でした。此度家の中をひつくり返して昔の歌を眺めてみた訳ですが、恥しさと共に、アルバムをみるやうな懐しさを感じてゐます。皆さんも、移ろひ易ひ心の動き、うづき、叫びを、歌の形にとどめてみるとよろしいかと思ひます。

一年の歩み

—— 学生の活動を中心に ——

大成建設(株)国際事業本部企画推進室長

山口 秀 範







## 秋・冬の活動

平成六年夏の第三十九回全国学生青年合宿教室（阿蘇）への参加者の中から、合宿教室での感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、巡り会った友との新たな学問の場を求めて行かうといふ動きが、全国各地で起こつて来た。

東京の学生達は、中野区にある「正大寮」に集ひ、寮生を中心に研鑽を開始し、亜細亜大学では、東中野修道教授にご指導頂いて毎週土曜日、小林秀雄の文章を味読する例会が続けられた。一方、「四土会」、「早蕨会」を始め、社会人の勉強会も盛んであつた。関西・北陸でも学生・OB一体となつた「輪読会」が開催され、九州においては、熊本の学生達が毎週、吉田松陰の勉強会を重ねた他、福岡・佐賀・鹿児島でも、主として社会人による「国民文化懇話会」、「清風会」等を通じて交流がはかられた。

これらの活動を踏まへて、平成六年十一月から十二月にかけて、別表の通り各地で合宿が持たれた。一泊または二泊の小合宿ではあつたが、一冊の本を輪読し、OBの研究発表を聴き、夜を徹して互ひに語り合つた。その様子は、例へば、亜細亜大学の合宿記録集「翌檜（あ

すなる）八号」に松田裕幸君（亜細亜大・法四年）が記した編集後記にも良く表はれてゐる。

「（合宿では）『短歌のすすめ』の中の『もののふの歌―寺尾博之君』の遺歌に収められた短歌を皆で味はつていきました。戦争のさなかで詠まれた寺尾先輩のお歌は、どれも真摯で、込み上げてくるどうしようもない思ひを歌に託されていらつしやるやうに感じられました。またOB発表の時間には、先輩方が普段の仕事や最近の生活の中で何を思ひ、どう生きていらつしやるかといふことをお話しして頂きました。（中略）（東中野先生からは）『自分の心に友が生きてゐますか』といふお言葉も頂き、一人でも多く自分の心に生きてくる友が得られるやう、普段の生活の中で馴れ合ひのつき合ひではなく、自分もそして相手も磨かれていくつき合ひができるやう努めていきたいと思ひました。」

これらの合宿では、短歌創作・相互批評にも取り組んだ。夏の合宿教室で初めて歌を作つた学生達も、折り／＼に作歌の経験を積むうちに、次第に歌の調べを整へ、自分の気持ちも正確に表現することが出来るやうになつた。秋の合宿記録から二、三ご紹介しよう。

阪南の岸に集ひて先人の歌々を学ぶは楽しかりけり

大阪外大四年 福田 仁

万葉の歌を学びて先人の精神こころにふるるはありがたきかな

京都大学院 濱地 賢太郎

白波をたてて釣り船すすみゆけり霞かかりし海を望めば

亜細亜大四年 荒川 雅之

御舎弟の戦死を知りて茫然とするさま詠まれし歌の悲しき

〈地区合宿〉

亜細亜大日本文化研究会	平成六年十一月十二日～十三日	東京・高尾「高尾ユースホステル」
九州セミナー	平成六年十一月十一日～十三日	佐賀・多久「東原摩舎」
東京「正大寮」	平成六年十二月二日～四日	東京・中野「正大寮」
北陸地区研修会	平成六年十二月三日～四日	富山「アオイスポーツハウス」
関西信和会	平成六年十二月十日～十一日	大阪「住友電工南海荘」

## 春季合宿

終戦から五十周年目の平成七年は、新春気分も抜け切らぬ一月十七日早朝、阪神淡路地方を襲った未曾有の大震災（兵庫県南部地震）と共に波乱の幕開けとなつた。地底の悪魔が吠えるやうな自然の猛威の前に、街は一瞬にして瓦礫の山と化し、或いは火焰に舐め尽くされてしまった。亡くなられた五千を越す方々の御冥福を心からお祈りするのみである。

その復興途上の三月二十四日～二十六日、大阪府四条畷のSEI生駒セミナーハウスにて二泊三日の「春季合宿」が開催された。地元関西の学生三名、東京から五名、熊本から二名の合計十名の学生が集ひ、「和歌を通じて、人物、時代を感じとる」ことを主題に研鑽に励んだ。

初日（三月二十四日）は、午後二時に全員が集合し、開会式に引続きお互ひの所懐を述べ合つた。この合宿に向けて各地区で準備を分担して来たが、まづ地元の濱地賢太郎君（京都大・大学院一年）が、自分の専門分野を紹介しつつ「現代物理学の世界像」を、福田仁君（大阪外大四年）が「歴史的かなづかひについて」それぞれ興味深い発表を行なひ、意見交換も

あつて早くも打ちとけた雰囲気になつた。夜は、絹田洋一先生（大阪府立交野高校教諭）の『太平記』についてのご講義を受けた。合宿地四条畷にゆかりの楠正成、正行父子を中心とした当時の時代背景をわかり易く解説して頂きながら、『太平記』の原文に触れた。先生の臨場感あふれる語り口と、古典の文章のリズムが相俟つて、歴史上の人物が生き／＼と躍動し現代に甦るといふ体験を参加者一同が味はつた。

二日目（二十五日）の午前中は、小柳陽太郎先生（国文研副理事長）から、日露戦争中の出征兵士とその家族の歌を集めた国民的歌集『山櫻集』についてご講義頂いた。先生は、

（戦死）陸軍工兵少佐 小須田 太

我死ぬも子を守りたてて大君と御国につくすことな忘れそ  
かせ寒きつゆのやどりの夢さめてねつかぬいまも思ふ故郷ふるさと

出征の折よめる

猿 田 只 介

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなにとはなしに  
勇ましきはたらきせよといひさして涙に曇る母のみことば

等の歌を紹介されながら、子を思ひ、親を氣遣ひ、妻を恋ふる心情と、同時に国のために勇ましい働きをしようと戦場に立つた当時の人々の姿を、参加者一同と共に偲んで行かれた。そして「九十年前、多くの日本人が自分に大切な何かを守るために自分の生命を捧げたわけですが、今私達一人くが、生命を捧げる。何か」を持つてゐるかと問ひ直してみたい」と語りかけられた。

更に「現代は切迫感をもつて死を考へることが出来ないといふ、かつてない異常な状態にある。本来、命の捨て方を学ぶ、換言すれば人々が何のために生きて来たのかを知ることが歴史を学ぶ。意義でせう」と指摘され、「歴史」を我々の手に取り戻すため先人の文章や歌を心をこめて読むことの大切さに改めて気づかせて下さつた。

午後は四条畷神社、楠正行公墓所へ参拝。小雨も厭はず飯盛山を目ざすグループもあつて、往時を偲びつゝ、心楽しい一時を過ごした。二日目夜と三日目朝の日程では「和歌と友情」についての発表や、阪神大震災を実際に体験された先輩方からの貴重な報告に耳を傾けた。驚天動地の混乱した状況下、被災者自身の節度ある行動、学生・青年の献身的働き、そして自衛隊の力強い活動及びそれに感応する人々の様子等、非常時に目覚めた「国民同胞感」に一同大きな感銘を受けた。

自からも発表をした草野直樹君（中央大四年）が「正大寮」の後輩澤部和道君（日本大三年）の合宿での様子を詠んだ歌を紹介しておく。

先輩の発表後一人講義室に残る姿を見て

発表の終はりし後もたゞ一人席を離れず文を読む友

先輩の友を思ふ歌に触れし今如何なる思ひを君はいだくや

合宿は普段のつき合ひを深める場でもあり、久しぶりに会ふ友の新しい面を発見する場でもあつた。三日間共に学び、夜を徹して語り合つた同志的仲間は、互ひの更なる研鑽を約して、それぐの学園へ戻つて行つた。

### 夏に向けて

新学期に入り、熊本から嬉しい便りが全国の友へ届いた。

「熊本大学、熊本学園大学の学生を中心に（大学内の輪読会も）会を重ね、スポーツと娯楽

平成七年

春季合宿日程表

	3月24日(金)	3月25日(土)	3月26日(日)
		起床・洗面 朝の集ひ 朝食	起床・洗面 朝の集ひ 朝食
		講義 小柳陽太郎先生 『山櫻集』について  全体討議	発表 ・中央大4 草野直樹  全体討議
			感想文執筆
			閉会式
		昼食	解散
開会式			
発表 ・京大院1 濱地賢太郎 ・大阪外大4 福田 仁  全体討議	四条畷神社 楠正行公墓所 参拝  (和歌創作)		
入浴・夕食	入浴・夕食		
講義 絹田洋一先生 「聖徳太子と楠氏の精神」から	国文研会員の発表 「阪神大震災の体験」 「和歌と友情」 全体討議		
懇談	懇談		



に興ずる構内の喧騒にしばし窓を閉め、松陰の言葉に耳を傾ける時を重ねてまゐりました。又先輩との付き合ひも始まり、徐々に学問の場ができつゝ、有る事を感じてをります。そこで、今後の活動への発展を期すべく、又、学生を中心とした共同生活を復活させるべく……木造二階建ての一軒家を借りる事と致しました」といふ「日新寮開寮のお知らせ」は、新たな学問の場の広がりを感じさせるものであつた。開寮発起人の一人、徳永正巳先生（国文研常務理事）は次の歌を詠んでをられる。

ますらをの行くとふ道をたづねつつ友と語れば楽しからずや

楽しみて憂ひを忘れ日々新たな力あはせて世をひらかなむ

新しき寮に集ひし若き友の瞳輝き頼もしきかな

東京・関西・北陸・九州へ、学問と友情の輪は広がりとつゝ、第四十回合宿教室開催の気運は次第に盛り上がつて来た。



合宿教室のあらまし

戸田建設(株)開発計画部勤務

青山直幸





第四十回全国学生青年合宿教室は、平成七年八月四日から八日までの四泊五日、神奈川県厚木市の「市立七沢自然教室」にて開かれた。合宿会場は、丹沢山系の鐘が嶽かねがたけの山麓ふもとにあり、深き緑に包まれた清涼の地である。合宿開催二日前から国民文化研究会会員数名と学生数名が会場に赴き、合宿の開催準備作業に取り組んだ。七沢自然教室への進入路には「友よと呼べば友は来りぬ！」の横断幕が張られ、参加者を待つのみとなった。

合宿教室の参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 五三大学) (数字は参加学生数)

北海道大1、東京大3、防衛大2、横浜国大1、海上保安大1、新潟大3、金沢大1、富山大3、京都在大1、大阪外語大1、大阪府立大1、奈良大1、山口大1、香川大1、九州大2、福岡教育大1、佐賀大1、熊本大2、鹿児島大1、琉球大1、東北女子大1、東北女子短期大4、拓殖大35、亜細亜大6、早稲田大4、日本大3、中央大2、桜美林大2、慶応大1、青山学院大1、東京工科大1、法政大1、玉川大1、明治大1、国学院大1、日本文理大1、実践女子大1、東京電機大1、福井工業大3、金沢工業大2、関西大1、同志社大1、高野山大1、佛教大1、西南学院大1、中村学園大2、中村学園短期大2、尚綱大1、熊本学園大2、第一経済大1、鹿児島経済大1、日本デザイナー学院1、東京法律専門学校1

計 一一七名（うち女子四二名）

（社会人・教員参加者） 二七名

（招聘講師）

（国民文化研究会） 八四名

（事務局）

（写真） 一名

（見学参加者）

総計 二四〇名

一名 八名 二名

8月7日(月) (第四日)	8月8日(火) (第五日)
(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ・朝食
(講義) 小柳陽太郎先生	(合宿を顧みて) 山口秀範氏
質疑応答	参加者による感想 自由発表 感想文執筆及び 第2回短歌創作
班別研修	班別懇談・清掃
昼食・休憩	閉会式
(短歌全体批評) 與島誠央先生	(昼食・解散)
班別 短歌相互批評	
地区別懇談会	
休憩 夕入 憩食 浴	
班別研修	
夜の集ひ	
就床	

		8月4日(金) (第一日)	8月5日(土) (第二日)	8月6日(日) (第三日)
		6:30 7:00		(起床) 朝の集ひ 朝食
8:30		(講義) 長谷川三千子先生	(講話) 小川三夫先生	
10:00		質疑応答	質疑応答	
11:00		班別研修	班別研修	
12:00		記念写真撮影	短歌創作導入講義 青山直幸先生	
1:00		昼食 休憩	レクリエーション	
2:00			ハイキング 短歌創作	
3:30	開会式 オリエンテーション	(講義) 国武忠彦先生		
5:00	班別自己紹介 班別輪読 事務連絡 打合はせ	全体研修		
7:00	休憩 夕食 入浴	休憩 夕食 入浴	休憩 夕食 入浴 (短歌提出)	
8:30	(合宿導入講義) 東中野修道先生	(体験発表) 長澤一成氏 中田一義氏 竹内孝彦氏	(講話) 長内俊平先生	
			慰霊祭の説明	
			慰霊祭	
	班別研修	班別研修	班別懇談	
10:00	就床	就床	就床	

第四十回 全国学生青年合宿教室 日程表

参加者は合宿申込書のアンケートに基づいて六名から八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生、国民文化研究会会員の中から班長が選ばれた。男子学生は十二箇班、女子学生は七箇班、社会人は五箇班に分けられた。

#### 第一日（八月四日）

##### 〈開会式〉

第四十回全国学生青年合宿教室は、東京大学工学部三年の松岡勲君の清々しい「開会宣言」によつて始まつた。壇上の国旗を仰ぎつつ国歌を二度斉唱した後、戦時平時を問はず祖国日本のために貴い生命を捧げられた全ての祖先の御霊に一分間の黙禱を捧げた。

次いで主催者を代表して国民文化研究会理事長小田村寅二郎先生が登壇され、「この合宿では長幼の序は保つてほしいが、年齢、学年、大学等の外的差異を取り払つて研修に取り組んでもらひたい。頭の働きによつて学問は伸びてゆくが、心の働きによつて人間生活は豊かに奥深くなつてゆくので、心を鍛へてほしい」と語られた。来賓を代表して厚木市長代理の市教育長中島久雄氏が挨拶をされた後、学生を代表して、大阪外国語大学卒の福田仁君が「生





き生きとした感動を学問の出発点にしよう」と力強く参加者に呼びかけた。

続くオリンエテーションでは、合宿教室運営委員長・山口秀範氏（大成建設(株)勤務）が「夏休みの過し方として合宿ほど中身の濃いひとときはない」と語り、合宿の概要・趣旨をわかり易く説明した。そして、指揮班長の内海勝彦氏（日産自動車(株)勤務）により合宿生活細部にわたる注意事項が伝えられた。

この後、直ちに参加者は各自班室に戻り、班ごとに合宿に参加した動機や学生生活をどのやうな思ひで取組まうとしてゐるかなどを互ひに披瀝して自己紹介を行ひ、昨年の合宿記録集『日本への回帰第30集』を輪読した。

〈講義〉

合宿導入講義として、亜細亜大学教授東中野修道先生が「歴史の解釈」と題して話をされた。先生はまづ戦後を形づくつてきた思想的な枠組が四つあること、即ち「階級闘争史観に象徴される社会主義といふイデオロギー」「自衛・侵略を問はず全ての戦争は悪、平和は善といふ硬直した平和主義」「満洲事变以降日本は犯罪国家であつたと解釈する東京裁判史観」「戦後民主主義」であることを指摘された。そしてこれらがお互ひに絡まりあつて戦後五十年の日本の思想を形成してきた事を指摘された。かうした思想の枠組から脱却して、大東亜戦争を文献に即して再検討し解釈する必要があることを述べられた。さうした視点から、先生は、日本とドイツの戦後処理について比較され、「日本は戦争犯罪（捕虜虐待・捕虜抹殺）に対しては戦犯の死を以て謝罪し、昭和五十一年に賠償も完了してゐる。ドイツは謝罪も賠償も一切してをらず、ユダヤ人抹殺といふ戦争犯罪とは全く別の、一般の殺人行爲に対して賠償を続けてをり、それが戦後のドイツの生き残り戦術であつた」と語られた。このことは戦後の風潮を根底から覆すべき極めて重要な指摘であつた。

続いて、一連の謝罪外交や、所謂「従軍慰安婦問題」にも事実即して言及され、最後に、「日本はハル・ノートを突きつけられ、自殺するか降伏するか戦ふかの選択しか残されてゐなかつた」と語られ、さらに「自分の国だけが侵略戦争をしたと必要以上に自分を痛め付け

るのは余りにも自虐的である。私達は静かな誇りを取り戻して事実としての戦争といふものを直視しなければならない」と結ばれた。

〈班別研修〉

講義終了後、参加者は宿泊棟の各班室に戻り、導入講義を受けての班別研修に移った。先づ皆で講義内容を確認し合ひ、続いて講師が一番伝へたかつたことは何か、どこが最も重要なことだったかに留意して討論が進められた。全国から集まつた見ず知らずの班友を前にして、最初は緊張のためか意見も少なく、発言者も限られてゐたが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に発言も多くなつていつた。時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていつた。

第二日（八月五日）

合宿参加者は、毎朝六時半に起床し、各自洗面・清掃を済ませた後、丹沢の山並みを望む広場に集合し、「朝の集ひ」に参加する。国歌斉唱に合はせて国旗掲揚を行つた後、ラジオ体操、連絡事項の伝達などが行はれ、今日一日の研修を心新たに迎へた。

〔講義〕

午前中には、埼玉大学教授 長谷川三千子先生が「敗戦の克服」と題して話された。最初に先生は、「子供たちの戦後五十年」と題する、原爆で亡くなつた弟を背負つた、悲しみの中にも毅然とした態度の少年の写真を全員に配られ、「週刊誌に掲載されたこの写真を見た時、私の探してゐたものはこれだつたと思ひ、本日皆さんに是非お見せしたかつた」と言はれてから講義を始められた。

まづ、クラウゼヴィツの『戦争論』を引用されながら、戦争の定義や、近代の戦争の本質について、若い学生にも解り易く説明された。そして、「ポツダム宣言」の原文を逐一解説されながら、「日本は軍事的に敗れただけではなく、連合国側の正義と意志を強要された訳であるが、このことがつまり『近代戦』に敗れるといふことである」と指摘された。続いて「終戦の詔書」の中の『堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ……』の御言葉の意味についてふれられ、「敗者として賠償や奴隷化に耐へてゆくことではなく、戦勝国の正義を押し付けられたことに耐へて、いつの日か自分達の正義と誇りを取り戻してほしいといふ意味である」といはれ、「その為には内戦等の国内的分裂を最も恐れるものであり、どうか日本の国柄を保

ちつつ、この敗戦に耐へていつてほしいといふことが詔書の主旨である」と説かれた。

さらに、昭和二十一年の昭和天皇御製

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

を紹介され、「これが敗戦国の国民として取りうる唯一の正しい態度である」と述べられた。「詔書と御製の御心は五十年後の現在の我々の上にも示され続けてゐる」と指摘された上で、御講義の最初の写真に立ち返られ、「敗れても誇りを失はないこの少年の姿こそ、若い皆さん方にも今なほ求められてゐることではないか」と話を結ばれた。

#### 〈講義〉

午後からは、神奈川県立百合丘高校校長 国武忠彦先生が「戦争と文学」と題して話された。先生は、父上が出征そして復員後、まもなく亡くなられたことなど、幼少時の戦争の思ひ出からご講義を開始された。「戦後、戦争のことを考へる機会もなかつたが、大学生時代に文芸評論家の小林秀雄氏の著作に導かれ、作家の火野葦平氏や吉田満氏らの作品を読んで、戦争のことを考へるやうになつた。特に兵隊がどういふ生活を送り、どういふ思ひだつたのか、自分は知りたかつた」と言はれた。火野葦平氏の『麦と兵隊』に描写されてゐるやうな

言語に絶する苦しみに兵隊はなぜ耐えられるのか。先生は、火野氏や吉田氏の文章を引用されながら、「それは祖国といふ思ひが兵士を支へてゐて、祖国のためには尊い命を犠牲にしても悔いがないといふ精神が生きてゐたからではないか」と述べられ、戦後は、祖国といふ言葉や精神が忘れられてゐることを指摘された。

同時に、戦後、過去の歴史に対する批判や清算が安易に行はれる中で、「戦ひの日の自分は、今日の平和時の自分と同じ自分だ。二度と生きてみる事は、決して出来ぬ命の持続がある筈である」といふ文章を書かれた小林秀雄氏の生き方は、心に深く残るものとなつたと語られた。

最後に先生は、吉田満氏の「戦艦大和ノ最期」を読まれ、大和の轟沈に至る乗組員らの壮烈無比な戦ひの様子を生き生きと語られた後、「戦争といふ悲劇的な



運命に直面し、国民は一九二〇年となつて祖国防衛のために全力を尽して戦つたのである。私達は今までそのやうな死者の思ひを正面から受け止めたことがあつただらうか」と言はれた。そして、「物言はぬ死者の思ひを受け継いで日本人としての誇り、正義を取り戻さう」と言はれてご講義を終へられた。

〈全体研修〉

初日、二日目と検討してきた戦争の問題をテーマに、東中野先生、長谷川先生、国武先生に再度ご登壇頂き、参加者全員による「全体研修」の場が持たれた。まづ、司会者である運営委員長・山口秀範氏から各班の研修状況が報告され、その内容をふまへた幾つかの問題提起がなされた。これに対し、講師の方々からコメントを頂き、また年輩の会員から戦争当時の青年の思ひなどが披露された。この中で長谷川先生が、「先人の思ひに迫るためには、今の自分を『マイナス』の状態と見得るやうな想像力——精神の冒険が求められる。先人との共感の中からこそ何を克服すべきかが見えてくるのではないか」と述べられるなど、各講師間の意見交流も活発に行はれた。

〈体験発表〉

初めに、麻生飯塚病院循環器科医師の長澤一成氏が登壇され、ドイツへ医師留学した折の体験の中から、ドイツでは、科学の基礎実験を重視して長期的な国家展望を持つてゐること、家庭で作る料理を母の味として大事にしてゐることなど国家や家族に対する絆が人々の胸中に脈々と息づいてゐることを話され、我々も自国の文化や歴史の独自性に着目すべきであると語られた。次いで株BBS金明といふ機械製造業の会社を経営されてゐる中田一義氏が、家業を継いで今日に至つた苦勞と喜びを語られた。「会社倒産の危機を乗り越えて、再建できたのは、父が長年にわたつて築いてきた信用と社員相互の信頼感のおかげです」「母や妻がいつも私を深く氣遣つてくれることも有難いことです」と人と信頼し合ふことが人生でいかに大切かを語られた。最後に船橋市立法典東小学校教諭の竹内孝彦氏が登壇され、「学生の時に合宿教室で短歌に出会つて以来、歌会を通じて定期的に短歌を作り続けてきた」「自分の心の中の動き、うづき、叫びが一首の調べに整つていく楽しさを感じ始めてゐる」と話され、小学校教師となり十年の歳月の間に詠まれた数々の短歌を發表された。そして、「恥づかしさと共に懐しさを感じる。皆さんも心の動きを形に留めてみてはどうですか」と呼びかけられた。



第三日目（八月六日）

〈講話〉

三日目はまづ、宮大工・鵜いかるが工舎舎主の小川三夫みつを先生に「木のいのち木のころろ——西岡常一棟梁と私——」と題してお話をいただいた。

先生は先づ西岡常一棟梁への弟子入りが叶ふまでの経緯や、何故法隆寺宮大工の道を選ばれたのかなどを話された。そして棟梁の下で始まつた緊張した修業の日々を振り返られ、「自分の時間が全く無い、厳しい徒弟修業の中で自分の個性が明らかになる」と語られた。次に「木の話」として、木は育つた環境の違いにより用材として使ひ分けられるべきこと、様々な木が混在する林の大切さ、木の寿命等について語られた。さらに、「弟子の話」として鵜いかるが工舎の若い方々の話を紹介され、「知識が邪魔をする」「刃物研ぎによつて、工人としての精神が養はれる」等と語られ、弟子の方々が共同生活の中で「素直な心」と「本当のやさしさ」を身につけ、古代建築の技を体で覚えて行かれる様を話された。最後に西岡棟梁から学ばれた口伝を紹介され、「これからは、時間を超えた、安心感のある建物づくりを目指す」

と述べられ御講話を終へられた。終了後、やりがんな「槍鉦」（注・台木がなく、槍の穂先のやうな身だけから成るもの）の実演を交へ、学生からの質問にも答へて下さつた。

〈短歌導入講義・レクリエーション〉

午後の短歌創作に先立つて、戸田建設(株)勤務の青山直幸氏が短歌創作導入講義を担当した。この合宿教室では、なぜ短歌創作・短歌相互批評に取り組むのか、といふことから話に入り、「はじめて短歌を創られる方は不安感をもつてをられることと思ひますが、誰でも必ず短歌はできます」と強調した。そして、明治天皇御製、昭和天皇御製や良寛、正岡子規、若山牧水、阪神大震災被災者等の短歌を例に取り上げつつ、「短歌創作の心構へとしては、体験に根差した切実の感動を素直にありのままに詠むこと、理屈や観念を詠むことは避ける、詠まうとする対象に心を集中すること、自分の感動を正確に表現することが大切です」と短歌創作の要点についても話が及んだ。

その後、参加者は直ちに班ごとに順礼峠へのハイキングに出発した。汗をふきふき山道を登つて、眼下に厚木の町が一望できる「ながめの丘」で友と語らひながら、昼食をとつた。昼食後、尾根をしばらくゆくと「おほやま広場」に出る。その芝生で、自然教室職員の方々

のリードで、アコーディオン伴奏入りジャンケンゲームやフォークダンスを楽しんだ。帰路も急な登り下りが多く、皆汗まみれになつて、宿に辿りついた。湯船につかつて疲れを癒やした後、短歌創作に取り組んだ。

〈講話〉

夜は、国文研常務理事兼事務局長の長内俊平先生が「若き友らへ語りかける言葉―観察の目より語り合ふ仲へ」と題して御講話をされた。先生は、故郷青森での百姓仕事の体験から、「田を深く耕す（田返す）」ことによつて稲に土の命が十分に行き渡り、稲の根が広く深く張ることや、有機肥料を多くやると、ふくよかな稲が育つこと等を紹介されながら、「今の学生の知識は土地の表面をかき回してゐるだけではないか。日頃忘れがちな、かけがへのない“おふくろの味”の中



にこそ、知識を生み出す知慧が育つものだ」と説かれた。そして、悲喜交々の様々な人生体験を話され、「心豊かな国になるには、一人一人が『観察の目』ではなく『心を働かせる努力』をすることです」と語られた。

### 〈慰霊祭〉

北村公一氏（株神戸製鋼所勤務）は、阪神大震災の実体験を語つてから慰霊祭の意義についてのお話と祭式の説明をした。その後参加者は野外に設けられた祭場に整列して、厳粛に慰霊祭が執り行はれた。歌人・三井甲之先生の短歌「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」が朗詠された後お祓ひがなされ、警蹕けいひつと共に一同最敬礼を以て御霊をお迎へした。献饌けんせんの後、古川修氏（国文研理事、橋本フォーミング（株）部長）が祭文を奏上、小田村四郎先生（国文研常務理事、拓殖大学総長）が御製を拝誦された。

### 〈祭文〉

さねさし相模の国 丹沢の山なみにつらなる大山をはろかに仰ぐ 　ここ厚木七沢自然教室  
に集ひし われら第四十回全国学生青年合宿教室参加者一同 今宵平成七年八月六日 朝・

夕に学びこし合宿教室の中日の夜を迎へぬ

今し天つ日は沈みて夕風そよぐさやけき草原を齋庭と定めきよめまつりて とこしへにみ国守ります み祖のみたまみ国のために尊き命を捧げまししはらから達のみまへに 海の幸山の幸をそなへまつりみたまなごめのみ祭りを仕へまつらむとす

願かへりみれば過ぎし大御軍の終りし時より五十年の年月としつきが流れ 政界・経済界・教育界 更にマスコミ界は混迷の一途を辿り あまつさへことし一月の阪神大震災・三月の地下鉄サリン事件と未曾有のまがごとの次々とおこり国民の憂ひいよいよ高まりぬ

ここに謹みて告げまつらくは この美はしきやまとしまねの内・外にみてるまがごとのことごとを力の限り打ちはらはんと祈るわれらはたまきはるいのちをこめて 汝いましみことたちの遺のこしたまひしみのちのこもれる数々のみ言葉を学び われら祖国日本をとことには栄えゆかしめむともろともに力合はせ 萬世よろづよのまさみちをきりひらかむと誓ひまつらむ

天がけるみ祖のみたまよ願はくは われらのゆくてをまもらせ給へと第四十回合宿教室参加者一同に代り

古川 修

謹み敬ひ畏み畏みも白す

(明治天皇御製)

招魂社にまうでて

わが國の爲をつくせるひとびとの名も武蔵野にとむる玉垣

夏草

事しげき世にも似たるか夏草の払ふあとよりおひ茂りつつ

をりにふれたる

かぎりなき世にのこさむと國のためたふれし人の名をぞとどむる

述懐

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世をおもふかな

秋夕

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

をりにふれて

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

(昭和天皇御製)

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

平和条約発効の日を迎へて

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重櫻咲く春となりけり

國の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに

(昭和六十一年八月十五日の御製)

この年のこの日にもまた靖國のみやしろのことにうれひはふかし

全國戦没者追悼式

やすらげき世を祈りしもいまだならずくやしきもあるかきざしみゆれど

(今上陛下御製)

硫黄島

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島はかなしき

戦火に焼かれし島に五十年も主なき菟麻は生ひ茂りぬ

そして小田村寅二郎先生(国文研理事長)の玉串奉奠に合はせて参列者一同は拝礼。その後「海ゆかば」を斉唱。撤饌てっせんの後、再び警蹕けいひつと共に最敬礼を以て御霊をお送りし、慰霊祭を

終へた。

#### 第四日目（八月七日）

##### 〈講義〉

合宿四日目の朝は、九州造形短期大学講師で国文研副理事長の小柳陽太郎先生が、「天皇と国民——かへりこぬ人をおもひてうれひはふかし——」と題して話をされた。先生は先づ広島島の原爆記念碑の言葉を例にとりながら、「今の日本は、日本の悪いことだけは目につくけれども、先人が残してくれた美しいことは全く目に入らない世の中になつてゐる。これは歴史の見やうがないではないか」「先人が残した一つ一つの業績を丹念に調べ上げながら、事実を事実として大切にしていくことをやつて貰ひたい」と訴へられた。

次に天皇の御存在について、「日本では有史以来、君民一致つまり天皇と国民が心を一つに通ひ合はせることを国の基本として続けてきた。天皇のために死ぬといふことは、親のため、郷土のため、美しい日本の山河のために生命を捨てるといふことと全く一緒であつた」と述べられ、天皇と国民の間の心の通ひ合ひを御製や実話をもとに紹介してゆかれた。今上



第五日目（八月八日）

〈合宿を顧みて〉

最終日の朝はまづ合宿運営委員長・山口秀範氏から合宿全体を振り返つての所感が語られた。「戦争のことは講義資料をじっくりと読み直し、自分の心で折にふれて考へてみてほしい。又小川三夫先生が知識が邪魔をして大学卒の弟子は刃物研ぎができない。知識をゼロに戻すことから始めると仰つたやうに、知識が邪魔をして大切なことが見えなくなつてゐるのではないか。天皇の御存在についても御製を味はふことを抜きにして語つてはならないと思ふ」と合宿を振返られた。管理棟正面に掲げられた明治天皇御製「もろともに助けかはしてむつびあふ友ぞ世に立つ力なるべき」を紹介され、今後の班員同士の友情を祈念された。

〈参加者による全体感想自由発表〉

参加者が自由に所感を述べる時間が設けられた。次々に登壇した友らは、四泊五日の合宿教室で得た感動を湧き上がる思ひそのままに語つてくれた。「心から真剣に話せる友達を得

た」「先生、友達の言葉に素直に反応できた」といふ喜びの声や、「竹内さんのように、私も歌の勉強を続け、私のアルバムを作りたい」「長谷川先生が紹介された写真を見てこみあげるのがあつた」「御製や鹿児島湾での昭和天皇と国民とのふれ合ひの話聞き、天皇は日本の精神文化の象徴であると感じた」と講義に関する深い感動が語られた。最後に登壇され「十年前に亡くなつた弟が打ち込んでゐたこの合宿で自分も勉強したいと思つて参加した」と涙ながらに話された故島崎祐司氏のお兄さんの言葉には強く胸を打たれた。

友らの熱き思ひを胸に、一同は班室に帰り最後の懇談や感想文執筆、第二回の短歌創作に取り組んだ。

#### 〈閉会式〉

いよいよ閉会式となつた。国歌斉唱の後、参加者を代表して東京大学文学部三年の山口花子さんが「二回目の参加で自分の思ひ上りを思ひ知らされましたが、班友の素直な心にふれて、また来年も参加する意欲が湧いてきました」と語つた。続いて主催者を代表して国文研副理事長の上村和男先生（株千代田コンサルタント代表取締役専務）は、昭和天皇の御製「広き野を流れゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり」を紹介され「今のままでは日本はに

てしまふ。清らかな日本を取り戻す為、祖国再建の為に皆で手を携へ、助け合つていきませう」と挨拶された。次に、京都大学総合人間学部三年の庭本秀一郎君が「閉会宣言」を行ひ、合宿教室は無事全日程を終了した。

つひに別れの時がきた。つひ数日前に出会つた友らとの名残りが尽きない。「お元気で！ また会ひませう」再会を誓ひ合ひながら参加者は七沢に別れを告げて帰途についた。





合宿詠草





合宿始まる

七沢の夏合宿にいざ行かむ不安と期待に胸ふくらませ  
 佐野日本大学高校教諭 荒木敏幸

昨年の感動胸に朋友ともつれて今年も来たりぬ学びの場所に  
 日本大 農獣医三 安東高明

新しき出会ひに期待をふくらませ送迎バスを足速に降りぬ  
 熊本学園大 商四 喜多村 純

だんだんと近づいてくる開会の宣言くちでくり返しつつ  
 東京大 工三 松岡 勲

待ちに待ちし今日七沢の合宿に君が代歌ひて涙あふるる  
 奈良市役所 生駒 聰

陽の落ちていよ／＼高きカナカナの聲のひびかふ七沢の森

講義

長谷川先生の講義をうけて

熊本大 教育四 松岡恵美

学生の述ぶる意見に真剣に身をのりだして耳かたむけらるる

うなづきつ一つ一つの質問を聞きてメモとり答へらるるも

佐賀大 理二 本庄寛行

敗戦の苦難にめげじとふ思ひ持つ子の写真見れば我が身正さる

早稲田大 教育四 鈴木由充

色かへぬ松のごとあれと民草にさとし賜ひし御歌畏し

小川先生の御講話をききて

実践女子大 家政二 江副和美

今もなほ飛鳥の塔をささへつつ生きける木々のいのちにうたれり

日本文理大 工四 鐘築光昭

大人みづから手にとりたまふ槍がんなの刃先の光にこころうばはる



小柳先生のお話を聴きて

東京電機大 理工一 田原誠一郎

先帝は甲板上に一人立ち陸地に向ひて挙手の礼をす

国武先生のお話を聞きて

熊本大 教育四 上甲能也

師の語る「大和」の戦ひありありと己が心に甦り来る

○

東京法律専門学校 一 浜田和彦

真実を探る姿勢の大事さを師は心から皆に語りぬ

桜美林大 国際三 星野有佳子

若くして戦地に消えし多くの命悼む心を持たうと思ふ

亜細亜大 経営一 肥沼祐一

今までに学んだものとの隔たりにわれの内心微妙に動く

班別討論

拓殖大 外国語 広瀬奈穂

人の意見聞けば聞くほど考へるこれでよいのか私の人生

横浜国立大 経営四 野崎 譲

思ふこと自分の言葉にならなくて苦しさ感ずる班別研修

佛教大 文三 三浦 しのぶ

今日出逢ひし見慣れぬ顔のともどちと心開きて語りゆきたし

様々な想ひ抱きて集ひ来しともらと共に学び深めむ

中村学園大 家政四 松 隈 香代子

あたたかきみこころあふるるみ友らの笑顔を見れば力湧きくる

北海道大 農一 服 部 泰 子

消灯で布団の中にもぐれども友との語らひつきることなし

### レクリエーション

慶応大 文一 松 原 央

山道を語らひながら歩みゆけば汗の中にも学ぶことあり

西南学院大 経済二 小 島 尚 貴

幼き日我を包みし山の香はどこへ行くとも変はらざりけり

拓殖大 商三 田中千晶

炎天下心ウキウキハイキング七沢の山に友の声はずむ

拓殖大 外国語一 野村優子

木々の中一人たたずみ思ふのは我が身育てた両親の顔

琉球大 工一 今村卓

日中のハイキングにて疲れしも友と入る風呂の心地良さかな

交流

小鳩グループ本部 小馬谷秀吉

一年に一度のみそぎ老われの合宿教室五度となれり

五十年経し敗戦を語り合ひ世代のへだたりつなぎてうれし

福井工業大 工二 久保博之

一日中一つのことを考へるその難しさ改めて思ふ

金沢工業大 工一 石原義郎

木の間よりさしこむ光あたたかく自然のめぐみをうけた一日

尚綱大職員

鈴木美和

何気無い会話の中の一言に友の優しさ心にしみる

日本大 文理三

石井信博

全国より友らが集ふ厚木の森の語り合ふこと楽しかりけり

福岡県立春日高校教諭

豊原晋一

合宿に初めて参加してみれば真面目な姿勢に驚きにけり

七沢に集ひ来たりし若人の真摯な瞳輝いて見ゆ

東京大 法三

室 健二郎

友どちと枕並べて語り合ひふけゆく夜の名残りつきざる

亜細亜大 大学院一

荒川雅之

集ひ来し友らとともに声あはせ歌ふこの夜は楽しかりけり

## 慰霊祭

奈良大 文四

藤木康子

身を正し失せにし先人の御心に応へゆたし思ひ新たに

出光興産(株)

山田幸治

かしこみて祭場前に立ち並び御霊安かれとひたに祈りぬ

合宿終る

防衛大 理工三

前田哲矢

林間に集ひし友らと語り来し五日間こそ我が糧とせん

富山大 工三

新保良成

五日間友らと語りて気も晴れし気分は爽快七沢を去る

金沢工業大 工一

小林一成

合宿も終りて別れとなりたるがまたいつの日か会はむとぞ思ふ

鹿児島大 法文一

西 真佐人

五日間慣れぬことも多けれど心知る友得たるうれしさ

法政大 経一

土生直樹

寄せ書きを写真の裏に書きつくる友の笑顔を眼まなこに刻む

東北女子短大 保育一 石川 益子

こちこちと時計の針の動く音に友との別れ近づく覚ゆ

拓殖大 外国語一 片岡 幸子

語り合ひ共に過ごせしみ友らの優しき思ひに感謝わきくる

新潟大 教育一 中野 周作

五日間寝食ともにし友どちと別れ近づく名残り惜しくも

大学教官有志協議会・国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村 寅一郎

隔年三回目の七沢自然教室での「第四十回全国学生青年合宿教室」を祝ぎて

さねさし相模の国の大山の麓の集ひも三度となりぬ

完備せるこの施設と職員はわれらが集ひには過分と思ひぬ

うぐひすの鳴く音聞きつつ講義室に今年集ふは二百四十余人

山口秀範運営委員長の用意せし「合宿日程」は斬新さに満つ

初日・二日を一つのテーマに繋がらしめその「まとめ」として「全体研修」を置く

招請の講師二人も異色なる若き女性教授と宮大工みやだいくの棟梁とうりやう

聴講の人らの喜び限りなく劃期的企画は好評を博しをり

かく祝ぎてこれの集ひのことはに榮え続くを祈りてやまず

(株)宝辺商店取締役会長 宝辺正久

長谷川三千子先生「敗戦の克服」を聞く

身をつくしみ国の仇をふせがむと戦ひし日はきのふのごとし

いくさ敗れ天地くづる時にして宣らしし勅を師は誦み給ふ

いくさ停むる国と民とのゆく道はかくとこそ宣らしし大みことはや

「色かへぬ松ぞををしき」と大君は大宮にひとりみうた詠みましき

「万世の為に太平を開かむ」とのぞみ給ひし大御心をいま仰ぐべき

黙しつつも隠れつつも忘るべしやわが国守る本の心を

九州造形短期大学講師 小柳陽太郎

突然の社命にて出張せし友澤部寿孫君を偲ぶ

戦後に生あれましし若き二人の御姿（長谷川先生・小川先生）をこの壇上にむかふるうれしさ

御二人を迎ふる準備に心血をそゝぎ給ひし友ありがたき

粉雪のふりしく中をもろともにかるがの里訪ひしかの日よ

刻々に偲ぶますらむ海さがるインドネシアの空仰ぎつつ

御二人の希有の御話に心をどり聞きしよろこび君に伝へむ

四十年の我らがいとなみに新たなる歴史刻みたり厚木合宿

尚綱学園監事

徳永正巳

八月六日広島原爆五十年

幾万の無辜の民草たふされし原爆の日より五十年を経ぬ

いくさやぶれ敵に降りしくやしさを耐へ忍び来し五十年かな

畏くもいくさのあとをめぐり給ふ慰霊の御旅有難きかな

拓殖大学総長

小田村 四郎

慰霊祭

みどりなすあけぼの杉に圍まれて祭のにはは静かに暮れぬ

気づかひし雷雨遠のき半月の光りほのかに齋庭をてらす

警蹕の声おごそかになりひびき今しみたまは降りたまひぬ

まがごとの起りて乱るる世のさまをみたまはいかにみそなはずらむ



みたみわれらみたまのふゆを祈りつつ力あはせてみ國護らむ

大成建設(株)国際事業部企画推進室長 山口 秀 範

第四十回・厚木合宿閉会式にて作れる歌一首 短歌併せたり(八月八日)

二度唱ふうた 「君が代」の調べ 高らかに 響き渡れり 今をしも 四泊五日

の 集ひ果て 別れ行く時 さねさし 相模の國の 緑濃き 丹沢の麓

恵まれし 施設の中で 営みし 「合宿教室」 響き合ふ 歌声聞きつつ

若きらの 横顔見つつ ふとたどる 過ぎし一年ひととせ かつ浮かぶ 胸に広がる

振り返る この一年はひとせ 様々の 思ひ出に満つ 外国のとくに 長き勤めゆ 帰

り来て いくだもなきに 重き任 引き受けたれど 世の中の 流れわから

ず 学生の 氣質かたぎつかめず 参加者数 更によめざりき さはあれど 惑

ひなかりし 遠近とんちんに 心知る友 事毎ごとごとに たすけ給へり 励ましの 言葉

もさには 九州の 友らは常に 新しき 書勸かみめけり 関西の 友らは春

に 呼びかけし 学びの集ひ 北陸の 友は次々 新しき 友と語らふ

なかんづく 身近の友らは 足らはざる 我を補なひ 細々とこまこま 心碎きて

整へし 全ての手筈てはず なすべきを なし終へここに 迎へたる 二百四十人ふたももよそたり

今の世に 稀有なる集ひ 講義にも 班の語らひも 初めての 驚き戸惑ひ  
 若きらの 胸を揺すりぬ 日を経るに 心うち解け 今ぞ知る 「学ぶ喜び」  
 積もりたる 疲れも忘れ 並びある 顔見れば 誇らかな 喜びにみつ  
 閉会の 挨拶に続き 学生の 代表として 壇上で 思ひを述ふる 吾が  
 娘 いと健気なり 班友や 師に囲まれし 心通ふ よろこび語り 知識  
 もて 競はむとせし 自らの さかしらも語る 四半世紀 時は移りて  
 娘らも 共に連なる 有難き 学びの縁 世はいよよ 迷ひを深め こ  
 の縁 この学びの場 継ぎ行くは いばらの道か さはあれど しかあれば  
 こそ 行かめこの道

反歌四首

背筋伸ばし壇上へ進むその姿わが娘なれども尊しと見つ

「大好きなお父様へ有難う」と声つまらせつつ結びたりけり

師（小田村理事長）の賜ひし「名入りのみ歌」と吾娘の言一つしあれば何か望まむ

秋に向け力生れ来るきざしあり共に学びし集ひの中に

舞岡八幡宮宮司

關

正臣

長谷川先生のお話

五十年のけぢめの年にあらためてみことのりぶみ畏みまつる  
新しき事は今更何かあらむ只すめろぎに仕へまつらむ

小川先生のお話

千年のいのちもれる木を生かすつつましきほこりを述べ給ひけり  
木組みには寸法でなく木の癖を重んずべしと述べ給ひけり  
ひぐらしの頻鳴く丘に亡き友のみたまなごめを仕へむ今宵は

神奈川県立厚木南高校教頭

福田 忠之

班別研修

ひたすらに語らふ夜は短くてその間惜しみてなほも語らふ  
己が家と國の行く末案じつつ語らひて行くひとつ心に  
もろともに重なる心はうるはしき國のいのちのもとなるべし

小田原市立富永小学校教諭

岩越 豊雄

斎庭<sup>ゆにはば</sup>場にみたまをむかへ海山の幸を供へてまつるかしこさ  
祭文<sup>さいもん</sup>を読む友の声朗々と山にひびけり木霊となりて

大御歌に感応せしか一陣の風吹きおこり四<sup>し</sup>手をふるはす

山口県立下松高校教諭

宝 辺 矢太郎

竹内孝彦君の体験発表をききて

めだからの泳ぐを見ればさかりゆく子らの面輪の浮かびくるとふ  
まごころをかたむけましてをさならとまじはる君のととせたふとし  
をりをりの思ひのたけをことのはにこめて送りしこのととせかも

小柳陽太郎先生の御講義をききて

無線機をこはし最後の突撃をかけたる山崎大隊かなし

「よくやつた」との電報むなしと思ひきや「構はぬから打て」とのらす天皇は  
天皇の打ちたまひたる御嘉賞の電波は届きつ兵のみたまに

(株)日本興業銀行

小 柳 志乃夫

最終日

バスに乗り帰りゆく友との別れ惜しみ窓ごしに若きら握手かはしつ  
四泊五日共に過ごせし新しき友との別れ惜しむ若きら  
新しき友との交はりいよいよに深まるその日ひたに待たるる

(合宿に寄せられた会員の短歌)

元・福岡教育大学教授 山田輝彦

頭垂れ終戦の詔聞きぬたりかの夏空の烈日のもと

國の傷いまだ癒えざる時にして望み托さむ今日のつどひに

若きらの集ひの中に日の本のいのち支ふる力生れ来よ

日商岩井(株)ガス石炭本部副本部長 澤部寿孫

インドネシアより日本へのLNG輸入にかかはる契約延長合意書の調停式を終へ、東カ

リマンタンのエツカ基地訪問の途次バリ島に立寄る。バリ島にて八月五日

厚木なる七沢の合宿二日目は如何にあらむとしのぶ夜更けに

七沢の合宿しのぶバリ島の夜空をちこちに星かがやけり

待ち待ちし合宿なれば後髪ひかる、思ひに旅立ちて来ぬ

小川先生・長谷川先生御二人のお話し聞かばと思ひをりしに

四十回を数ふる合宿つつがなく終れと祈る夜空の星に

## あとがき

本会主催の第四十回合宿教室は昨年八月上旬の四泊五日の間、神奈川県厚木市立「七沢自然教室」を会場として営まれた。会場使用に際しては、「厚木市」と「厚木市教育委員会」の御後援をいただき、関係各位の行き届いたご配慮のもとに快適な研修生活を過ごすことができ、まことに有難いことであった。本書には、「学問と人生」のテーマのもとに壇上から語りかけられたすべての講義、講話の要旨を収録した。どうぞあらためてお読みいただき、存分に活用して下さいさるやうお願い致します。

さて今年の合宿教室は、来たる八月二日(金)から六日(火)の日程で、熊本県阿蘇国立公園、阿蘇町の「阿蘇の司・ピラパークホテル」で開催される運びである。招聘講師として前筑波大学教授の竹本忠雄先生、日本政策研究センター所長の伊藤哲夫先生をお招きすることに決定してゐる。全国の学生、青年諸氏の多数の御参加を願ひつゝ、あとがきとする。

平成八年三月一日

編集委員 山内 健生

磯貝 保博

—— 日本への回帰 ——

(第31集)

平成八年三月二十八日発行

定価 九〇〇円

送料 二四〇円

編者

大学教官有志協議会  
社団法人国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

発行所

社団法人国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一一八柳瀬ビル

振替(東京)六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします











大学教官有志協議会編  
社団法人 国民文化研究会

